

凍て刺す零氷の刀使

レイ 1020

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

荒魂――それは、人間に被害をもたらす怪物。人々からは怪異、妖怪、悪霊などと呼ばれているが、その正体は“ノロ”と呼ばれる珠鋼（御刀の元となっている鉱石）を精製する際に砂鉄から出る不純物から発生している。その荒魂は、不定期で絶え間なく現れ、人々を長年苦しめ続けて来た。だが、人々には希望があった。その荒魂を唯一祓うことができる存在――“刀使”。

芹代紫音。御刀“蒼月”に選ばれた紫音は、小さな頃から不思議な力があつた。そんな力も彼女を気にもとめておらず、人々を脅かす荒魂を祓うため今日も疾走する。いず

れその力が自分だけでなく自分の周りにも影響を及ぼすことも知らずに……。

基本的にストーリーに沿っていきますが、一部改変されている場面もあります。そんなところも楽しみにしつつご覧ください！

目次

始まりの編

プロローグ

1

紫音の日常

10

荒魂との死闘？

23

討伐完了！

33

久々の立ち会い

43

親衛隊への勧誘

56

紫音の決意

68

親衛隊第五席

78

早朝の邂逅

97

親衛隊の任務

105

紫音の実力

120

胎動編

認められた実力

134

御前試合

153

襲撃の一閃

163

襲撃犯達の追跡

176

譲れない想い

192

逃亡者の切なる想い

214

学長のお咎め

230

沙耶香の本音

243

月光下でのやり取り

254

伊豆での再会

273

伊豆での再会②

288

友として

303

奇策の一手

激戦のその後

やり切れない悔しさ

348 339 319

始まりの編

プロローグ

荒魂——それは、人間に被害をもたらす怪物。人々からは怪異、妖怪、悪霊などと呼ばれているが、その正体は“ノロ”と呼ばれる珠鋼（御刀の元となつている鉱石）を精製する際に砂鉄から出る不純物から発生している。その荒魂は、不定期で絶え間なく現れ、人々を長年苦しめ続けて来た。だが、人々には希望があつた。その荒魂を唯一祓うことができる存在——“刀使”。

またの名を神薙ぎの巫女と呼ばれ、御刀を持った女性のことを表している。彼女達は刀剣類管理局の元、任務をこなし人々を荒魂から守るべく日々戦っている。これは、一人の少女が様々な荒魂と臨戦し、仲間達と出会い、成長して行く物語である。

「ふうく……今日も疲れたな」

今日の授業が全て終わり、疲れた私は、学院の中庭のベンチに腰掛けていた。ここ、美濃関学院の中庭はまあまあ広く、私の他にも何人か訪れていた。

「勉強が嫌いってわけじゃないけど、それでも疲れる事に変わりはないんだよね……」

「あ、紫音ちゃんだ！おーい！」

「ん？可奈美じゃん。それと… 舞衣か」

「お疲れ様。紫音ちゃん」

くつろいでいた私に声をかけて来たのは同じクラスの衛藤可奈美と柳瀬舞衣だった。日常的にも2人とはよく話し、どこかに出かけたりもしている。いわゆるお友達というやつだ。

「ん？待てよ？可奈美がここに来たってことは…？？」

「うん！紫音ちゃん！今日こそ立ち合いしー」

「却下」

「えええ〜？またあ〜？」

もはやこれはお決まりになってしまっている。可奈美が放課後私のとこに来るってことはそれしか考えられない。これで何回目だろう？

「可奈美ちゃんもめげないね……………」

「だって〜、一度でもいいから紫音ちゃんの『我流』受けてみたいんだもん！」

「いや………… 私の剣なんて大したことないと思うけど？」

「そんなことないよ！この前の荒魂討伐の時だって私よりも多くの荒魂倒してたじゃん？そんな紫音ちゃんの剣がすごくないわけないよ！」

「……………」

うくん。そんな目をキラキラさせられてもな。確かに前の荒魂討伐任務の時はその場にいた誰よりも荒魂を討伐した。とは言ってもその荒魂自体そこまで強くなかったし、それに別に私は数を競ってるわけじゃないから特に気にしてなかったんだよね。だから特別すごいこととした自覚はないんだけどな？

「あのね～……いつも言ってるけど、私は荒魂には御刀を向けるけど人に対しては向けない主義なの。だから何度言われてもやらないよ？」

「でも紫音ちゃん。それじゃあ御前試合はどうするの？御刀を向けないんだったら試合に勝てない気がするんだけど？」

「もちろん棄権するよ。出たところで私に意味なんてないから。私は荒魂さえ倒せればそれで十分だし……」

「そうなんだ。でも勿体無いよね？もし紫音ちゃんが出たら良いところまで行くと思うのに……」

2人は歯痒そうな顔でそんなことを言っていた。御前試合というのは年に一回開かれると言われる刀使の頂点を決める催しのことだ。主に参加校は五箇伝——全国に5校設立された中高一貫の特別刀剣類従事者訓練学校で、神奈川県鎌倉女子学院、岐阜県的美濃関学院、奈良県の平城学館、京都府の綾小路武芸学舎、岡山県の長船女子園がそれに当てはまる。刀使はほとんど言っていて良いくらいこの五箇伝から出ているため、実質この頂点に立つことこそ刀使の頂点に立つと言われている。各学院において優秀な成績を残すことは名誉にもなり、名を轟かせる重要な機会になる。だからこの御前試合はいろんなところに力を入れてるらしいけど、私にとっては名誉なんてどうでもよかった。

人同士で争ってなんになるって言うんだ。御刀は荒魂から人々を守るためにある私たち刀使の相棒。その相棒を荒魂でもないやつに向けるなんて絶対にやだ。

「まあ、私の代わりに2人が頑張つてよ。私も応援してるか——」

応援してるから！そう言おうとしたその時、学院中にサイレンが鳴った。このサイレンが鳴ったと言うことは——

『荒魂発生！荒魂発生！刀使の皆さんは直ちに現場に向かってください！繰り返しま
すー』

「話してる場合じゃなくなっちゃったみたいだね！行こう！舞ちゃん！紫音ちゃん！」

「うん！」

荒魂発生の際を受けた私たちは直ちにスペクトラムファインダーを使い、目的の荒魂
がある場所まで直行した。

「ほい、これで最後ね〜」

目的の場所についた私たちは、早急に荒魂達を討伐した。今回は私たちの方が人数が多かったこともあって、苦勞なく討伐することができた。

「2人共お疲れ様」

「お疲れ〜」

「良ければ……クッキー食べない？ 疲れた時には甘いものが一番だから」

「わく、持って来てたんだ〜！ 食べる食べる〜！」

「私も一枚もらうかな」

私と可奈美は舞衣が取り出したふくる鼓の中から一枚だけクッキーを取り出し、口に運んだ。ほのかに香るバターの風味と甘すぎないほどに使われてる砂糖とミルクの味が口いっぱいになり、疲れた体を癒していくのが分かった。

「おいしい〜！」

「そ、そう？よかった〜……」

「舞衣、前よりもクッキー作るのが上手くなってない？これずつごく美味しかったよ？」

「そうかな？でも、最近はよく作ってたから自然と腕も上がったのかもしれないね」

「絶対うまくなってるよ〜」

やっぱり舞衣のクッキーは最高だな。その後も私たちはクッキーを摘みながら学院に戻っていった。御前試合もまじかに迫ったこの時期、周りの刀使たちも熱が入ってるのに対して、私は普段と変わらない調子で帰宅した。

紫音の日常

私の1日は朝の素振りから始まる。朝は基本的に5時に起き、素振りを適当な数こなしてシャワーを浴びて朝食をとって学院に向かうと言うのが私の朝のルーティンだ。

学院では実技の授業以外は真面目に取り組んでる。なんで実技は真面目にやらないかって？だって実技は最後に模擬戦とか必ずやらせるんだもん。だから気乗りなんてしないから適当に流してるんだ。もちろんその模擬戦にも一度も勝つたことは無い。そんなこともあつて、学院での私の評判ときたら…… “勝てない刀使” だとか、“墮ちた刀使” だとかそんな評判ばかりだった。別に私は評判とかどうでも良いんだけど、周りが騒がしくなるのは嫌なんだよね。そんな時は大体中庭に逃げ込んで。中庭なら人気も少ないし静かだから落ち着けるから。

そんな感じで私の学院生活は問題なく(?) 過ごしている。そんな中で、御前試合の校内予選が美濃関学院でも行われた。もちろん私はやる前に事前に先生に話しておき、

棄権した。先生も私の実戦での戦いを見ていた為、もつたいないといった顔になっていたが、気にしない事にした。

結果論で言えば、可奈美は準決勝で敗退。舞衣は準々決勝で負けてしまった。それでも1年生でそこまで価値上がれること自体すごいことらしく、先生や学長も驚きを隠せなかったみたいだった。

「惜しかったね可奈美。あと一回勝てば鎌倉での本戦に行けたのに」

「うん……。でもしょうがないよ。まだまだ実力が足りないってことだから……」

「そうだね……。私も同じ気持ち……」

2人とも負けたことが相当きてるのか、浮かない表情を浮かべていた。そんなに気に病む必要無いと思うんだけどな？

「来年もあるんだし、次挽回しなって。そだ、気晴らしにどっか遊びにいこっか！最近出

来た駅前のアイスクリーム屋、前から気になってたし」

「遊びに!?行く行く!」

「うん。私も前から行きたいと思ってたの!」

「よし!それじゃ決定!じゃ、早速行こっか」

その後、私達は駅前のアイスクリーム屋に行つて新作アイスをたらふく食べた。特に私と可奈美はアイスを3本食べた為、その後お腹を下したのは……私のミスだった……あはは。

それからしばらくは何事もなく平穏な毎日が過ぎていった。毎日というほどでも無いが、出現する荒魂をみんなで討伐しながら学院で勉強、そんな生活が続いた。このまま平穏な日々が過ぎていつてほしいという気持ちではあつたが、その気持ちは荒魂に

は…… 届かなかった。

「何？この反応……」 「今までこんな反応ってあったっけ……？」

周りにいる刀使達が揃いも揃ってそう呟いていた。ことの発端は数十分前に遡る。いつものようにスピーカーから荒魂の出現と出動命令が出された為、私達は現場に向かったんだけど、その時のスペクトラムファインダーの反応がいつもと違っていたんだ。とは言っても、単にいつもより反応が大きいつてだけなんだけどね。

「反応大きいけど、大丈夫なのかな？」

「あれ？美炎にしては随分と後ろ向きだね？もしかして怖い？」

「うん…… そうだね。正直怖い。だって、こんな大きな反応これまでだって見たことないんだから怖いのは当然だよ。むしろなんで紫音が冷静いられるのか不思議なんだ

けど?」

美炎は首を傾げながら私にそう聞いてきた。この子は安桜美炎。最近知り合ったばかりだけどそれなりに話す仲だ。可奈美と舞衣とも友達らしい。それにしても冷静かゝ…… 確かに私以外はどこか落ち着かない様子でそわそわしてる感じだ。可奈美達も例外ではなく、少し身体が強張ってるように見えた。

「何でだろうね? 自分でもなんで落ち着いてるのかわかんない」

「はあく、今はその紫音の凶太さが羨ましい……」

そう言いながら美炎は可奈美達のところに戻っていった。それから数分後、ようやく反応のあった場所に着いたんだけど、そこで問題が起こった。

「荒魂が…… いない?」

場所は確かにここであつてはるはずなんだ。反応もここからだし。なのにない。私

を含めたその場にいた刀使全員が困惑していた。ここは街のど真ん中だ。山のように隠れるところもそうは多くはない。ならば何故いない……？

「どうしよう？とりあえず親衛隊の人たちが来るまでもう少し探してみる？」

1人の刀使が不意にそんなことを言った。今回の荒魂討伐は今までの反応よりも反応が強かったため、念を入れて鎌倉から親衛隊を派遣して貰ったらしい。親衛隊というのは折神家直属の部隊で、御前試合や荒魂討伐などで活躍した刀使が選ばれたエリートだ。基本的には折神家当主の警護などを仕事としているが、異例の事態のみこうした地方への荒魂討伐にも尽力してくれてる。その親衛隊が来るのであればここは来るのを待ってるのが確実かつ効率がいいんだらうけど、どこか腑に落ちなかった。

「（スペクトラムファインダーが故障してるわけじゃない。じゃあ、荒魂は間違い無く……今この場にいる？）」

だとしても、一向に姿は見えない。どこかに隠れてる様子も無い。だとすると……!?まさか!?私は咄嗟に視線を下に向けた。そして、地面にスペクトラ

ムファインダーを置いて反応を見てみた。すると――

……
反応が今まで以上に大きくなった。

「っ！やっぱり……。可奈美！」

「どうしたの紫音ちゃん？」

「今すぐみんなをここから離れさせて！地面の中に荒魂がいる!!」

「ええ!?!ほんとに!?!」

「さつきスペクトラムファインダーで確認したから間違いないよ。とにかくみんなを一旦退かせて！このままだとみんな巻き添えになる！」

「う、うん！わかった！」

そう頷いた可奈美は、すぐさまこの状況をみんなに伝えにいった。なんで可奈美に頼んだかという、可奈美の言うことならこの場にいる刀使達は信じてもらえると思っただからだ。可奈美は先の御前試合で1年生ながら準決勝まで勝ち上がったほどの実力の持ち主。それはこの場にいる刀使達はみんな知っていた。だからこそ自分より腕の立つ可奈美の言うことは信じると言うのが普通だ。少なくとも御前試合の予選すら出ない私なんかよりはよっぽど説得力があると思っただから可奈美に頼んだんだ。

私の推測は正しかったみたいで、その場にいた刀使達は可奈美の言葉を聞くと、一斉に反応のある場所から退いてくれた。とりあえず、安心だ。

「紫音ちゃん！こっちはオツケーだよ！紫音ちゃんも早く！」

「分かった！今行く……！！」

私も一旦離れよう！そうしようとしたんだが、その前に私の足元が……と言うか地面全体が突然揺れ始めた為、それは叶わなかった。揺れの範囲はとてん広かつたらしく、退かせた刀使達もその揺れをまともに受け、立ち上がれなくなっていた。私は腰を

「え!?! ちょっと紫音ちゃん!?!」

「可奈美と舞衣はみんなのこと守ってて! ここは私だけで充分だから!」

「何言ってるの!?! 一人じゃ危ないよ! 私と一緒に!.....」

「だーい丈夫だって! 現にほら!」

「へ!?!」

私が掲げたそれに、可奈美も舞衣も他のみんなもみんな啞然とした表情を浮かべた。
私の掲げたもの..... それは――

「紫音ちゃん? それは.....?」

「ん? もちろんこの荒魂の腕だけ?」

「ええ!？」

2人は信じられないと言った表情になっていた。そりやそうか。こんなものの数瞬でこんなバカでかい荒魂の腕を簡単に斬り下ろしてしまっただから。

「とにかくさう……この荒魂は私に任せて2人はみんなの避難をお願い!ここにいと巻き込んでから。それに、せつかく久しぶりに良い運動できそうな相手が出てきたんだし、邪魔はしないでもらいたいんだよね」

「……」

その言葉に2人は押し黙ってしまう。私の言ったことは事実だ。ここ最近の荒魂は言つて仕舞えば、弱かった。もちろん弱ければ弱いほど任務の遂行が楽になるから良いとは思うんだけど、それでもやっぱり物足りないと言えば物足りない。自分の力を出さないで勝ってしまうと言うことは酷くつまらない。そんなことを最近はずつとやって来たんだ。そんな事に飽き始めて来た矢先に今回のような荒魂が出現した。久々に燃

えるような戦いに私自身もテンションが上がっていた。だからこそ、他のみんなには邪魔になって欲しくなかったんだ。

「大丈夫！私は絶対死なないから！……よし分かった！もしこの戦いで傷一つでも作って帰って来たら2人には好きなの奢ってあげる！その代わり無傷で帰ったら2人が何か私に奢ってね〜！」

「ふ……ふふ、あはは！紫音ちゃんは相変わらずだね。うん分かった。じゃあ紫音ちゃんには少しでも傷を作って帰って来てもらうかな？」

「いや……そこは私の無事を祈るところでしょ舞衣……」

奢りという単語に反応した舞衣はおちやらけてそんなことを言い出した。このとき私は決めた。絶対に舞衣に奢らせる！と。

「私も分かった！じゃあ一旦私たち離れるけど……紫音ちゃん、ちゃんと無事で帰って来てね？」

「もちろん！無事で帰って2人に奢らせるんだから！」

そう約束した後、私はこのまま留まり、可奈美たちは別方向に移動していった。これでようやくまともに戦うことができる。そう思えると私の口は自然と釣り上がってしまう。そして、可奈美達が見えなくなったところで私は目の前の荒魂と向き合った。

「待たせてごめんね。でもこれで思う存分戦える！さあ……やろう！」

そして臨戦体勢に入った私だが、この時とかずつと私は気付いていなかった。戦ってる時の私の右目が自分の目の色の藍色ではなく、金色になっていた事に……。

荒魂との死闘？

紫音が荒魂と戦いを始めようとしている中、とあるへりの中では――

「今回の荒魂の出現は、まさかと言った感じでしたわね？」

「ああ、僕が話を聞いたところでは今回の荒魂は地中深くに長年潜んでいたみたいで、今まで力を蓄えていたらしい。それが今になって地上に現れたという事だ」

「なるほど……では、最悪あの力も使うことも覚悟しておいた方が良さそうですね……」

「……そうだね」

2人の刀使が今回現れた荒魂について話し合っていた。

「それにしても、今回は別に寿々花までくる必要はなかったんじや無いのか？ 出勤命令は僕にしか出ていなかったのに…… まさか紫様に直接出勤を要請しに行くなんて」

「いえ、真希さんは何をしでかすか分かりませんから。ここはもう一人ついて行った方がいいと判断したままですわ。誰か一人かけても親衛隊じゃ無くなってしまうんですから」

「……」

寿々花の過保護なその一言に、少々困った顔をした真希。そう、この2人こそ今回の荒魂討伐に駆り出された親衛隊なのだ。

一人は獅童真希。親衛隊の第一席で、凛とした表情をしていて任務とあらばどんな事もこなす刀使の鏡とも言える女性。平城学館出身で年は15。そして何を隠そう、この獅童真希は先の御前試合とその前の御前試合で見事優勝を勝ち取っている日本一の刀使なのだ。その実力が認められ親衛隊に配属となったのだが、本人は自分の実力に決し

て驕る事なく、今現在も鍛錬は欠かしてない。女性とは思えないその甘いマスクのおかげもあって、御前試合などではいつも黄色い声援が飛び交うほどに女子人気が高い。

もう一人は此花^{このはなすずか}寿々花。親衛隊の第二席で、物腰柔らかな性格をしていながら任務だけではなく作戦指揮も取れる万能タイプの女性。真希とは前とその前の御前試合で決勝を闘った仲だが、どちらも真希に勝つことができず準優勝に終わっている。そのコンプレックスもあって、それからは真希のことは同じ親衛隊の仲間としても見て、ライバルとしても見るようになった。だが、真希はその事に気付いていない。

「現在は現場の近くにいる刀使達に対処をお願いしているが、正直言って今回は相手が悪い。その場にいる刀使だけで対応するのは少し難儀だ」

「だからこそ私たちの出番な訳ですわね。真希さん…。私たちも気を引き締めないといけませんわね」

「ああ……」

改めて気を引き締めなおした数十分後、ヘリはようやく目的の場所に到着した。

「さて……真希さん。現状はどうなっています?」

「報告によれば、人々の避難は完了しているようだ。怪我人の報告も受けて無い……ただ……」

「ただ?」

真希は先ほど現場にいた刀使の報告の中で、頭を抱えそうなことを聞いた。それをどう寿々花に説明していいのかわからなくなってしまい言い澁んでしまう。

「先ほどの刀使……衛藤と言ったか?彼女から話を聞いたところ、どうも彼女の友達が荒魂を足止めしているらしいんだ……」

「はあ!? たった一人ですか!」

「ああ、それも置き去りにしたとかではなくて本人がそれを望んでいた行為らしい」

「何て無茶を…… 真希さん！」

現場を離れた可奈美達は親衛隊と合流していた。その可奈美から報告を受けた2人はすぐに形相を変え、現場に急行した。

「ああ！行くぞ寿々花！」

その速度は一般の人々では決して真似できない速さだった。

「着いた！荒魂は…………… つ!？」

「…………… え？」

ようやく現場についた2人が見たのは…………… 両断にされた今回の荒魂とされる物体の前に立っている一人の女子という衝撃的な光景だった。

「君は……………？」

数分前、私は目の前の荒魂と戦っていた。【写シ】を張った後、蒼月を振りかぶり、荒魂の足を斬るべく突進した。

「ギャアアオオオーーー!!!」

もちろんそうはさせないと残ったもう一つの腕を荒魂は私に向かって振り下ろして来た。あれをまともに受けたらただでは済まないだろう。でも……私には視えていた。あの腕がどこに、どのタイミングで、どの速さで振り下ろされるのかが……。だからーーー

「対処は簡単つと!」

私は最も簡単にその腕をかわし、そのままカウンターで腕を斬り落とした。

「グギャアアア~~~~!!」

「今日の私の蒼月も眼も絶好調だね！」

腕を斬られ叫び声を上げる荒魂を尻目に私は蒼月を撫でた。この子は御万お母さんから受け継いだ大切なもの。お母さんは……もう死んじやっていないんだけど、私はこの蒼月をお母さんだと思つて大事にして来た。戦つてる時は、なんとなくお母さんが力を貸してくれてる気がして、私も戦つてる時は嬉しいんだよね。お母さんが近くで見ている気がして。

眼のことに関しては私にも分からない。いつの間にか戦つてるときに相手の次の手が読めるようになってたり、少し先の未来が見えるようになってたりしてたんだ。いつ使えるようになったのかも分からないけど……まあ、でも今は——

「こいつを倒さないかね…… やあっ!!!」

撫でるのをやめた私は、未だに呻き声を上げている荒魂に向かって蒼月を横薙ぎに薙ぎ払った。蒼月が荒魂の身体に触れたかと思うと、そのまま荒魂を…… 真つ二つに斬り落としてしまった。呻き声を上げていた荒魂は、体が斬られた途端呻き声が叫び声に変わり、自分の体がずり落ちていくのを確認したまま…… 絶命した。

「よし……これにて一件落着だね!」

そういいながら私は御刀を納め、一息ついた。この後どうしようか…… まずこの荒魂のノ口を回収して…… それから……

「んっ」

後ろに人の気配がしたから振り返ってみると、そこにいたのは……

「……………」

私は知らない2人の女の人がその場で驚いた表情で立っていた。

討伐完了!

「え〜と?あなた達は?」

後ろを振り返った時にその場にいた2人の人に私は声をかけた。

「あ、ああすまないね。ブーツとしてしまって……僕は獅童真希。折神家親衛隊だ」

「…… 同じく親衛隊の此花寿々花ですわ」

「親衛隊…… ああ!あなた達が今回助力に来てくれた親衛隊でしたか。遠くからわざわざありがとうございます」

「それは構わないんだが…… どうやら僕たちの出番はなさそうだね……」

獅童さんはそういうと私の後ろの荒魂を指さした。ああ……………確かにもう私が倒しちゃったから親衛隊の人たちは必要ないよね……………。

「その荒魂は……………あなたが？」

「え？あ……………はい。その……………まさかっただですか？」

何がまずいかというと、せっかく鎌倉から遙々来てもらった親衛隊の2人に何もさせないまま解決してしまったことがだ。なんか……………気まずい。

「いや……………結果として荒魂は討伐出来たのだからまずくはないんだが……………僕も寿々花も少々驚いていてね」

「ん？何がですか？」

なんとなく想像できるけど一応聞き返してみることにした。

「貴方の今回の“行動”と“強さ”にですわ」

「……」

ああ、やっぱりね。行動も強さも驚かれる理由はなんとなくわかる。行動に関しては私一人陽動に立ってその間にみんなを逃したこと。強さに至っては一人でこのバカでかい荒魂を討伐したこと……だと思う。

「現場の刀使だけでは対応が難しいと思われたから僕たちが派遣されたんだけど、どうやら情報不足だったみたいだ。君のような刀使がいるなんて……」

「買いかぶりすぎですよ。私は言うほどすごい刀使じゃありません。現に私は御前試合では全く成績は残していません」

「貴方の名前は？」

「芹代紫音です」

「芹代…… 確かに本選にはそんな名前はありませんでしたわね。では、予選での成績は？」

「一回戦敗退です」

「はあ!？」

獅童さんと此花さんが同時に声をあげ、信じられないとでも言いたげなくらいすごい表情をした。私は嘘ついてないんだけどなく。御前試合の予選は棄権したんだから当然私は一回戦負けになる。何も嘘はついてないよ？

「嘘は言っていないですよ？帰ったらでも良いので試合結果のところ見てください。そう書いてありますから」

「あ、ああ…… そうするよ。とにかく、先に荒魂を討伐してくれたことに関しては礼

を言わせてもらうよ。ありがとう」

「いえいえ、どういたしまして」

どうにか納得した感じの獅童さんと、未だ少し納得できてない此花さんは、“ノロ”の回収に向かった。ノロっていうのは荒魂の元になっている物質のことで、主に珠鋼を精製する際に出る不純物のことを表している。これがたくさん集まることで荒魂が生まれるってこと。それでなんで回収するのかっていうと、なんでもほとんどのノロを折神家が管理しているらしくて、そうすることで荒魂の発生を防いでるんだって。だから討伐した荒魂はすぐにノロを回収するということも刀使の役目となっているんだ。

「さて…… ノロの回収は親衛隊のお二人に任せて、私は…… お？」

可奈美達と合流しよう! そう思ったんだけど、それはどうやら省かれそうだった。なぜなら……

「紫音——!! 無事——!?!」

「紫音ちゃん大丈夫!?!怪我してない!？」

「紫音ちゃん!!」

向こうからこっちに来てくれたからだ。なぜか先頭切ってこっちに近づいてくるのが美炎なんだけど、この際気にしないことにした。

「無事無事!傷一つないよ!」

「よかったよ……紫音ちゃんに何かあったら私泣いちゃうとこだったよ……」

「そう言いながら可奈美少し泣いてるじゃん……」

「うう……泣いてないよ……」

隠そうとしてるけど全然泣いてるのを隠し切れてない可奈美を美炎と舞衣が慰めた。

慰めてる二人もどこか疲れた表情をしていた。それだけ今回の任務は大変で辛く、怖かったんだろうな。みんなまだ子供だし……私もだけど。

「とりあえず帰ろっか！早くお風呂入って寝たいし……」

荒魂討伐に夢中で気がつかなかったけど結構良い時間帯になっていた。私たち子供はそろそろ寝るべき時間だ。そのまま私たちはなぜか私まで可奈美の慰めに参加させられたまま、帰路につく事になった。

「そういえば紫音ちゃん？」

「ん？どうかした？」

美濃関学院に戻っている道中、舞衣が唐突に聞いて来た。

「本当にさっきの荒魂、紫音ちゃんが討伐したの？」

「うん。あれ？もしかして信じてない？」

「ううん。信じてないわけじゃなくて……すごいなーって思っちゃって……」

「そうかな？……でも、舞衣がそう言うんならすごいのかもね」

「うんそうだよ。ほんと……御前試合出れば良かったのに……」

舞衣がポツリとそう言った。そして、それに反応した可奈美と美炎も同じようなことを口走った。

「紫音はこんなに凄いの誰にも知られないなんて勿体無いよ？」

「来年は出てみてよ!きつと本選にだって残れるよ!」

「いや……別に目立つために御刀振ってるわけじゃないし、そう言うのあんまり興味ないんだよね……」

そうは言われても私の答えは変わらない。日本一の刀使になったからって荒魂に勝てるわけではない。そんな肩書を持ったところで荒魂から人々を守れると言う保証があるわけでもない。そんななんのメリットも無い催しに出たって時間の無駄だよ。だったらひたすら鍛錬しての方がマシ。というか……これは話題を変えた方が良さそう。そう思った私はそういえばと2人と交わした約束のことを思い出し、2人に聞いてみた。

「そういえば忘れてたけど、約束は守ってもらおうよ?可奈美、舞衣?」

「え!?……え〜つと、何のことだっけ?」

「しらばっくれても無駄だよ？約束したでしょ？私が無傷で帰ってきたら2人から何か奢ってもらおうて！」

「ふふ、そうだったね。わかった、私と可奈美ちゃんて何か買ってあげるね。それで良いよね、可奈美ちゃん？」

「ううう…：… わかった」

よっし！奢り決定！心の中でそうガッツポーズをした私は、後日絶対に大好物のプリンを大量に奢ってもらう！と心に決めたのだった。

久々の立ち会い

鎌倉、折神家執務室内にて――

「これか……」

任務から戻った真希は、あの荒魂を討伐した芹代紫音という刀使が言ったことが正しいものかを確かめるために、書棚から御前試合の試合結果が記載されている書類を取り出した。別に信じてないわけではないが、何せ彼女が同じ親衛隊の一人と大して変わらなくらいの子供だったのだ。それは調べたくなるのもわかる。

「確か彼女は美濃関だったな……」

パラパラとめくり、美濃関学院の校内予選の結果が載っている書類を探した。しばらく探しているうちに目的の「美濃関学院校内予選表」が出てきたため、真希はその表か

ら芹代紫音という名前を探した。すると――

「あつた……………確かに一回戦敗退となつてゐるな。でも……………」

彼女の言つてゐることは確かに正しかった。だが、そこに記載されていたのはそれだけでは無く、それにまた真希は頭を悩ませた。

「棄権……………か。なるほど、これならば出て来なくて当然か……………」

ふつ……………と笑いながらそう呟いた真希は、そつと書類を棚に戻し、執務室を出てある部屋に向かった。

あの荒魂討伐から2日経った。それからはその時ほどの荒魂が出る事は無くなって、いつも通りの荒魂討伐をするようになっていった。とは言っても、あんだだけでかい荒魂が出る事自体異例らしくて、滅多に出現しないみたいなんだよね。

「まあ…… 平和なのは良い事なんだけどね……」

「何一人でぼやいてるの?」

「ん?」

昼休み、中庭で一人ベンチで座って休憩してた時に、後ろから声がかけられた。ん？
と思つて振り返つてみると居たのは可奈美だった。しかも何かニヤニヤしてる
し……… なんか嫌な予感がするんだけど？

「いや、独り言。それより…… 何で可奈美はニヤついてんの？…… 気持ち悪いよ
？」

「いや、今日やつと〴〵紫音ちゃんと立ち合いができる〴〵 と思つちやつたら嬉しくつ
てさ〜！」

「……」

ん？空耳かな？今聞き捨てならないことを聞いた気がする……。

「ごめん可奈美？もう一度言つてくれる？」

「へ？今日やつと紫音ちゃんと立ち合いができるって思っちゃった？」

「……」

うん、聞き間違いじゃなかったみたいだ。ってか何で今日はもう私が立ち合いするのと前提なの!？」

「あの～可奈美さん？毎回言ってるけど立ち合いはしないからね？今日はなんか違うパターンで頼んできたけど私の意思は変わらないー」

「ふっふっふっ、これをみてもまだ同じことが言えるかな？」

そう言った可奈美は、何か後ろに向けて……正確には植えてある木に向かって手を振って合図を出した。それと同時に、中庭の木の後ろから何故か舞衣が出てきた。手に信じられないものを持って……。

「舞衣？何でここに……って、あああ!!!それ、私のプリン!!!」

それは…… 以前に私が買っておいた季節限定のプリンだった。有名なデザートの職人さんが作ったって言われているプリンだったからお店に来た時にはすでに凄いや行ができてたのは今でも鮮明に思い出せる。そんな苦しい思いをしてようやく買えたプリンを何で舞衣が持つてるの!?

「ごめんね紫音ちゃん……。可奈美ちゃんがどうしても協力して欲しいっていうから……。」

「協力!?!」

舞衣の言葉を聞いた後、私は再び可奈美の方を向いた。

「紫音ちゃん! そのプリンを返して欲しいなら私と立ち会いしなさい! さもなければそのプリンは私と舞衣ちゃんですっ飛ばします!」

「ううう……。卑怯な手を……。」

そんなこと言われたら受けるしか無いじゃん!! あく……多分可奈美と舞衣だからこそ出来た手だな……。2人は私が大のプリン好きだつてことを知っている。だから、もしプリンを人質にとれば私はきつと話に乗る。そう判断したんだろう。私としたことが迂闊だったなく……。今後は絶対にプリンは肌身隠さず持つてよ……。

「紫音ちゃん……。もう諦めた方がいいよ?」

「はあく、つてか、舞衣にもできれば止めて欲しかったよ……。」

「ごめんね? でも、少し気になっちゃつて……。紫音ちゃんの初めての立ち会いが見れるつて思うと……。」

「……。」

舞衣に関してはその興味本位で引き受けた話なんだろう。まあ、もうここまで来ちゃつたら引き下がれないか……。しようがない! プリンのため、ここは我慢しよう

!

「わかったよ……もう!!やるよやればいいんでしょ!!」

「やったー!!」

私のやる宣言を聞いた可奈美は嬉しいのか小躍りし始めた。こうして放課後、久々の立ち会いをする事になった私なのだった。

「さて！やろうか！」

放課後になり、御前試合の予選会場にもなった訓練場に私たちは足を運んでいた。無論ここで立ち会いを行うためだ。

「やったらちゃんど返してよ？」

「うん！」

気合い入りまくりの可奈美は勢いよく御刀“千鳥”を抜き、構えた。それに合わせて私も蒼月を抜き、静かに構えた。そして、いつものように右目の色が変わった。今この場にいるのは私と可奈美、そして審判の舞衣だけなこともあり、静かだった。

「両者構え！【写シ】！」

「はあ！」

「ふっ！」

立ち合いをする時には始めに「写シ」をはるのが鉄則だ。これをしないとヘタをする
と怪我じゃ済まなくなる可能性があるからだ。

「始めっ！」

「やああ!!!」

仕掛けてきたのは可奈美からだ。【迅移】を使って一気に間合いを詰め、一撃必殺
の一閃を加えようとしてきた。でも——

「右上段の一振り（サッ）」

「あっ!？」

右上から斬りかかってきた可奈美の攻撃を私は視た情報をもとに、最も簡単に受け止め、そのまま後ろに受け流した。

「くっ……」

「凄い…… 私には何も見えなかったのに……」

受け流された可奈美は態勢を崩しながらも何とか倒れずにその場に踏みとどまった。

「やるじゃん! 私は転ばせるつもりでやったの?」

「紫音ちゃんも…… まさかあれを防ぐなんてね……」

「校内予選準決勝進出者に褒められて私は光栄だね」

「そう?でも、照れてる余裕なんてあるの!?!はあ!!」

今度は目の前から可奈美が消えた……わけでは無く、【迅移】を2段階にあげて速度を上げたんだろう。それで持つて今可奈美は私の背後にいる。そこから速度に乗って私を斬るつもりみたいだね。はあ……というかこれは勝負なんだし“この眼”を使っちゃうと意味がない気がするんだよね……。なんかズルしてるみたいでなんかやだ。でも自発的に抑えるなんてこと出来ないし、可奈美には申し訳ないけど……ごめん!

「もらっ……!?!」

「やあっ!!」

後ろから向かってきた可奈美の一閃を一瞬で躲した後、間髪入れずに無防備になっている胴に向かつて私は蒼月を繰り出した。

「うわああ!!!」

私の一撃が見事に決まり、写シを剥がされた可奈美はそのまま地面に倒れ伏した。勝負あり……………だね。

「そこまで！勝者、紫音ちゃん！」

舞衣からの試合終了の合図が出たため、私も写シを解いた。それに連動するように右の目も元の藍色に戻った。

「……………」

3人しかいない訓練場。その外に、その立ち会いを見ていた人影がいたことを3人は知らなかった……………。

親衛隊への勧誘

「いや〜…………… 負けたよ〜…………… まさかここまで強いなんて思わなかったよ」

「うんほんと……………。可奈美ちゃんがまるで歯が立たなかったなんて……………」

立ち会いが終わった後、無事にプリンを奪還した私は、2人と一緒に寮に戻っていた。その道中、2人はずっと今回の立ち会いの感想を言い合っていた。

「全く…………… こういう事は今後絶対やらないですよ？」

「だって〜、紫音ちゃんの強さが知りたかったんだもん〜ん！」

「それなら、可奈美がもう少し強くなってからまた挑戦してきなよ。気分にもよるけどその時にはちゃんと相手するから」

「え!?ほんと!?!」

「うん、ほんと」

「わかった!もつと鍛錬して、次こそは紫音ちゃんに勝つ!だから、それまで待ってて
!」

「わかった。約束!」

私たちはお互いに指切りをした。次の再戦はいつになるかわからないけど、次に戦う時には今日の比ではない事はこの時悟った。まあ…… たまにはこういうのも悪くないよね……。

寮の近くまで来たあと、可奈美たちは用があるからとその場で別れた。私も戻ろうと寮の方へ足を向けた時だった。

「ちよつといいかい？」

後ろから声をかけられた。振り返ってみるとそこに居たのは――

「あれ？ 確か親衛隊の……」

「獅童真希だ」

「あゝそうそう！ 獅童さんだ！」

なぜか親衛隊の獅童さんが居た。なんでこの人が？今は鎌倉にいるんじゃない？

「あのく今日はどう言ったご用件で？また荒魂が出ましたか？」

「いや、今日は君に用があつて来たんだ」

「用……ですか？」

「そう言う獅童さんに私は戸惑いを覚えた。親衛隊の人がわざわざこつちにまで来てまで私に用があるなんて一体どんな用があるんだ？もしかしてこの前の荒魂討伐の件かな？」

「ああ、まず単刀直入に言おう」

だが、その私の予想はハズレだった。

「君に親衛隊に入ってもらいたいんだが、いいかな？」

「……………」

……………はい？今なんて言ったこの人？親衛隊に入って欲しい？この私が？……………
何で!?

「はあ!?!親衛隊!?!私が!?!何で?どうしてですか!?!」

「何でもどうしても、これは紫様のご命令なんだ。〃芹代紫音を親衛隊に迎え入れるように〃〃という……………」

「へ!?!……………御当主様が?」

ことの発端は2日前まで遡る。紫音の試合結果を知った真希は、その報告を折神家当主、折神紫にしに部屋に向かっていた。

「失礼します」

「入れ」

ノックをし、中に紫がいることを確認した真希は静かに中に入った。

「獅童、早速だが…… お前が報告したいことというのは何だ？」

「はい、先の荒魂討伐の報告をすでに紫様は受けていると思われませんが……」

「ああ、一人の刀使がその荒魂を討伐したそうだな」

「はい、それでそこまでの腕をしているのに御前試合では名前がなかったので不審に思
い、先ほど彼女の試合結果を確認したのですが……」

「どうした？」

「……彼女は予選一回戦を〃棄権〃していました」

「ほう……？」

真希の言いたいことが何と無く理解出来たのか、紫は少し目を見開いて答えた。

「なるほどな。棄権しているのであればその刀使の実力が知られていないのは当然。そ
してその刀使は単に立ち会いが苦手なのか、もしくは何か他の理由があつて棄権したの
ではないか？……だが実力はある……そう言いたいのか？」

「はい…… おっしやる通りです」

「その刀使の名前は？」

「芹代紫音です」

「“芹代”……」

紫はその名字を聞いた途端、何やら考え込むようにしたがすぐに何か答えが出たのか視線を真希に向けた。

「…… 獅童」

「はっ」

「その刀使、“芹代紫音を我が親衛隊に入隊”させる…… もつとも、お前は最初からそのつもりでここに来たようだがな……」

「はは…… 紫様には何もかもお見通しですね。承りました！」

「手続きはこちらで済ませておく。お前は芹代を説得するだけでいい」

「はっ！」

そして今に至る。こうなった経緯を獅童さんに聞かされた私は、正直頭の中がグルグル回っていた。そんなの当たり前じゃん！急に押しかけて来ていきなり御当主様の命令だから親衛隊に入れなんて言われたら誰だつてそうなるでしょ！

「しかもその話だと、獅童さんも私を親衛隊に入れたがつてたみたいじゃないですか？」

「ああ、それは事実だよ。君のその実力ならきつと僕達の……いや、紫様の力になれるって思ったからね」

「買いかぶりすぎですよ？それに私が御刀を振るうのは荒魂だけですから……。それ以外には決して抜きません。なので警護も任務の親衛隊には向かないと思いますけど？」

「そう言ってる割にはさつきは立ち合いをしていたじゃないか？」

「え!？」

さつきの立ち会い？それって可奈美とやったあの……？……え!？まさか……。

「見てたんですか!？」

「ああ、外から見させてもらったよ。最初から全部ね」

「見なかった事には……」

「出来ないね。むしろあの立ち合いを見た事でさらに君の実力が知れたんだ。余計に君が欲しくなっちゃったよ」

「ううう……」

まさか見られてるとは思わなかったな……。それにしても親衛隊か。選ばれた刀使のみが配属されている最強の隊。刀使ならばここに配属されるのを夢見てる人も少なく無い。私もその一人だった。そんな親衛隊からスカウトが来たんだ。何をためらう必要がある！って思うんだけど、今はまだ頭の整理が追いついていないからこうなってるだけなんだ。とりあえず一旦整理したいから――

「すいません。一日待ってもらえませんか？少し頭の整理をしたいんで……」

「ああ、構わないよ。では、明日の朝にまた来る。いい返事を期待してるよ！」

そう言って、獅童さんはその場を後にした。残された私は、そのまま獅童さんの姿をボーッと見送っていた。

「親衛隊か……。……」

紫音の決意

「「親衛隊に誘われた!?!」」

私の部屋の中で可奈美と舞衣、美炎の声が見事にハモった。その後、私は部屋に戻った後この3人に話したいことがあるとメールで私の部屋に呼び出し、さつき獅童さんに言われたことを打ち明けた。そしたらこの反応をされたってわけ。やっぱり頼るなら友達だって思ってたね。

「そう。さつき獅童さんにそう言われた。どうにも、前の荒魂討伐の戦果が評価されたみたいで……」

私が誘われた1番の理由はそれだった。どうにもあの荒魂は、並の刀使では……討伐はおろか傷一つつけられるかわからないほどの強力な荒魂だったみたい。だから

それをたった一人で討伐した私の評価が上がるのは至極当然らしい。

「すごいじゃん！おめでと〜!!」

「うんそうだよ！親衛隊に誘われるなんて滅多に無いことだよ？」

「その話は受けるべきだと思うよ？」

最初は驚いていた3人だったが、それからは嘘偽りのない笑顔で私のことを祝福してくれた。本来ならそれは喜ばしいことなただけど……。

「……………」

「あれ？…………… どうしたの紫音ちゃん？」

…………… 私には素直には喜べなかった。なぜなら……

「うん……。親衛隊に入っちゃうと、基本的に活動するのは鎌倉になるでしょ？ そうなるとしばらくはここに美濃岡に戻ってくる事はできなくなっちゃうんだよ……。つま
り……。3人とはしばらく会えなくなっちゃうから……。それが私には少し……。」

「「……。」」

私の言いたいことが何なのか理解した3人はどう返していいのかわからないのか、何も発せないでいた。誰でも友達と会えなくなってしまうと言われれば辛くはなる。もちろん全く会えないわけでは無いが、それでも数には制限がついてしまう。それが私の親衛隊に入る思いにストップをかけてしまっているんだ。

「……でも」

静寂した空気の中、美炎が静かに口を開いた。

「それでも紫音は行くべきだと思う！」

「……………え？」

「確かに紫音と今みたいに会えなくなっちゃうのは辛いけど、それでも…紫音が必要とされて親衛隊に呼ばれたのなら……………わたしは全力で紫音を応援するよ！」

美炎のその言葉に私の体の中がほっこりしていくのがわかるくらい熱くなった。

「私も同じだよ。せっかく親衛隊に呼ばれたんだから行かないともったいないよ！このチャンス逃したら次は無いかもよ？紫音ちゃんなら何が最善の判断なのかわかるでしょ？」

可奈美も同じく、親衛隊に行くことを後押ししてくれた。チャンスか……………確かにこんなチャンスもう無いかもね……………。

「大丈夫、紫音ちゃん。離れていても私たちの絆が崩れる事はないよ。どこにいたって私たちは友達でしょ？だから……………気にせず行ってきた？」

そして…… 舞衣のこの一言が決定打となり、私に決意を固めさせてくれた。

…… そうだよ。私がどこに行こうと、それで人間関係が変わるわけでもない、人が変わるわけでもない。私は私だ。みんなもみんなだ。決して崩れることのない深い絆が私たちにはあるんだから。だから――

「うん、ありがとうみんな。おかげで決心付いたよ！」

私は笑顔で3人の顔を見ながら、自分の決意を伝えた。

「私は…… 親衛隊に行く！そして、荒魂から人々を守って見せる！」

「すまないな……」

「はっ？」

鎌倉に向かう新幹線の中で、獅童さんは不意にそう呟いた。

「君には辛い思いをさせてしまった。いくら実力があつても君はまだ子供だ。友と呼べる者たちと別れるのは辛かっただろう？」

力なく……そして私と目線を合わせないまま獅童さんはそう言った。

決意を固めた翌朝、私は獅童さんに親衛隊に入る旨を伝えた後、獅童さんと一緒に美濃関学院学長の羽島学長のところに行き、私を親衛隊に配属させることとししばらく学院を休学する旨を伝えに行った。羽島学長も数少ない私の実力を知る一人だったため、聞かされた時は始めは驚いていたけど、すぐに納得した顔をして許可して貰った。

「芹代さん。貴方の刀使としての力は折り紙付きよ。だからその力を親衛隊でも存分に発揮してきなさい。いいわね？」

「はい！存分に発揮してきます！」

私は羽島学長とそんな約束をした後、学長室を後にした。

そして出発の駅構内で、見送りに来てくれた可奈美と舞衣、美炎ともまた一つの約束

をした。それは――

「来年の御前試合を見て欲しい？」

「そう！来年こそは必ず本戦に出て見せるから！本戦は鎌倉でやるんでしょ？だったらその時に紫音ちゃんに会えるってことだから！だから、もし私たちが本戦に出たら……私たちのこと見て欲しい」

私に手を握りながら、可奈美は強く言った。それだけ決意を込めて言ったんだろうな。だから、私の返答はもちろん――

「わかった！全部見させてもらうよ。その代わりに誰も本戦に出ないってこと無いようにね？」

「わ、わかってるってば」

「「あははは!!」」

そして、私たちはそこでひとまず別れた。次に会えるのはいつになるだろう……そんなことを考えながら、私は新幹線に乗った。

そして今に至る。獅童さんは、自分が私を友達と無理やり引き離してしまったと負い目を感じているみたいだった。

「獅童さんが気に病む必要はないですよ。これは私自身で決めたことです。それに友達たちも納得してくれてましたから」

「そうか……ふっ、君は強いね？」

「強くなんか無いですよ？もし私のプリンが誰かに食べられたとしたら一気に落ち込んじゃうくらい私メンタル弱いんですよ？」

「そ…… そうなんだね。知らなかったよ……」

あ、少し笑った。とりあえず元に戻ってくれたみたいだ。よかった。獅童さんとは今後も仕事仲間としてお付き合いしていくんだから、今のうちに人となりを掴んでおかないとね！

私の親衛隊の活動の日々が近づきつつある……。

親衛隊第五席

「うわあ……」

鎌倉駅に着き、鎌倉の街並みを見た私から出たのは感嘆の溜息だった。私は今まで鎌倉に来たことが無かったため、私がいいた岐阜よりもはるかに多くの建物やビルなどが建っている光景にそれしか出てこなかったんだ。

「どうだい？初めて見る鎌倉は？」

「何というか……いろいろな意味で凄いですね。車もたくさん通ってるし人もたくさん……。建物も全部大きい……。親衛隊つてすごいところで活動してるんですね？」

「僕たちにとつてはすでに見慣れた光景だからそうは感じないけど、地方から来た刀使はみんな同じ反応だよ。だから何も不思議がること無いよ？」

「はい。わかりました」

感想もほどほどに、私は獅童さんに連れられ折神家本部に向かった。

「さて……ここがこれから君の働く場所だよ」

数十分後、無事に私たちは折神家本部に到着した。日本全部の刀使の纏めどころと、荒魂討伐作戦の本部ということもあつてすつごく大きかった。外観は何とにか……一つの大きなお寺みたいな感じで中も相当広そうだった。

「初めて見ましたけど……ここも相当大きいですね」

「それはそうだよ。何せ折神家は古くから伝わる名家だからね。かつて出現した大荒魂を討伐したことで英雄に成り上がったことが名家に上り詰めた要因らしい」

「なるほど」

「っと、長話も何だし早いところ中に入ろうか」

そう言った獅童さんは屋敷の中に入っていった。私もそれに続くように中に入った。案の定、中も相当広かった。

「失礼します」

中に入り、荷物を預けた後、私は御当主様もとい紫様に挨拶をしに局長室に向かつていた。その間、中にいた刀使の人たちからやたらと視線を向けられたため、気恥ずかしかったな……。

そして、本部長室に到着した獅童さんが一声かけてから私は中に通された。

中にいたのは、親衛隊と思われる人たち3人と、私は初めてみるけど、その3人を侍るようにして座って居る紫様だった。紫様は私が部屋に入ったことを確認すると、スツと立ち上がって私のところに来た。

「よく来たな、芹代。私がこの折神家当主並びに刀剣類管理局局長の折神紫だ。よろしく」

そう言いながら紫様は私に手を差し伸べてきた。

「この度親衛隊に配属となりました、芹代紫音です。よろしくお願いします」

私も自己紹介をし、同じく手を差し伸ばし、握手をした。

「遠路遙々ご苦労だったな獅童。下がって良いぞ」

「はっ」

獅童さんはそつと私から離れ、同じ親衛隊の人たちの元に戻った。

「さて、芹代。お前はこれより親衛隊として私の元働いて貰うのだが、その前に一つ……お前に問いたいことがある」

「……………？はい、何でしょう？」

聞きたいこと？紫様が私に何を聞きたいんだろ？

「お前のその刀使としての“力”とは……何だ？」

「“力”？」

紫様の質問の意図がわからなかった。急にそんなこと言われても……“力”か。

「私の“力”は人々を荒魂の手から守るためにあります」

「ほう……？」

「そして、私の信念。“今存在している荒魂すべてを討伐し日本を平和にしてみせる”ことを果たす術だと心得ています」

「なるほどな……」

何か納得したような顔を浮かべた紫様。それは後ろの親衛隊の人たちも同じだった。むしろどこか品定めしているふうにすら見えた。どうだろ？言ってること理解してもらえたかな？

「刀使の中にはその力に溺れ、崩れていく者もいる。私はそんな刀使を山ほど見てきたが、どうやらお前はその類では無いようだな」

「……？」

えくつと？つまり？

「それならば私は安心してお前のことを信用することができると。今日を持ってお前を正式に親衛隊第五席に任命する。これからは私の元でその信念とやらを果たすために頑張るんだ。良いな？」

「は、はい！」

よ。よかつた。とりあえず認めてもらえたみたいで……。それにしても第五席か……。なんか実感ないや。

「よし、では次に芹代、お前の同僚となる者たちを紹介しよう。お前たち、前へ」

「「はっ！（はあゝい）」」

ここでようやく私の仲間となる親衛隊の人たちの紹介となるみたいだった。とは言っても獅童さんと此花さんはすでに知ってるから紹介はいらぬ気がするけどね……。

そうこうしている間に親衛隊の自己紹介が始まった。

「自己紹介はいらぬかもしれないけど、僕は獅童真希。親衛隊第一席だ。よろしく、紫
音」

あゝ、やっぱり獅童さんもそう思ってたのね……。獅童さんが第一席か
 ……。つて事は親衛隊の中で一番強いのかな？

「紫音はわたくしとも一度会った事がありましたわね。此花寿々花です。親衛隊第二席
 ですわ」

会ったこと覚えててくれたんだ此花さん。なんか話し方とか聞いてると何だかお嬢
 様みたいな人だな。

「……初めまして。皐月夜見です。親衛隊第三席になってます。芹代さんでした
 ね……。よろしくお願いします」

この人とは初めてだったね。皐月さんか……。なんか物静かそうな人って感じが
 するかな？

さて……最後の一人は……と皐月さんの横を見たけど、なぜかそこには誰もい
 なかった。いや……。正確にはさつきまでいた。皐月さんが自己紹介してる時まで

は……………。

「!?結芽!やめろ!!」

「…………… きひっ!」

声が出したのは私の真横。慌ててそちらに視線を向けるとそこには何故か御刀を持って私に向かってくる少女がいた。見る限り、私よりも年下だ。多分彼女が残った親衛隊の人なんだろうけど…………… 何で御刀向けてきてんの!?

「わっと!」

私は咄嗟に蒼月を抜き、峰に手を添える形で防御をした。

「へく?今のを防げるってことは…………… おねーさんかなり強いねく?」

「いや…………… いきなりなにするの!?!なんか私した!?!」

「別に？ただおねーさんが強いかどうか確かめたかっただけ」

「いや……そんな理由で斬りかかって来ないでよ……。というかまだ名前も聞いてないのに、こんな状態じゃ聞けないでしょ？わかったら早く御刀を……」

「私は燕結芽。親衛隊第四席。よろしく！これで良いでしょ？さあ、早く続きやろよー」

はあく……この子あれだ。異常なくらいの戦闘狂だ。全く聞く耳持ちそうになかった。

「あくもう!!とにかく一旦お・ち・つ・け〜!!」

「っ!!」

仕方なく、私は防御してた蒼月をそのまま燕さんに向けて押し返し、力任せに燕さん

を吹き飛ばした。

「ぎゃん！」

「結芽!？」

吹き飛ばされた燕さんは、そのまま床に叩きつけられた。

「はあくもう……全く……」

「はは！おねーさん良いじゃん！もつとやろー」

「そこまでだ結芽」

さらに私に向かおうとしてきた燕さんを紫様が止めた。その声を聞いた途端、燕さんの動きがピタリと止まった。あく、さすがに紫様の言うことは聞くのね。

「えー、もつとこのおねーさんと遊びたい」

「それは後にでもできるだろう？今は控える？良いな？」

「むう……。はあーい」

納得してない顔をしながらも燕さんは御刀を収めてくれた。とりあえず終わったかな？そう判断した私は蒼月を収めた。はあー……無駄な体力を使った。

「結芽が迷惑をかけたな。あんな奴だが、単に戦う事が好きただけなんだ。仲良くしてやってくれ」

「はあ…… わかりました？」

仲良くか……。また襲われないと良いけどな……。

「質問などはあるか？」

「いえ、特には」

「ならばこれにて入隊式は終了とする。各自戻って構わない。芹代の部屋の案内は任せろよ。」

「はっ」

獅童さんは静かに答えた。部屋か……… どんな部屋だろう？

「芹代は明日から任務に入ってもらおう。今日は身体を休めて明日に備えろ。以上だ」

そう紫様が言った後、親衛隊に人たちと一緒に局長室を出た。そして、そのまま私の部屋に向かった。その間、親衛隊のみんなからは質問攻めにあっていた。それに私が答え、また質問の繰り返しとなっていた。

「芹代…… お前の方からわざわざ我が管理下に来ようとはな……。これは好都合だが、しばらくは様子を見るとするか……。その力が満ち溢れるその時まで。」

「紫音は13でしたのね。ですなら結芽の一つ上という事になりますわね」

「そっか！じゃあこれからは紫音おねーさんって呼ぶね！」

「……」

……
なんかおねーさんって呼ばれるの慣れてないからむず痒くなってきた。で

も……こうして話してみると燕さんってただの女の子にしか思えないんだよね。これであんな戦闘狂じゃなかったらもつと良いんだけどな。

「それにしても、燕さんには驚かされたよ……。急に私に斬りかかってくるんだもん」
「ああ、僕もそれには驚いたけど、それよりもその結芽の攻撃を凌ぎ切って力で押し切った紫音の方に驚いたよ」

「そうですね……。燕さんの剣技は並大抵では太刀打ちできませんからね……。改めて芹代さんが親衛隊に配属された理由が分かった気がします」

「へ〜？ そうなんですか〜？」

なんか人事みたいに言っちゃったけど、さっきの時は本当にとっさのことだったから正直あんまり覚えてないんだよね。それに燕さんは第四席なんですよ？ 親衛隊の中でも一番弱いはずじゃ……。

私のその判断が間違っていると気づいたのは翌日だった…………。

「……」が私の部屋…………。」

部屋に案内され、親衛隊のみんなと別れた後、改めて部屋の中を見渡してみた。とりあえず言えることは——

「……広すぎない？」

そう……一重にそれだった。少なくとも美濃関にいた時に使っていた寮の部屋の倍以上はあった。

「こんな広い部屋……私一人だと持て余す気しかしないんだけど……」

普段私はあまり物を置く人では無い。必要最低限のものがあれば良い。そんな感じなんだ。だから美濃関の時くらいの広さでよかったんだけど……。

「でも親衛隊はみんなこの大きさだと言ってたし……しようがないか」

この際吹っ切れた方がいいと思ったから、部屋のことは忘れた。荷物を置いた後、私はすでに置かれていた机の上に置いてある一つの箱を手にとった。

「この中に入ってるってことだね？」制服」

そう言いながら私は箱の中身を取り出した。中から出てきたのは茶色をベースとした特徴の親衛隊の制服で、親衛隊はこれを着るのが義務となっている。

「まさか私がこれを着る事になるなんてな〜……………」

数日前まで考えられなかった事だし、憧れの親衛隊で紫様の元で任務に当たれるなんて夢のようだ。興奮した私は制服を抱きしめたままベッドの上にダイブした。

「明日から任務……………頑張ろー!」

ベッドの上で私はそう気合いをいれるのだった。

早朝の邂逅

「よし！バッチリ！」

ふかふかのベッドで眠った翌朝、起きた私は早速身嗜みを整えて制服に着替えた。とは言っても気が早すぎる気もするけどね……。だって今の時間は朝の5時、昨日の獅童さんの話では7時に執務室に来て欲しいとのことらしいし、時間までまだ2時間もあ

る。
「まあ……でも早いに越したことはないでしょ」

時間も余ったことだし、暇だったから少し部屋の外に出て屋敷の中を散歩しに出た。執務室、局長室、食堂、訓練場など、いろんな部屋を回ってみただけ、やっぱり広いということを改めて実感した私だった。早朝と言うこともあり滅多に人とはすれ違わなかったけど、すれ違ったときにはすれ違いざまに私のことを目線で追っていたことは何

となく分かった。多分私が親衛隊の制服を着ている事に対してだろうけど……。

この折神家には親衛隊の他にも所属している刀使がいる。基本的に折神家に所属する刀使と言うのは選ばれたもの、つまり刀使の中でもエリートな人しか所属することを許されないんだ。そんな中に急遽私のような子供が自分よりも格上の親衛隊の制服を着てたらそれは気になるのも無理ないだろう。

「(なんかやたら注目されてるみたいで恥ずかしいんだけど……)」

自分で勝手に散歩しておいてそんなこと思うのはおかしい話なんだけどね……。そろそろ部屋に戻ろうと、訓練場の横を通って部屋に戻ろうとしたんだけど、その際訓練場にさつきまでは無かった人影が映った為、足を止めた。

「(あれって…… 此花さん?)」

いたのは此花さんだった。体に汗を流しながら一人黙々と素振りをしていた。

「ふう……？」

「あ」

素振りをやめ、一息ついた此花さんが私に気づいた。……邪魔しちやったかな？

「おはよう紫音。随分と早いですわね？」

「おはようございます此花さん。ええ、普段私はこの時間に起きてますので……」

「そう……それにしても」

ツカツカとこちらにやって来る此花さん。何か顔が笑ってるけど……何だろ？

「制服……よく似合っていますわよ？」

「へ？あ、あ……」

なるほど、制服を見て笑ってたんだ……。似合ってる……。か。此花さんにそう言われると嬉しいな。

「それにしても何で今制服を着てますの？いくら何でも早すぎるのでは？」

「いや……。それは……。…」

私は、初めての親衛隊の仕事というのに興奮が収まらず舞い上がってしまった、待てずに制服を着込んでキャツキャしてましたー！……。とは言わずにある程度は省いて説明した。それを聞いた此花さんは口を手で押さえながら笑っていた。

「いや……。笑わないでくださいよ……。…」

「あら、ごめんなさいね。でも、やっぱりそんなところはまだまだ子供なのねと思ったから……。…」

「うっ……」

…… 否定できない。確かに制服であそこまではしやぎ回れるって事は私もまだまだお子様って事だよな？ってかー３なんだからまだまだ子供なだけど……。

「そ、それよりも此花さんこそ朝早くから精が出ますね？やっぱり親衛隊になっても鍛錬は続けてるんですね？」

「もちろんですわ。私には超えなくてはならない人がいますから。その方を超える為でしたら何でもしますわ」

「なるほど〜」

すごい執念……。相当その人のことを超えたいんだな此花さんって……。一体誰なんだろう？

「そうですね。紫音もよければ一緒にやりませんか？まだ時間もあることですし……」

どうかしら?」

「お、いいですね。ちようど体動かしたかったです。やりましょう!」

こんな誘い断るわけないでしょ。親衛隊の人と一緒に鍛錬だなんて滅多にできることではない。ここはお言葉に甘えて一緒にやらせてもらおう!

「何やりますか?」

「そうですね……。軽く立ち合いをするのはいかがでしょうか?」

「立ち合い……ですか」

立ち合いという単語に私は苦い顔をした。

「あら……嫌かしら?」

「いえ……別にそれは……」

「ああ……そういうえば紫音はあまり人に御刀を向けるのは好きでは無かったんでしたわね。ごめんなさいね。ぶしつけなことを聞いたわ」

「い、いえ……そんな……」

少し罰が悪そうな顔をして謝ってきた此花さん。いや……今の全面的に私が悪いんだから此花さんが謝る必要はないんだけど……。それにしても私何言ってるんだ？せつかく此花さんから言っ来てくれるんだから受けるのが礼儀でしょ!?全く……今から言っても遅くないよね？とりあえずー

「此花さん、変な空気にしちやつてすみません。それで……さっきの立ち会いの話なんですけど……受けさせてもらいます」

「え？でも無理にやらなくても……」

「折角のお誘いですし、受けないと面目が立たないです。なので…… お願いします」

ゆつくりと頭を下げ、お願いをした私。それを見た此花さんはまた静かに笑った。

「ふふ、わかりましたわ。では、いきましよう」

「はいー」

それから私たちは時間の許す限り、剣を撃ち合い続けた……。私にとってその時間はとても有意義な時間でも楽しかったなく……。私にとつてその時間

「……っ」

立ち合いをしている際の此花さんの表情が、妙に歪んでいた事にも気づかず私はこの時間を楽しんでいた……。

親衛隊の任務

此花さんとの朝の鍛錬を終えた後、食堂で朝食をとった私は少し時間に余裕を持って執務室に入った。中には既に獅童さんと此花さん、皐月さんがいた。燕さんの姿は……ないね。

「おはようございます！」

「ああ、おはよう。しつかり時間通りだね」

「初日から遅刻なんてしてしないでですよ。それに朝は此花さんと一緒に鍛錬をしましたから今日は身体も軽いんです」

「そうなのか？ 寿々花…… 寿々花？」

さつきから獅童さんが声をかけてるのに此花さんは何処か上の空で気づいていないみたいだった。朝の鍛錬で疲れてるのかな？

「……………」

「おい、寿々花！」

「へ!? 真希さん? どうかしました?」

「どうしたもこうしたも、さつきからずっと呼んでるんだが? どうかしたのか?」

「い、いえ。なんでもありませんわ。それで、なんの話でしたか?」

此花さんもこんなふうに取り乱すことってあるんだ。なんか意外……………。

「早朝に紫音と鍛錬をしてやったと聞いたが本当なのかと聞いたただだよ」

「……っ」

それを聞いた此花さんは一瞬複雑な表情を浮かべた。まるであんまり触れて欲しくないみたいな感じで。

「…… 此花さん？」

皐月さんも何か此花さんの様子がおかしいと察したのか、顔を近づけていた。

「大丈夫ですわ。少し疲れてるだけなので…… ええ。今日の朝に私が鍛錬をしていくところにちょうど紫音が通りかかりましたので、良ければ一緒にと誘ったのですわ」

「はい。それで一緒にやつてもらえることになって、最後には立ち合いもしてくれました」

「!？」

立ち合いと私が言った途端に何故か私の方に鋭い視線を此花さんが向けてきた……気がした。でも、こっちに視線を向けてきたのは間違いなかった。なんか変なこと言ったかな？

「立ち合いか。寿々花は随分とサービス精神が強いんだね。入ってきたばかりの紫音と早速手合わせをするなんて……相当紫音の実力を知りたかったってことかな？」

「え、ええ……。同じ親衛隊ですもの。実力を知るにはいい機会だと思いましたので、誘ったままですわ」

なるほど、私の実力を図るためでもあったわけか。あの立ち合いは。

「それで？君の評価の程はどうなんだい？」

「そ……それは……」

此花さんが私の評価を言おうとしたその時、時計の針が7時を指した。親衛隊の仕事の始まりの時刻だ。

「すみませんが時間です。任務に向かいましょう」

「ああ、そうだね。では、紫音は僕たちの後に続いて来てくれ。詳細は後ほど話すから」

「わかりました。あ、でも燕さんは？」

「燕さんはいいのです。今回の任務は燕さんは待機命令が出てるので……」

「ああ、そういうわけなんですネ」

なら良いんだけど、それよりもさっきの此花さんの様子が気になってるんだよね……。私と立ち合いをしてから何か様子が変に思える。

「寿々花、行くぞ」

「……………ええ」

此花さんはどこか気が入ってないような声で答えた。任務に支障が出ないと良いけど……………。そして私達は、任務のため部屋を出た。向かった先は局長室だった。中に入り、紫様に今回の任務の内容を聞かせて貰うためらしい。

「今回の任務は、東京方面に出た荒魂を討伐に向かった部隊の援助だ。作戦指揮は獅童と此花、現場の指揮並びに荒魂の討伐は皐月と芹代に任せる。速やかに行動しろ」

「『はっ』」

「芹代は初めての任務だが、気負う必要はない。お前のだせる力を出して任務に臨んで来い。良いな？」

「はい！」

！
紫様に向かって全力で答えた私。紫様に認めて貰うためにも、ここは頑張らないとね

「お前達も芹代のことをサポートしろ。初の任務で怪我をされては敵わない……………？
どうした此花？顔色が悪いようだが？」

「!?いい、いえ！決してそのような事は……………」

此花さん…………… やっぱり変だよ……………。今朝会った時はいつも通りだったのに……………。やっぱり私が何かしちやった？

「体調に問題があつて任務に支障が出ては元の子もないんだぞ? …… 本当に大丈夫なのか?」

「大丈夫です。任務にも支障は出しませんので行かせてください」

「そうか、分かった。では各自、任務に移れ!」

「[[[[はっ]]]]」

こうして私の初任務が始まった。此花さんのことは気になるけど、今は任務に集中しないとね。私達は局長室を出た後、屋敷の外に留めてあつた車に乗り込んだけど、車と言つても自衛隊の人が乗るような大型車だった。そのまま車は私たちを乗せて目的地に向けて出発した。その間に今回の任務の内容等を頭に叩き込んでおき、現場でヘマをするという事態を回避するのに尽力した。私の初陣が今…… 始まるうとしている。

「……………」

私、此花寿々花は、今、生きてた中で2度目の屈辱を味わっていますわ……………。一つの屈辱を与えてくれたのは真希さん。私が何度努力して剣技を鍛え、挑んでも……………。勝てずに屈辱を与え続けられた私のライバル。いつかは真希さんを超えて見せる！そう決めてたのだけれど……………。今はそんなことを考えられるほど心に余裕がありません。それだけの屈辱を私は今日の前にいる少女に味合わされたのですわ……………。

そう……………。その2度目の屈辱を与えてくれたのは……………。紫音ですわ。

——早朝、立ち合いの時——

「いきますー！」

「ええ、掛かっていらつしやい」

私が最初に立ち合いに彼女を誘ったのは単に彼女の實力を知りたかつたから。親衛隊としての實力があるのかを身定めるためでもありません。だからこちらは力を抜いて様子を見ようとしたのですが……。

「ふっ！」

「っ!？」

あろうことか、彼女はいきなり【迅移】を2段階まで上げて攻撃を仕掛けて来たのです。しかもその速さは私がやっと目で追えるレベルの速さだった。彼女の攻撃は何とか凌ぐことは出来ましたが、その一撃はかなり重く、受けた手が痺れてしまっていた。

「くっ……何て速く……そして重い攻撃を……」

「まだまだ行きます！やあっ!!」

「うっ……」

そんなまさか……と思えた一瞬でしたわ。彼女は【迅移】を連発できるだけでなく、【八幡力】を使って脚力と腕力を強化してたのですわ。本来であれば、【迅移】も【八

幡力」も、ただでできるわけでは無く、何かしらの代償がついてくる。両方とも使い過ぎれば、身体を壊したり精神を破壊したりするほどの諸刃の剣となる。一つだけならまだしも、2つ同時に使いなんてしたら紫音の体が保たないはず……………なの
に——

「何故ですの!?何故ここまで【迅移】と【八幡力】を使っても平気なのですか!?」
紫音は動きが遅くなるどころか……………さらに加速して私に攻撃を浴びせに来ていた。でも、その攻撃全てが何故か【写シ】を傷つける程度の攻撃で、【写シ】を剥がすほどの攻撃は一度も飛んで来なかった。つまり——

「私を甘く見ているようですわね!はあっ!!」

「うわっ!」

私は攻撃して来た紫音をそのまま弾き飛ばした。飛ばされた紫音は空中で態勢を立て直し、着地した。つまりそういうことですね。彼女は私のことを甘く見ていたので

しよう。私では怪我をさせてしまうかもしれない。だから「写シ」を剥がさないようにしよう。そう考えていたのでしょうけど……上から目線みたいでムカつきますわね。

「今度はこちらから！【迅移】！」

私は今度は自分と言わんばかりに「迅移」を2段階にあげた。そして一気に距離を詰めて下段から攻撃を繰り出した。まさかこつちまで使わされる事になるとは思っても見ませんでしたけど、これもまた面白いですわね。

「はあーこれで勝負あ……り？」

勝負を決めると思っていた私の一撃は、すんでのところで紫音の御刀に防がれていた。もちろん加減はしていたが、速度は加減したつもりはない。つまり彼女は私のあの速い動きを見切れたという事になる。

「……まだ終わりませんよ！」

紫音はそういうとそのまま私の攻撃を受け流し、無防備となった私の腹部に蹴りを入れて来た。

「ぐっ……」

とは言ってもそこまで強い一撃ではなく、少し飛ばされた程度で済んだ。

「はあっ!!!やあ!!せいっ!!とうっ!!」

私はその後も何度も「迅移」と「八幡力」を駆使して使い、紫音に対して攻撃をしていったが、紫音はその全ての攻撃を軽快な動きで捌き、隙があればカウンターを入れてくるなどして凌いでいた。この時の私には、紫音に一太刀を入れるイメージが湧かなかった。それだけ紫音の攻撃と守りには隙が無かった……。結局私の剣は、彼女には届かずに時間切れとなってしまった。

「此花さん！ありがとうございます。私とても楽しかったです。たまには立ち合いを

するのも悪くないですね〜………… えへへ。それじゃあ、私はこの辺で。執務室で会いましょうね〜」

立ち合いが終わった後、紫音はご機嫌のまま訓練場を後にした。一方の私は全く逆で…………。

「(防御では手を抜かれ………… 攻撃では一太刀も浴びせることができなかつたですわ…………)」

私は失意に満ちていた。自分のこれまでして来た努力を紫音にすべて打ち砕かれたように感じていたからだ………… こんなことは真希さんの時以来ですわね…………。

「それに相手がまだ子供だということも余計にショックですわね…………」

こんな状態で今日の任務は大丈夫なのでしょうか？でも、私は親衛隊。休むわけにはいきないですわ。まだ心の整理がついてない状態ですが、私は任務に向かうことを決めたのですわ。

紫音の實力

——現在、荒魂出現地点にて——

「これより作戦指揮は、我ら親衛隊が受け持つ！直ちに装備を整え、指示を待て。負傷をしているものは下がって治療を受けろ」

現場についた獅童さんがまず始めに現場の刀使達にそう言った。現場はほとんど東京の街中だったが、避難は完了しているようで人々に被害は出てないようだった。でも、その代わりに刀使達の被害は少なからず出ていたみたいで、負傷している人たちが大勢いた。

私も装備を整えた後、作戦本部とされる場所……獅童さんと此花さんのところに集まった。

「ここから紫音は夜見と一緒に行動して、荒魂の討伐にあたってくれ。細かな情報や位置などは僕か寿々花が先ほど耳につけたイヤホンから伝えるから安心してくれ」

「わかりました」

イヤホンというのはさつき獅童さんから渡された通信機器だった。これを耳につけると本部から直接私のもとに指示が届くいわゆる無線機みたいな役割を担うことができるみたい。これなら安心して荒魂討伐に専念できるということだ。

「夜見も紫音のことを頼む。紫様もおっしゃっていたが、初任務で怪我をされてはまずい」

「……お任せを」

「よし！では、全員無事で帰ってこよう！作戦開始！」

私は獅童さんと此花さんと別れた後、皐月さんと一緒に戦場となつてゐる場所に移動した。情報によると荒魂の数は約50前後、それも普段の荒魂よりもだいぶ強いらしく、現場の刀使だけでは苦戦を強いられてゐるらしい。これ以上負傷者を増やさないためにも、私と皐月さんは少し走る速度を上げて戦場に向かった。

『先100mに荒魂がいる。戦闘準備に入れ!』

「了解」「はい!」

イヤホンから獅童さんの指示が飛び、直ちに私達は御刀を抜き、【写シ】を張った。

「いた!」

「あれが今回のターゲットですね。芹代さんは前衛をお願いします。サポートは私が引き受けますので……」

「え? 私が前衛でいいんですか?」

「私はサポート主体の刀使ですから。気にせず存分に戦ってください……。」

皐月さんはそう言うと、ふっ……と笑いかけてくれた。そっか、刀使の中には荒魂を討伐するよりも刀使をサポートする方が得意な人もいるって聞いたことあったけど、皐月さんはその類だったんだ……。

それなら安心できると思った私は、同じく小さく笑いながら皐月さんに言った。

「わかりました。では、私が最初に斬り込みますので、撃ち漏らしがあつたら皐月さんが……と言うことでいいですか？」

「了解です。それでいきましょう」

「よしっ！でえええやああ〜〜!!!」

戦法をお互いに確認した後は、ただ荒魂を討伐するだけだった。私が現場にいる荒魂

んで気付いてないから、知らないんだけど、正直これは好都合だった。

「せっかくこの眼が使えるんだし、有効に利用しないとね！」

この眼が出るのは戦いの時が多いけど、必ずしも出る訳じゃないから今回は運が良かったかもね。そう少し嬉しい気持ちになりながら私は、相手の荒魂の動きを先読みし、着実に討伐していった。残る荒魂の数は、半分をきつていた……。

「芹代さん……」

私は元々サポートができる刀使として優秀だったため、親衛隊に所属していました。これまでも獅童さんや此花さん、結芽さんのことを数多くフォローをして来ました。そして今回、私は新たな親衛隊、芹代さんをサポートする事になったのですが、現状私は彼女をサポートをしていなかった。いえ、正確に言えばサポートをする必要がなかったと言えば正解でしょう。事実、今彼女は問題なく一人で対処できてる。すべて討伐するのも時間の問題でしょうね……。

「す……すごい……」 「何あの子……。あんな子、親衛隊にいたかしら？」

その場にいた刀使の皆さんも、初めてみた芹代さんとその実力に驚きを隠せないでい

ました。それから数十分後、芹代さんはすべての荒魂を討伐し、私に合図を送って来ました。それを確認した後、私は耳に手を当て、作戦本部にいる獅童さんと此花さんに静かに伝えました。

「任務完了。直ちに帰還します」

「そうか、わかった。ご苦労様、現場の刀使達と一緒に戻って来てくれ。それじゃあ、後で……」

夜見の報告を受け、僕たちはとりあえず討伐完了書をまとめた後、夜見と紫音が戻ってくるまで一息ついていた。

「それにしても……初陣で荒魂をすべて一人で討伐するなんて、紫音には本当に驚かされてばかりだね。僕たちはもしかすると本当にすごい拾い物をしたかもしれないね？ 寿々花」

先ほどの夜見の報告では、夜見のサポート無しで紫音はすべての荒魂を討伐したと聞いた。聞いた時は耳を疑ったけど、夜見が嘘をつく人ではないことはよく知ってたから、納得する事にした。そのことを寿々花にも伝えたのだけど、それを聞いた途端、寿々花はまた少し暗い顔になった。作戦の時は吹っ切れたのかいつもの調子に戻ってたけど……。

「(……………もしかして?)」

何か思い当たった僕は、それとなく寿々花に聞いてみる事にした。

「……………」

「寿々花……………紫音と何かあったのか?」

「!?……………へっ!?!」

この反応……………どうやら凶星みたいだな。確信が持てた僕はさらに追求してみる事にした。

「よければ話してくれないかな?……………今後にも関わってくる事だし、問題を解決するのに早いに越したことはないから」

「……………」

寿々花は顔を伏せて何か考えていたけど、すぐに顔を上げ、僕の方を見た。

「紫音と今日の朝に鍛錬と立ち合いをした事は話しましたわよね？」

「ああ」

「その時に——」

寿々花から語られたのは、今朝の紫音との立ち合いの話だった。紫音と立ち合いをして実力を確かめようとしたところ、逆にこちらが本気を出させられる事態となり、おまけに防御では手を抜いた攻撃をされ、攻撃では紫音に一太刀も浴びせることができないまま終わってしまった……と言ふ事らしい。自分よりも2つも年下の紫音にそのままで圧倒されれば流石の僕でも何かくる物がある……。そこは同情するが……。

「と言ふ訳ですわ……………」

「なるほど……話はわかったよ。でも……それが何だつて言うんだい？」

「!!何つて、紫音にあそこまで完敗したのですわよ!?!私の今までの努力を打ち砕かれるくらいに……それで落ち込まない訳ないじゃないですか!」

そう……落ち込む理由はわかるんだが、寿々花は何か勘違いをしている。僕たち親衛隊の使命を……

「寿々花、何か勘違いをしていないかい?僕たち親衛隊の役割は何だい?」

「はい?そんなの決まっていますわ。紫様を一番身近でお守りしつつ、荒魂の討伐を遂行するために私達が……あつ」

「そう言う事だ。僕達は親衛隊内で優劣を争うためにいる訳じゃなく、ちゃんとした使命があるからいるんだ。紫音がすごい事は今回の作戦で証明された訳だが、それはとても喜ばしい事じゃないか?それだけすごい刀使が僕達とともに使命を全うする仲間」

なつたのだから」

親衛隊は折神家の一番の戦力。そして紫様を守る盾でもある。そんな親衛隊の中で優劣なんて不要。必要なのは使命を全うできる仲間がいるかどうかなんだ。

「私つたら…… 大事なことを……」

「その気持ちにはわかるよ……。僕も一度そんな気持ちを味わったことがあるからね……」

その時、僕の脳裏に結芽の姿が思い浮かんだ。結芽は僕よりも三つも年下なのに対して剣の才能は群を抜いていて、その才も実力も僕より上だった。その事実我当时の僕は今の寿々花のように親衛隊としての使命を忘れかけ、荒れていた。もしあの時、紫様に喝を入れられなかったら、今の僕はなかっただろう。

今度は僕が寿々花を助ける番だ。

「これからは紫音は親衛隊の仲間だ。最初は難しいかもしれないが、少しずつでもいいから彼女と仲良くなっていってほしい。僕もそうする」

「ええ、わかりましたわ。ふふ…… それにしても真希さんは随分と紫音に肩入れするのですわね？まるで親のようですわ」

「そ、そうかな？でも…… そうかもしれないね。何せ、大好物のプリンを食べられたら泣いて任務に支障を出してしまうほどのお子様だからね」

「まあ……」

「あははは」

作戦室内に僕達の笑い声が響き渡った。寿々花がもとに戻ったようで良かった。

認められた実力

「ふう、今日も疲れたな……」

今日の任務と仕事を終えた私は、部屋に戻る廊下でそう呟いていた。私が親衛隊に配属されてから1週間が経ち、私は親衛隊の任務と書類整理や確認の仕事などずっと格闘していた。

「それにしても……相変わらず私のことをよく思わない人の視線が痛い……」

この事は今もお問題となってる。私の初任務の時の活躍を知っているのは、その場に居合わせた刀使と親衛隊の皆さんのみ。それ以外の人たちは討伐完了書を見て知ってる人もいるはずなんだけど、それでも信じられないのか相変わらず冷たい視線を向けて来ていた。

「信用を得るって言うのも難しいもんなんだな……明日、獅童さんとかに相談してみよ……」

親衛隊が刀使からの信用を得てないのは問題だ。だから明日、同じ親衛隊の皆さんに相談することを決めて部屋に戻った。

——翌朝——

「なるほど、他の刀使達の信用を得たい……か」

翌朝、私は早速相談をしに執務室に向かった。早めに行つたから誰もいないかと思つたけど、執務室には既に獅童さんと此花さんが何かしらの作業をしていた。私に気づいた2人に、早速私が最近悩んでいることを相談した。あ、任務中はそんな暇はないから任務が始まる前に聞きにいったよ？もちろん。

「親衛隊は選ばれた刀使のみ所属を許される隊ですからね……。その中に入ると言う事は周りからもそれなりの実力を求められますわ」

「やっぱりそうですよね……。何か皆さんに一気に認めてもらえるような機会でもあれば良いんですが……」

「機会か……。よし、これから紫様に相談しに行ってみよう。もしかすると何か良い案を出してもらえるかもしれない」

そう言う獅童さんだけど、紫様はいろいろ忙しいんじや……。？

「紫様は今局長室にいますの？」

「ああ、さつき局長室に行つて来たところだけど、ちゃんとしたよ。どうやら今は休憩中らしいし、ちようど良いだろう」

ああ、それなら問題ないね。良かった。

「では、時間も勿体ないし、局長室に行こう」

「なるほどな。それならば皆の前で立ち合いをすれば良い話だ」

「立ち合い？」

局長室に入り、紫様にこのことを相談したところ、出て来た案は立ち合いだった。
まあ………
いわゆる手合わせだね。

「そうだ、同じ親衛隊の者とお前が立ち合いをしてお前の実力を見せれば、お前のことをとやかく言う輩はいなくなるだろう。…… 勝敗は問わずにな」

「なるほど…… それは名案ですね。ですが、誰が相手を？」

「そうだな……」

紫様は手を顎に当ててどうするか考えていた。考えが出るまで私達が待つてる間、静寂の空気が流れた。だが、その静寂な空気は突然開かれた扉の轟音によって打ち消された。

「おねーさん達〜！なんか楽しそうなこと話してたけど、私にも聞かせてよ〜！」

「「結芽？」」「「燕さん？」」

入って来たのは燕さんだった。さっきの話、燕さんは聞いてたのかな？

「紫音の周りの評価を変えるために、親衛隊の誰かと立ち合いを行うと言う話になったんだ。そこで相手を紫様に決めてもらってたところだよ」

「へへへ……」

それを聞いた燕さんはニヤア〜と笑いながら私を見つめて来た。まるで子供が面白そうなおもちやを見つけた時みたい……。あ、この展開はもしかかしくなくても……。

「紫様〜！その相手、私がやる〜！」

……
やっぱりね。

「ではこれより、親衛隊第四席、燕結芽と親衛隊第五席、芹代紫音による試合を始めたいと思います」

結局、あの後紫様は相手に不足はないなと燕さんを相手に決め、すぐさま試合の手続きと準備をしてもらった。試合会場は御前試合でも使われた練武場で、結構広さもある場所だった。周りにはこの試合のことを聞きつけて来た折神家所属の刀使や職員さんが大勢いた。この中の大半の人が私に不服を抱いてる人だろう。……… だったらこの

試合でその気持ちをひっくり返してあげるよ！

「こうやって紫音おねーさんとちゃんと戦うの初めてだね。えへへ、やっと戦える！」

「ほんとにちゃんとは初めてだよ。いつも燕さんの方から不意打ちで斬りかかってくるんだから……」

これまで燕さんに襲われたのは十数回以上。1週間でその数はやばいでしょ……でも、私もこの試合は少し楽しみでもあった。だって、燕さんの実力が知れる絶好の機会なんだから。

「あ、あそこに紫様がいる。獅童さんも此花さんも皐月さんもいる。皆さん見に来てくれたんですね」

御前試合の時は紫様や親衛隊は練武場を見渡せる屋敷の玉座にいらしいけど、今回は紫様達はダックアウトから観戦していた。紫様の目は私のことをしつかりと捉えていた。全て見ているぞ！と言わんばかりに……これは無様な姿は晒せないね。

「双方、構え！【写シ】！……始め！」

審判の人が開始の合図を出した。それと同時に――

「紫音おねーさん！行くよー!!」

燕さんがいきなり仕掛けて来た。「迅移」で距離を詰めた後、御刀を左上段から振り下ろして来た。確かに速いけど、見極められないほどじゃない。一旦受けて受け流そう……。そうとつさに判断して受け身の構えをとった。だが、その瞬間、燕さんの振り下ろしていた御刀が……消えた。

「くっ…… フェイントか！」

「へ〜？よく受け止めたじゃん！」

消えたように見えた御刀は、実際には一瞬で攻撃を右上段からの攻撃を左斜め下から

の下段斬りに変わっていたんだ。あまりの切り替えの速さに一瞬消えたかと思ったのはそのせいだった。何とか私はその攻撃を防ぐことができたけど、結構危なかった……。燕さんってこんなに強かったんだ。少なくとも此花さんより強い……。

「いいね！楽しい！やっぱり紫音おねーさんって強いね〜！」

「ふっ…… そんなこと言ってる暇あるの？…… でやつ!!」

「わっ!」

…… なんか腹部が無防備だったから、「八幡力」で強化した足で、腹部に重い一撃を入れた。私の一撃を受けた燕さんは、吹っ飛ばされたけど空中で受け身をとって華麗に着地していた。

「今度はこっちから!はっ!!」

燕さんが着地したと同時に、私は攻撃を仕掛けた。【迅移】で燕さんの背後に回り込

み、無防備な背中を狙って蒼月を一閃した。だが……………。

「くっ…………… 速いな……………」

「そう言う紫音おねーさんもね！私が背後取られたのなんて久しぶりかも」

私の一撃を燕さんも同じ【迅移】で躲した。やっぱり燕さんも相当速い。ことが今改めてわかった…………… 死角だと思っただけだな。

「それでも攻撃が当たらなきや意味ないでしょ？」

「きひっ、そうだね〜！」

それからしばらくは膠着状態が続いた。私と燕さんはお互いに攻撃を繰り返すものの、すんでの所で見切られ、決定打を相手に叩きつけることができないでいた。

「すごい……あの燕さんと互角に戦っているなんて……」「やっぱり親衛隊に選ばれたのは間違いではなかったのね……」

周りからの評価も徐々に変わりつつあるのだが、それを気にしているほど私には余裕は無かった。少しでも気を抜けば一瞬で勝敗が決してしまう。そんな予感が私の中に過っているからだ。

「まさか、結芽とここまでの試合をするとは……驚きましたわね」

「そうだね……。僕でもあそこまで結芽と渡り合えるかどうか……。紫音は本当に末恐ろしいね……」

「はい、親衛隊に配属というのも納得できます」

私の評価が変わったのは親衛隊の皆さんも同じみたいだった。

「……」

そんな中、紫様は相変わらず涼しい顔で私たちの試合を観戦していた。

「やはり力が覚醒するのは…… まだ先か……」

試合が始まってどのくらいが経ったんだろ？ 少なくとも三十分は経ったと思うけど、いまだに試合の勝敗はついてない。早く勝負をつきたいんだけど、ほんとに燕さんには隙がないんだよ。眼があれば対策はあるんだけど、今日はでなさそうだったから諦めた。燕さんにはどこから攻めても必ず最後には弾かれて終わっちゃう。だから攻め手が無いのが現状なんだよね……。でもそれは、燕さんも一緒だ。

「はあ…… はあ…… はあ。つ…… 燕さん？そ、そろそろ決着つけない？いい加減体力的にも辛くなって来た……」

「はあ…… はあ…… はあ、そう？私はもつとやりたいけど？」

「そんなこと言わないでよ…… ほんとに私限界なんだから……」

そういう燕さんもかなり疲れてるように見える。状態としてはイーブンだ。いつもの眼が出ない以上、これ以上長引かせないためにも、次の一撃で決めたいな……。

「燕さん…… これで最後にするよ…… はああ!!!」

最後の力を振り絞って私は【迅移】を使い、今までの中でも最速の突きを燕さんに向けて放った。

「いいじゃんいいじゃん！最後まで楽しもーね！紫音おねーさん！」

燕さんは私のこの突きを躲しに行くどころか、真つ向からねじ伏せようとして来た。でも、この突きは真つ向からねじ伏せられるほど軽い攻撃ではない。一体何を考えてるの……？

「やああ!!……!!?」

一つの閃光が練武場に走り、私の渾身の突きは、見事に燕さんの胸部を貫いていた。それならば私の勝ちなんだけど……肝心の燕さんの御刀は……私と同じように私の……胸部を貫いていた。

「燕さん……」

「きひつ……相討ちだね……」

燕さんは笑いながらそう言った。おそらく私の突きを誘って攻撃の隙を狙おうとしたんだろう。でも、結局それができないで相討ちに持ち込んだ……一杯食わせられたね……。お互いに笑いかけながら、ゆつくりと胸部に刺した御刀を私たちは抜

いた。

「次は負けない……………よ？」

「また……………やろーね？」

そう呟き、「写シ」が剥がれた後、私たちの意識はそこで途絶えた。駆けつけた医療班によって医務室に運ばれた私たちだったが、翌日には元通りに元気になっていた。若
いっていいね！

燕さんとの立ち合いの後の私への風当たりはガラリと変わった。私とすれ違う人がいれば必ずあちらから挨拶をしてくるようになったり、陰口も聞こえなくなった。どうやら周りからも正式に私のことを親衛隊として認めてくれたみたいだ。というのも、後から聞いた話、燕さんって実は親衛隊の中でも随一の剣の才と実力を秘めた刀使だったみたい。それは獅童さんを凌ぐほどの……。だからその燕さん相手に一步も退かないで互角の勝負を繰り広げた私の評価が変わるのは当然のことだったらしい。

「立ち合いっていう機会を設けてくれた紫様には感謝しないと……。」

紫様のあの提案がなければこうはならなかったし、そもそも親衛隊の皆さんが紫様に相談しに行ってくれなかったら今も私のことは誰も認めてくれて無かっただろう。

「獅童さん、此花さん、皐月さん、燕さん、ありがとうございます。この恩は任務でお返しします！」

そして今日も私は親衛隊としての使命を果たすため、仲間のもとに向かう。私だけで

は困難な任務も5人揃えば怖いものはない。これからも、私はこの人たちと一緒に紫様のために荒魂を討伐していくことになる。気を引き締めなくちやね!……よし!

私はいつもの親衛隊の集合場所の扉を開けた。

「おはようございます! 今日もがんばりましょうね!」

……この時の私は、一年後、あんな事件が起こることなど思ってもいなかった……。

胎動編

御前試合

「真希さん。この書類はどこに置けばいいですかー？」

「ああ、その机に置いてもらって構わないよ。後で僕がまとめて片付けておくから」

「はーい。……っしょっ……とー！」

私、芹代紫音が親衛隊に配属されてから1年が経った。相変わらず今日も私は……というか親衛隊は忙しい毎日を送っている。

「ふいふい、いくら御前試合が近いって言っても、こんなに書類を確認しなきゃいけないのはキツすぎますよ……」

「紫音？口を動かしてる暇があるなら手を動かさなさい。大変なのは貴方だけではないのですわよ？」

「……………はい」

忙しい理由がそれで、もうすぐ御前試合が始まるんだ。御前試合では全国各地からいろいろな刀使や一般の人たちがここ鎌倉に集まってくるため、混乱を防ぐために注意事項の書類や地図の作成、各学院の刀使の詳細情報などをまとめなくてはならなかったりと、やることが山ほどある。……………はあ、まだまだ終わりが見えないな。あ、ちなみに親衛隊の皆さんのことは前から下の名前で呼ぶようにしたんだ。前にそろそろ苗字読みはやめてくれって真希さんに言われたことがきっかけだったんだよね。

「つ……… 疲れた………」

夜になり、ようやく全ての書類の作成とまとめが終わった私たちはとりあえず一息ついた。

「お疲れ様です。紅茶です、どうぞ」

「夜見さん、ありがとうございます……… はあく…… おいしく」

疲れた私たちに夜見さんからの紅茶のサービスが届けられた。夜見さんの入れる紅茶は本当に美味しいからすごく好きなんだよね。

「ふう…… それにしても、この時期は相変わらず忙しいですわね」

「そうだね。でも今回は紫音もいてくれたから去年よりは楽だったんじゃないかな？」

「ふふ…… そうですわね…… あら？」

ふと寿々花が視線を紫音の方に向けると、そこには机に突っ伏したまま静かに寝息を立てている紫音の姿があった。

「…… 寝てしまいましたか？」

「そのようだね。無理もない、朝から今の時間まで僕たちとほとんど同じくらいの書類をまとめてたんだ。それもほとんど休みなしで頑張ってたんだし、もう少し寝かせておいてあげよう……」

「全く…… この歳でよくここまで頑張れますわね……」

「ああ、だからこそ年長の僕達は心配もするし、面倒も見たくなくなるんだけどね……」

「ええ…… お疲れ様、紫音」

そう言いながら寿々花は自分の上着をそつと紫音にかけてあげるのだった。

——御前試合当日——

御前試合当日となり、試合会場となる折神家の訓練場とその周りには大勢の人で賑わっていた。今回の私たち親衛隊の役割としては、基本的に二人制で御前試合中の警備につくという役割だ。なんで二人制なのかというと、お前たちも御前試合を見たいだろう？と言った紫様の計らいによつてだ。正直これは嬉しかった。だって……あの時の約束を守らないといけないから。

「それにしても……まさかここまで人が入るとは思つてなかつたです」

そして今、私は真希さんと一緒に、試合が行われている訓練場まで来ていた。

「そうか、紫音は御前試合を見たのは初めてだったな。珍しいことじゃないさ。この御前試合は年に一度の大きな催し、そして日本の頂点の刀使を決める大会なんだ。このくらい当たり前だよ」

「へへ、そうなんですネ……………ん？」

私は次に出て来た一人の刀使に、何か感じるものがあつたため注視して見た。あの制服は……平城学館か？

「真希さん。あの刀使は？」

「ん？ああ、彼女は平城学館の……確か、十条姫和だつたな。鹿島神當流かしましんとうりゆうの使い手で、僕の後輩に当たるな」

「ああ、そういえば真希さんは平城学館出身でしたね」

「そうだ。予選でも相手を寄せ付けずにほとんど一撃で勝負を決めていたらしい。もしかすると、彼女が今回の大会の本命かもしれない」

うん……それは私も思つてたことだつたんだけど、何か彼女には別の目的があるんじゃないかと思えて仕方がないんだよね？現に今も試合に勝つたのに眉一つ動かさないし、試合中だつてどこか別のことを考えてるような様子でやってたし……。

「うーん……」

「どうかしたか紫音？」

「？ああ、いえ、こつちのことです。気にしないでください。それよりも……あ、来た」

一旦その十条さんのことは置いておき、次の試合で戦うために出て来た刀使のことを私は知っている。なぜなら……それは、一年ぶりに見た衛藤可奈美だから。

可奈美から予選を勝ち上がり、本戦出場の切符を手にしたと聞かされたのは今から十日ほど前だった。嬉しすぎたのか誤字脱字の多くあったひどいメールだったけど、どれだけ嬉しかったのかは良くわかるメールだったことはよく覚えている。舞衣も準優勝で本戦出場を決めて、美炎は準決勝で可奈美に負けて本戦出場はならなかったみたい。それでも準決勝まで行けたのならすごいと思う。

だから私はこう返した。「おめでとー！じゃあ、鎌倉で待つてるね！」

「彼女は確か紫音の友達だったな。衛藤………と言ったか？」

「はい、恐らくですけど可奈美も今回の大会の本命になりうるかもしれない存在ですよ

？立ち合いをした私が言うんですから間違いないです」

「紫音にそこまで言わせるなんてね。では、じっくり見させてもらうか……」

真希さんはそれつきり黙り、試合を観戦していた。可奈美の相手は鎌府女学園の刀使だった。物静かそうな雰囲気を出しながら御刀を構え、試合開始を待っていた。試合が始まるとその子は早速可奈美に向かって「迅移」を使い、御刀を振って来た。でもその攻撃を可奈美はステップと「迅移」を使って簡単に躲し、時には攻撃を受け流して自分のペースに持ち込んでいった。そして、勝敗は突然ついた。相手の「迅移」が止まった瞬間を見計らって動いた可奈美が、相手のこの御刀を手から弾き飛ばし、戦闘不能にしたんだ。

「そこまで！勝者、美濃関学院、衛藤可奈美！」

危なげなく、可奈美は勝利を収めた。強くなったね……可奈美。

襲撃の一閃

可奈美の試合を見た後、夜見さん達と警備の交代の時間となったため、所定の警備の場所での警備の仕事をした。可奈美の試合が見れないのは残念だけど、こっちとしても親衛隊の仕事がある以上、自分勝手に行動することはできないから我慢した。

「真希さん、私たち警備してますけどこれって意味あるんですかね？」

「もちろん意味はあるさ。全国からいろんな人が来るくらいの大きな催しだ。どんな輩がいるか分かったもんじゃ無いからね。今までにそんな輩が出た例は無いらしいが、念には念をとという意向らしいな」

「念には念を……ねえ？」

本当にそんな人なんているのかなあ？そう思ってた私だったけど……今日それが事実になることをこの時の私は知らなかった……。

午前中の警備の仕事を終えた後、私は午後の決勝までの間少し自由時間がもらえることになった為、可奈美達に会いに向かっていた。何せ決勝には可奈美が出るっていうからね！ここは一つ、友人として気合入れの一言でも言っただろうって思っただけ！（あ、事

前に親衛隊の皆さんには伝えておいたから問題なしだよ？」

「確か休憩場にいるって言ってたけど……あっ！」

電話で確認したところ、休憩場にいるって話だったから急いで来て見たところ、少し探してみると遠目だけど可奈美達を見つけたことができた。すぐに私は、人をかき分けてその方へ向かった。

「可奈美〜！」

「あ、紫音ちゃん！久しぶり〜!!元気にしてた？」

「うん！元気元気！」

ようやく辿り着いた先には、以前よりも少しだけ背が伸びて表情も前よりも凛々しく、たくましくなった可奈美の姿があった。その隣には以前あった時よりも大人びた雰

困気が出てる舞衣の姿もあった。二人の姿を見ると自然と私も顔が緩んじやうね。な
んか……肩の力が抜けるっていうか……。

「紫音ちゃん、その制服……よく似合ってるよ?」

「本当にそうだよ!親衛隊として様になってるね!」

「そ、そうかな……えへへ、あんまり褒められると照れるな……」

私の親衛隊の制服姿を見た二人が揃って私のことを絶賛して来た。そういえば、二人
は私の制服姿初めて見るんだっけ?

「今は仕事は無いの?」

「うん、少しの間だけ抜けて来たんだ。だから少ししたら戻りなくちゃいけないんだ
けどね」

「そうなんだ……。やっぱり親衛隊って忙しいんだね？」

「まあそれなりにね。それよりも……可奈美！」

「へ!？」

急に大きな声を出して自分の名前を呼ばれたことに驚いた可奈美は体をこわばらせた。そんな反応しなくても良いのに……。

「絶対に……優勝してね！優勝しなかったら許さないんだからね！」

「え……あ、う……うん!!絶対優勝する！優勝して……もう一度紫音ちゃんに挑戦するんだから！」

「そう、その勢いで頑張つて！じゃあ私、そろそろ戻らないとだから」

「え!?!もう行っちゃうの?」

「決勝の打ち合わせとか警備の確認とかを話し合わなきゃいけないんだ。だからすぐ戻らないと！じゃあね〜！」

「うん！またね〜！」

気合いを入れることはできたかな？私が可奈美にできることはもう無い。後は可奈美の実力次第だ。そう満足した私は急ぎ足で決勝戦の打ち合わせのため、屋敷の中に戻った。

「これより、御前試合決勝戦を始めたいと思います！」

屋敷に戻り、警備の配置を確認した数十分後、御前試合決勝戦が間もなく始まろうとしていた。警備だというから周りの警備なのかと思つてたけど、それは違くて、私たち親衛隊五人は紫様が座る玉座に控えてろという指示が出たんだ。紫様になんの意図があつてそんな指示を出したのか分かんなかったけど、とりあえず私たちは指示に従い、紫様が玉座に座つた後、その後ろに控えていた。

「両者、礼！」

決勝の舞台となる練武場に二人の刀使が佇んでいる。一人は私の友達の衛藤可奈美、もう一人は平城学館の十条姫和だった。二人とも静かに試合が始まるのを待っていたけど………なんだろう？

「あの人、さつき紫様が入って来た時一瞬だけど……殺意の籠った視線を向けてた気がするんだよね……何か胸騒ぎがする……」

気のせいなら良いんだけど……。この時の私はそう思う他なかった。

「【写シ】！構え！」

いよいよ決勝が始まる……。頑張れ！可奈美！

練武場内に静寂の空気が流れ出る……。

「……始めっ!!」

(シュバツ!!!)

開始の合図とともに練武場内に響き渡ったのは、何かが地面を蹴った音と、雷のような轟音。そしてその後には私の耳に届いたのは……………。

…………… 目の前の玉座に座る紫様を…………… 正確には紫様の座っている玉座を貫く十
条さんの太刀音だった……………。

「……………!?」

一瞬私は何が起こったのかよくわからなかったけど、瞬時に思考を回転させた。今、十条さんは紫様に向けて攻撃をして来た。その攻撃は私たち親衛隊も反応することができないくらい速さを持ったものだった。でもその攻撃を紫様は自身の御刀、童子切安綱・大包平を使って攻撃の軌道を変えたんだ。そして軌道の変わった攻撃はそのまま紫様の座る玉座を貫いた。この時間、約コンマ一秒。

「……………それがお前の一つの太刀か？」

「くっ!? 躲された!？」

紫様に攻撃を躲された十条さんは刺さった御刀を抜いて、再び紫様に攻撃をしようとしていた。けどどその時、私は妙な気配を紫様から感じ取っていたんだ……。何だろ、この気配……。この悪寒がするような妙な寒気は、まるで荒魂と対面している時のような感覚だ……。

「(って!? 今はそんなこと考えてる場合じゃ無いでしょ!?)」

自分で自分に喝を入れてその変な考えを払い飛ばした私は蒼月に手を掛けた。

「させるかっ!!」

私が動く前に、真希さんが十条さんの背後に回り、背中から御刀を容赦なく突き刺した。それによって十条さんの「写シ」は剥がれ、十条さんはそのまま膝をついた。その隙を逃さんとばかりに真希さんは御刀を振り上げて、十条さんに向かって振り下ろし

た。でも……その時だった。私たちにとって予想外の乱入者が割り込んで来た。その乱入者とは――

「ぐっ!!……大丈夫？」

「お、お前……」

その乱入者もとい、可奈美は真希さんの攻撃を直前で防ぎ、あろうことかこの紫様を襲った襲撃犯をかばったんだ。

「か……可奈美？」

「【迅移】!!逃げるよ!」

可奈美は真希さんの御刀を何とか外すと、【迅移】を使ってこの場から逃げ出した……もちろん十条さんも一緒に。

「可奈美……何の理由があるか分かんないけど……逃さないよ！」

私は既に入り口の門付近にまで逃げてしまっている二人を追うため、「迅移」を使おうとした。だがその時――

「芹代、待て。追わなくていい」

「え!?でもあの二人は紫様を……って、ああ!!結芽が勝手に!!」

私が、紫様の言った追いかけてなくて良いという発言に理解に苦しんでいた間に、結芽が命令を無視して二人に向かって襲いかかっていた。

「おねーさん達〜!逃さないよ〜!」

「親衛隊?!……くっ!!!」

結芽の振るった御刀を可奈美は肌すれすれのところまでガードに成功し、同時に体をし

なやかに動かして攻撃を受け流して回避した。

「……………へえ〜？」

「今のうちに!!……………せ〜の！」

「……………ああ」

二人はそのまま門を飛び越えて練武場を脱出した。本当なら今すぐにでも追いかけていたが、紫様の命令な以上、従うしかなかった。私は、自分の友達がなぜこのようなことをしたのか分からず、頭を悩ませていた……………。

襲撃犯達の追跡

「今、同じ学院の柳瀬舞衣と岩倉早苗の聴取を終えた。どうやら二人ともこのことに関してには知らなかったようだ」

可奈美と十条さんが逃げ出してから数十分、折神家は何か心当たりがないか、同じ学院の刀使である舞衣と岩倉さんに事情聴取をしていた。結果として二人は白、無関係だった。

「それにしても……何で紫様は追いかけるのを止めたんでしょうか？あそこで逃してしまつては……」

「紫様のお考えは分からないが、そう命令されたのだから僕たちは従う他ないよ」

「……そうですわね」

私たちは今、紫様の警護命令が出ているため、屋敷内の待機室にいる。率直に言えば、次の命令を待つてる状態でいつでも出動できるように装備は整えていた。

「……………ん？……………紫様からだ」

しばらく待っていると、部屋内に真希さんの携帯の音が鳴り響いた。

「はい、獅童です……………そうですか。わかりました、直ちに知らせます」

「紫様からですか？何と？」

「警護命令は解除、只今より搜索を開始せよ……………とのことだ」

「……………」

ようやくか……………。心の中でそう呟いた。現在可奈美達がどこにいるかは分かんない

いらしいけど、情報が集まり次第親衛隊にも伝わるようにするらしい。

「……………場所が分からない以上、搜索場所を限定することはできませんね」

「とりあえずはこの周辺を搜索せよとのことだ。僕たち親衛隊は手分けして搜索する範囲を決めて搜索に当たろう。みんな……………それで良いかい？」

「問題ないですわ」「了解しました」「はい」

方針は決まった。後は実行あるのみだけど、その前にずっと気になっていたことがある。

「結芽は何でいないんですか？」

「結芽には部屋に戻ってもらってますわ。あの子が外に出たら無駄な血を流させてしまいますから」

「ああ……… 確かに………」

その言葉だけで理由がわかってしまう辺り、私も親衛隊の皆さんのことをよく理解してるんだなあと改めて理解できた………。

「まあ、どこにいるの？ 可奈美………」

あの後、私たち親衛隊は搜索範囲を決め、各自で搜索に移っていた。私は練武場の西側、真希さんは東側、寿々花さんは南側、夜見さんは北側を搜索していた。それでも、私たちは可奈美達を見つけることはできなかつた……。

「やっぱり手がかりがないんじゃないや……あれ？」

再び搜索を始めようとした矢先、私の目に映つたのは、何やら運転手に話をつけて車に乗ろうとしている舞衣の姿だつた。

「(何で舞衣がここに……?……もしかして!)」

何か思い当たつた私は、舞衣が車に乗り込む前に止めようと舞衣に向かつて走つた。

「舞衣! ちょっと待って!」

「………… え？！紫音… ちゃん？」

「何でここに？それと………… どこに行くつもり？」

「それは…………」

私の登場が予想外だったのか。しどろもどろになってる舞衣。私の予想が正しいなら舞衣は多分…………。

「もしかして………… 可奈美達の居場所が分かった？」

「っ!!？」

………… どうやら凶星だったみたいだね。相変わらず隠し事は苦手みたいだね舞衣は…………。

「…………」

「その反応は肯定してるってことで良いよね？それで？舞衣は可奈美達に会ってどうするつもりなの？」

「……………」

私の問いかけにも無反応を貫いてる舞衣。

「黙ってちゃ分かんないよ？」

「紫音ちゃんにはお見通しみたいだね……………。私は……………。何で可奈美ちゃんがあんな事をしたのか知りたいの。事前までそんな素振り全く見せてなかったし、あの子とも知十条さんり合いとも思えない。だから知りたいの、可奈美ちゃんの真意を！」

「……………。そっか」

舞衣の言葉は私の心の中に深く浸透して来た。その気持ち……………。私にはわかるよ？

だって…… 私も同じ気持ちだから！

「舞衣の気持ちはよくわかった。でも、いるのは可奈美だけじゃなくて襲撃犯の十条さんもいる。一人で行くのは危険だよ」

「そうだけどつ！」

「だから、私もついていくよ。私も可奈美のことは気になってるけど、その前に私は親衛隊。襲撃犯を捕らえるのが今回の任務だから居場所が分かった以上、行かないわけにはいかないんだ」

「紫音ちゃん……」

「分かって、舞衣」

舞衣は少し考えてたけど、考えがついたのか私の方を見て言った。

「分かった！行こう！紫音ちゃん！」

「…………… 決まりだね。そうなれば……………」

私はそつと耳のイヤホンに手をあて、無線機能をオンにし、親衛隊に連絡をした。

「襲撃犯の居場所が判明しました。私は先に向かい、搜索を始めます。居場所は今から伝えますのでそれから他の皆さんは警備隊を率いて応援に来てください。お願いします！」

『分かった。直ちに向かう』『承りました』『分かりましたわ』

親衛隊に居場所を伝えた後、舞衣の車に乗り、可奈美達の居場所、東京方面に向かった。待つてよ？可奈美……………。洗いざらい全て吐かせてあげるから！

「……………
いた？」

「可奈美ちゃん達が泊まってる部屋に入ってみただけど、既にいなくなってる……………」

「……そつか……感づかれたか」

鎌倉を出発したのが結構遅い時間だったこともあつて、東京の台東区に着いたのは明け方だった。車の中で軽い睡眠を取った私たちは、台東区に存在する宿を片っ端から当たってみた。何軒か当たつてみて、ようやく二人が止まつてる宿を特定できたんだけど、感づいたのか既に部屋はもぬけの殻になつてたみたいだった。

「次は、ここら辺の店を当たつて目撃情報がないか聞いてみよう」

「うん、分かった」

ここら辺を通っているはずなんだ、誰か一人くらいは見た人もいるだろう。そう期待を膨らませながら商店街に向かった。

「舞衣、そつちはどうだった？」

「ごめん、こつちは手掛かり無しだよ……………」

「そつちもかく……………私の方も収穫は無し……………困ったな……………」

商店街の店の人や街中の人たちにも話を聞いてみたけど誰も、知らない知らないの一点張りだった。これじゃキリがないよ……………。

「親衛隊の皆さんが来るのはもう少しかかるし……………もう少し話を聞いて……………」

気持ちをもう一度引き締め直して、再び捜索に入ろうとした時、私の無線機が鳴った。

私はすぐに無線機能をオンにして耳に手を当てた。

「どうしました？」

『紫音。君のいる台東区に荒魂の出現が確認された。僕たちが行くまで紫音には人々の避難と荒魂の討伐を任せたいんだけど良いかい？』

「はあ……？それは構いませんけど、捜索の方はどうしますか？」

『そちらは後回しで構わない。行動が遅れて人々に被害が出ては遅いからな。紫音、今すぐ行動に移れ』

「了解、直ちに向かいます」

無線を切り、私は舞衣の方を向いた。

「舞衣、近くで荒魂が出現したみたい。私は一旦捜索を中断してそっちに向かうけど、舞

衣はどうする?..」

「私も行くよ。刀使の使命は荒魂を祓うこと。それを優先しなくちゃ!」

「よし、じゃあ早速向かおう。私について来て!」

話がつき、私は舞衣を連れて荒魂の出現が確認された現場に向かった。場所はここから約1km離れた神社みたいだ。急いで向かおう!

「ここで合ってるの?紫音ちゃん?」

「うん、間違いないよ」

数分後、私達は避難の指示を周りの人々に出しつつ、現場の神社に到着することができた。近くに大きな鳥居があり、随分とインパクトのある神社だなく……と心の中で呑気な事を考えていた。

「スペクトラムファインダーは、もう少し北を指してる……。ってことはもう少し奥にいてることか……」

「もう少し行ってみようよ？紫音ちゃ……！！？」

「ん？どうかし……た？」

何かに驚いた舞衣に怪訝な反応をした私は、そのまま自分の視線を舞衣の視線の先に向けた。その先にいた二人の人物に私も目を疑った。そこにいたのは――

「可奈美……？」

「!? 舞衣ちゃんと…… 紫音ちゃ…… ん？」

今現在逃走中で、私達親衛隊が行方を追っている衛藤可奈美と十条姫和が…… 私達の目の前にいた。

譲れない想い

「可奈美……」

私の目の前に今私たちが追っている可奈美と十条さんがいる。少し驚いたけど、何でいるのかは何となく理解できた。驚いて逆に冷静になったからかもね。

「二人とも……？何でここに？」

「そつちも同じなんですよ？荒魂が出たからここに来たって理由が？」

「う…… うん……」

そう可奈美は答えるが、どうにも歯切れが悪い。でも、とりあえずここで会えたことは大きい。このチャンスを物にしようと私は二人に向かって問いかけた。

「二人とも、もし抵抗しないで来てもらえるなら危害は加えるつもりはないよ。だから、ここは大人しく一緒に来てもらえると嬉しいんだけど?」

「そうだよ可奈美ちゃん!今一緒に来れば罪を軽くしてくれるって羽島学長も言ってくれてたし、戻ろうよ!ねっ?!」

そっか……学長も来てたんだね。久しぶりに会いたいな……ってそんなこと考えてる場合じゃないか。でも、それを聞いても二人は首を縦に振る様子はなかった。むしろ十条さんに至ってはすでに臨戦態勢に入ろうとしていた。まあ、こっちも舞衣はすでに御刀は抜いていて、私もいつでも蒼月を抜ける状態にはしてるんだけどね。

「そう言うのなら……何故御刀を向けている?お前は可奈美の親友なんだろう?」

「親友だからこそだよ!親友だからこそ私は貴方から可奈美ちゃんを救ってみせる!覚悟して!」

そう言うと同時に舞衣は「写シ」を張り、十条さんに向けて斬りかかった。だが、その剣が十条さんに届くことはなかった……………。何故なら——

「っ!?!可奈美ちゃん!?!……………。何で!?!」

その舞衣の振り下ろした剣を横から可奈美が割って入り、御刀で防いだからだ。その行動に舞衣も私も少なからず驚いた……………。だが、その後に可奈美から出た一つの発言に、さらに私たちは驚かされることになった。

「ごめん!舞衣ちゃん……………。でも……………。私見ちゃったんだ……………。あの時姫和ちゃん
の攻撃を躲した時に……………。正確には御刀を紫様を取り出した時に……………。大きな
禍々しい大きな眼みたいのが……………。まるで荒魂みたいな」

「!!?」「っ……………」

その可奈美の発言に私達は言葉を無くしていた。紫様が……………。荒魂?そんなわけ……………。

「そんなわけ……だって紫様は20年前の大荒魂を鎮めた大英雄で現折神家当主の
凄い人なんだよ？そんな人が荒魂なんて……」

「それは違う!!」

舞衣の言った事を全力で否定した十条さん……何が言いたいんだ？

「奴は……折神紫という皮をかぶった大荒魂なんだ!」

「……」

「だからごめん!舞衣ちゃん!一緒にはいけない。このまま姫和ちゃんを一人にはして
おけないよ!私についていく!これは譲れない!」

「……………」

「……………本気……………なんだね？可奈美ちゃん……………」

「うん!!」

あの顔だと……………多分舞衣は二人のことを逃すだろうな……………。でも……………私
は……………。

「……………分かった。可奈美ちゃんを信用するよ」

「ありがとう！じゃあ姫和ちゃん、早くこの辺の荒魂をー」

「……………ちよつと待ってよ」

「……………」

今までほとんど空気になってた私が口を挟んできたことに気づいた三人は、私の方を見た。

「誰が……見逃すつて言ったの？舞衣は言ったかもしれないけど私は一言も言っていないよ？」

「ちっ……」

私の発言に十条さんは御刀をこちらに向けて来た。……どうやらやる気みたいだね？

「お前……さつき私が出たことを聞いてなかったのか？お前達親衛隊が従っているのは荒魂だ！」

「……逆賊の言うことなんて信用できないよ」

「紫音……ちゃん？」

何か戸惑ってるような声をあげた可奈美と舞衣。私だって……できれば友達にこんな真似はしたくない。でも……私は親衛隊第五席、芹代紫音だ。今は友達の情けなんて物は……捨てる!!でも……最後までらしいの情けはいいよね?そう思い、私は再び二人に言った。

「最終警告、抵抗せずについて来るなら危害は加えない。もし抵抗するなら……分かっているね?」

私は蒼月の鞆部分に手をかけながら言った。その時、私の右眼が不気味に金色に変化した。そのことは自分にも察知できた。むしろ都合だ……。でも……できれば戦いたくない。お願い……。自首して?

「それでも……私は姫和ちゃんについていく!わかってよ!紫音ちゃん!」

「……………はあゝ」

そっか……残念だよ……仕方ない、手荒な真似はしたくなかったけど。私は静かに蒼月を抜き、「写シ」を張った……。

「なら、遠慮はしないよ？ 私は、貴方達を敵と認識する。強引にでも連れて帰るから……。」

「……………」

「紫音ちゃん！やめて！友達同士で争うなんてだめだよ！」

「舞衣、今ここに居るのは可奈美の友達の紫音じゃない。居るのは……親衛隊第五席、芹代紫音なんだ。もう二人にかける情けは無いよ？」

さっきのが最後にかけた情けだったんだ。あれを断られた以上、もうこっちのやることは確定した。あの二人、紫様にあだなす逆賊を拘束する！

「でも……!!紫音ちゃん！後ろ！」

「……………」

舞衣の叫び声にも私は反応しなかった。大方後ろに荒魂がいるんでしょ？わかってるよ…………… 視えたんだから。だから……………。

「ふっ！」

私は素早く後ろを向き、「迅移」の勢いを使ってそのまま蒼月を荒魂の胴に向かって一閃した。そして、また私が二人の方を見るのと同時に荒魂の身体は真つ二つに斬り裂かれた。

「さて、邪魔者もいなくなったんだし、二人とも？覚悟はいい？」

「紫音ちゃん……………」

私が一歩近づくと二人は後退していった。御刀を構えてるけどその手は震えて

いた。そんなんじや私を止めることは出来なさそうだけどな？

「(姫和ちゃん…………… どうする？多分今私達が戦ったら……………)」

「(…………… 確実に負けるな。さっきの攻撃だけでもわかる。奴は…………… 強い)」

何かこそこそ話してるけど、そんな余裕あるの？そつちが来ないなら……………。

「こつちから行くよ？…………… はっ!!」

「なっ!？」

「姫和ちゃん!!」

私は再び【迅移】を使って、二人の背後にまわった。そして十条さんの首筋に静かに蒼月を突き付けた。二人は何が起こったのかわからなかったみたいで、驚きを隠せていなかった。

「どうする？このまま【写シ】ごと斬ってあげてもいいんだけど？」

「駄目っ!!」

隣にいた可奈美がそれに一拍遅く反応し、私の御刀を弾こうと御刀を私に向かって振り下ろしてきた。でも、それも視えてる。

「っ!!」

「!?素手で御刀を!」

視えた情報をもとに、私は可奈美の御刀を軽く手で受け止めた。

「可奈美？成長したのは可奈美だけじゃないんだよ？私だって親衛隊としてこの一年間、前線に立って何度も何度も荒魂と戦ってきたんだから！」

「っ……………」

可奈美はなんとか御刀を私の手から外そうとしているが、私の手はびくともしてない。【八幡力】で強化してあるからそう簡単には解くことはできない。闇雲に手を出した可奈美の落ち度だね。

「はあっ!!」

「…………… っ」と

私が可奈美の方に意識を向けていると、今度は十条さんの方から仕掛けて来た。私が突きつけていた蒼月を素早い反転で御刀を使って払い除け、私に一撃を入れようとして来た。……………でも。

「（真希さんとかに比べたら大したことないな…………… しかも……………）はあっ!」

「ぐっ!!」

十条さんが攻撃に移るほんの一瞬の隙を見逃さなかった私は、その隙を狙ってそのまま強烈な足蹴りを鳩尾にくれてやった。相手は一応、御前試合決勝までくる実力者みただけで、真希さんたち親衛隊ほど強くはない。私も何度か立ち合いを試してみたことがあるけど、本当に強かった。さすが、親衛隊に選ばれるだけはあるって思えたんだ。その人達と比べちゃうと…… やっぱり…… ね？

私の蹴りをまともに食らった十条さんは、数メートルほど吹き飛び、その衝撃で「写シ」が剥がれてしまっていた。私は可奈美の御刀を持つている手を離し、十条さんの元に静かに歩み寄った。

「ねえ？もういいでしょ？お願いだから自首してよ？私もこれ以上…… 手荒な真似はしたくないから……」

「ぐっ…… だ、誰が……」

「はあ〜、強情なんだから…… しょうがない。こうなったら気絶させてでも連れ

てくからね?」

自首してくればそれで終わりなのに、この人はまだ諦めてない。この人のこれだけの執念って何なの?…… やっぱり紫様は本当に荒魂…… いやいや! 何考えてるの私!? そんなわけないでしょ! でも……

「(あの時、紫様から感じ取れた空気の流れ、そして雰囲気。あれが私の気のせいじゃないなら……)」

「はあっ!!」

「……っ! 可奈美!」

余計なことを考えていたせい、集中を欠いてしまったみたいだ。可奈美が向かって来てることに気づかないなんて……

「ふんっ!」

「くっ…… ううっ……」

可奈美の攻撃を蒼月で受け止めた私は、そのまま罅迫り合いに持ち込んだ。

「………… 可奈美。まさかあの時の約束をこんな形で果たすことになるなんてね？」

「うん…………。でも、こうするしか………… こうしなきや姫和ちゃんを守れないって思ったから！」

「もうやめにしよう？こんな形で可奈美と戦いたくなんてないよ？………… これが本当に最後の通告。一緒に戻ろう？」

「………… ごめん」

最後まで自分の意思を貫いた可奈美。そっか………… 可奈美も覚悟を決めたんだね。私の警告も耳を通らないほどの…………。

分かったよ……………。

なら……………。

「もういいよ……………。可奈美の覚悟は伝わったから。逃げるなら逃げていいよ？ただし……………」

「…………… ただし？」

「私に勝つことが出来たらね！はあっ!!!」

「ひゃあっ!!!」

今までよりもはるかに強い力で可奈美を御刀ごと吹き飛ばした。吹き飛んだ可奈美は先ほどの十条さんと同じように、すでに「写シ」が剥がれてしまっていた。

「二人とも、逃げるんだつたら早めにした方がいいよ？早くしないと真希さん達……他の親衛隊の人たちも来ちゃうからね？」

「……………」

「紫音ちゃん……………」

疲れか、絶望か、ともかく私のその発言に二人は声すら出せずにいた。

「まあ、でもその前に決着はつきそうだけど……………。ここからはギア上げていくよ!!」「つ?!消えつ……………」

今までの倍近い【迅移】で私はまた二人に向かっていった。今度はさつきまでの手加

滅の攻撃じゃない。食らえば死にはしないけど怪我くらいはする。その攻撃を二人に
対して使おうとした……その時だった。

『紫音、聞こえるか？』

「……？」

突然無線機が鳴り、真希さんの声が聞こえたから、私は攻撃を中断しその場で無線機
に耳を傾けた。その様子を二人と舞衣は静かに見つめていた。

「聞こえています。何かありましたか？」

『ああ、聞くが君のいる場所の荒魂はすでに討伐したか？』

「はい、全て討伐完了してます」

「そうか、では……悪いんだがすぐにそのまま原宿方面に向かってくれないか？どう

やらまた荒魂が出たらしい」

「そうですか……。今回も搜索よりもそちらを優先させた方がいいですよね？」

「ああ、それで構わない。では、直ちに向かつてくれ。僕たちもすぐに向かう」

「了解です」

どうやら新たな任務みたいだ。私は今すぐに原宿に向かわなければならない。今行っていることを中断して……。

「紫音ちゃん……？」

いまだに御刀を向けて警戒を強めている二人に対して私は、「写シ」を解き、蒼月を戻した。そして二人に言った。

「さつき親衛隊から連絡があつて、これから私は原宿に行つて荒魂を討伐しにいかなく

ちやいけないことになったの。今やつてることを中断してね？」

「え、えくつと？」

私の言いたいことがまだ理解できてないみたいだね…………。しょうがない…………。

「つまり、〃襲撃犯の搜索及び拘束を一時中断して荒魂討伐に行け〃 って言われたんだよ。だから今はすぐにでも原宿に行かなくちやいけない…………。」

「それって…………。つまり…………。」

「はあく、運が良かったね。今回は逃げていいよ。この事については私がうまく説明しとくから…………。」

「!!!」

私のこの一言に二人は揃って驚いていた。

「……いいの？」

「そう命令されたんだからしようがないでしょ？ほら、早く行きなよ。それに……私だってこれ以上こんな戦いしたくなかったし、ちょうど良かったよ」

「うん……ありがとう、紫音ちゃん……」

そう言うと、二人は御刀を戻し、そのまま神社を後にしていった。普通なら襲撃犯達を逃したって言われるかもだけど、今回はそれよりも優先する任務があったからって言い訳できるから問題はないよね？

「舞衣はどうする？このまま鎌倉に帰る？」

「私も行くよ。荒魂が出たのに放ってはおけないよ！」

「分かった。じゃあ行こう！」

私達は、
今度は原宿方面に向かって移動を始めたのだった……。

逃亡者の切なる想い

「舞衣、さつき可奈美達と別れるときに何か渡してたけど、あれ何なの？」

可奈美達を逃してから、私と舞衣は原宿で荒魂を討伐しに行った。現場には既に他の親衛隊の姿もあって、任務に移っていた。それもあって、原宿の荒魂討伐にはそんな時間がかからないで終わることが出来た。今はその帰りの車内の中だ。

「何って……クツキーだけど？」

「クツキー？」

「そう、逃げてる間にお腹が空いた時にでも食べてってあげたの」

ああ、そういえばずっと舞衣のポケットからガサガサ言ってたけど、クッキーの入った紙袋の音だったんだね。何か渡してるなくって思ってたけど、それなら問題ないか……………」

「…………… ねえ、紫音ちゃん……………」

「ん？なに？」

何か私の顔を伺うようにして聞いて来た舞衣。どうかしたのかな？

「もし…………… 私が可奈美ちゃん達の居場所を知ってるって言ったら…………… どうする？」

「…………… ?知ってるの？」

「もしもの話。じゃあ質問を変えるね？紫音ちゃんは今、二人の居場所を特定できたとしたら…………… 捕まえに行くの？」

「……………」

言いにくいことを……………。そりゃ、私だって好き好んで可奈美と十条さんを追いかけ
てるわけじゃない。何も無ければこちらは何もしないんだ。でも二人は紫様を襲撃し
た逆賊なんだ。私情で捜索を止めることなんてできない……………。だから。

「他に任務がないなら行くかもね？だって、それも任務だから……………」

「そっか…………。そうだよね……………」

私の答えを聞いて、舞衣は悲しそうな顔をした。

「舞衣はさ？十条さんが言ったことはどう思ってる？」

「え？…………。紫様が大荒魂だって話？…………。私は…………。信じようと思ってる」

「…………… 確か。信じるか……………」

舞衣の答えは半ば分かっていった。あの時、可奈美達を逃すと決めてた時点でその話を信じ切っていると分かっていたからだ。

「紫音ちゃんは……………？」

「私はまだ信じられないかな。情報が少なすぎるし、確たる証拠も無い。可奈美の証言だけじゃまだまだ足らなすぎるよ」

「…………… じゃあ、もしその証拠があれば、紫音ちゃんは可奈美ちゃん達の味方になってくれる？」

「あればね？ 私達だって従ってたのが荒魂だって分かって従うほど馬鹿じゃないよ…………… でも、それ相応の証拠じゃないと私はともかく他の親衛隊の皆さんは納得してくれないと思う」

「！ありがとう！それだけ聞れば十分だよ！」

さつきまでの悲しそうな顔は姿を消し、代わりに満面の笑みを見せた舞衣。

「可奈美ちゃん……お願いね？」

紫音ちゃんと舞衣ちゃんと別れた後、私衛藤可奈美と姫和ちゃんは、舞衣ちゃんから貰ったクツキーの袋の中に入った紙切れに書かれた場所に向かった。そこにいたのは恩田累さんって言う、羽島学長に頼まれて来たって女の人がいた。私達はとりあえずその言葉を信じる事にして、恩田さんの自宅までついていくにしたんだ。

「それでだ、可奈美には聞いておきたいことがある」

「うん。何かな？」

今私たちがいるのは恩田さんの自宅の一室。お風呂を貸してもらってさっぱりした後、姫和ちゃんから話があるところの部屋に呼び出されたんだ。

「お前が見たと言っている折神紫の後ろの荒魂について教えてくれ」

「あゝ……………」

唐突な質問に戸惑いを覚えたけど、私が見たことを素直に話せばいいだけだよな？

「一瞬だったから何とも言えないけど……………大きな目がギョロってこっちを睨んで、その周りは何か禍々しい空気見たいのが支配してたみたいな感じだったかな？」

「一瞬？すぐに消えてしまったと言うことか？」

「少し違うかも、正確には隠世に潜ったみたいな感じだったよ？何と言うか……………【迅移】でより速い層に潜る時の感覚と似てたかも？それと……………隠世から御刀を取り出してるように見えて……………」

「隠世に潜った……………」

隠世から御刀を取り出すなど聞いたことがないみたいに、姫和ちゃんは思考を回らせ

ていた。私も途中から何言ってるのか分からなくなっちゃったよ……。

「今からでも……誰かを味方につけることはできないかな？ご当主様の正体を話してさ？」

「味方と言つても、誰をつける気にいるんだ？そんな話簡単に信じてもらえる話じゃないぞ？」

「うん、一番はやっぱり親衛隊なんだけど……望みは薄いかな？」

「だろうな。確かに奴らが味方になるならそれほど心強いことはない。だが……一席の獅童真希や第二席の此花寿々花は折神紫に深い忠誠を誓ってるだろう。並大抵のことではこちらに味方することはないだろうな……」

「やっぱりそうなるよね……親衛隊つて折神家の中で一番強い刀使が配属されるところだもんね。忠誠だつて普通の刀使とは違うはず……そんなすごいところにいるなんて、紫音ちゃんは……」

「……………」

「?どうした可奈美?」

私はその時、一つの案を思いついた。でも、これは今の段階では無理かもしれない。でも、言うだけなら自由だよな?だから私は姫和ちゃんに私の案を聞いてもらう事にした。

「…………… 紫音ちゃんを味方につける事はできないかな?」

「!?あいつをか!」

私の出した案に姫和ちゃんは思いつきり驚いていた。当たり前だよな……………。でも、これが最も可能性があるとは思うんだ。

「正気か?さっきのあいつの反応を見ただろう?私やお前が折神紫の正体を話しても考

えが変わらなかつた奴なんだぞ？そんな奴を味方につけることなんて出来ないだろう？」

「それは多分、十分な証拠がなかつたからだと思う……。私や姫和ちゃんがいくら言つても、それが確実な証拠になるつてわけじゃないでしょ？私たちには今、それが必要なんだよ、誰でも納得するような御当主様が大荒魂だつて言う証拠が」

「……」

「ちゃんとした証拠を見せれば、きっと紫音ちゃんなら分かつてくれる！だから、それも考えてくれると嬉しいかな？」

私たちだけじゃ、御当主様に勝つ事は多分出来ない。だからこそ仲間が欲しいの。そのためにも紫音ちゃんには味方になってもらいたい。

「分からないな。友達とはいえ、自分に対して攻撃をして来た奴をなぜ信用できる？」

「そんなの、友達だからに決まってるでしょ？親衛隊だとか関係ない。紫音ちゃんはきつと信用できるよ！」

「はあ……もういい……一応検討はしておく」

「ありがとう！」

話が済んだ後、疲れた体を癒すために私達はすぐに床についた。すぐに眠れるかと思っただけ……何故かなかなか寝付けなかった。今日だけでいろいろあったせいで気持ちがいっぱいだからかもね。

「……………
眠れないのか？」

「そう言う姫和ちゃんもね……………」

寝れてないのは姫和ちゃんも同じだったみたいだね。

「ねえ…………… 姫和ちゃん？ 一つ聞いていい？」

「…………… 何だ？」

「私達って御前試合で決勝まで上がった仲でしょ？」

「それがどうかしたか？」

「て事はさ？ 五箇伝の中でも一番強い刀使って事になるのかな？」

私はこれだけでも姫和ちゃんに聞いておきたかった。

「まあ……今所属している中ではそうなるんじゃないのか？」

「……やっぱりそうだよ。はあ……」

予想通りの答えに私は納得のため息をついた。これを聞きたかったのもあるけど、他にも答えがないかなって聞いて見たんだけど、結局変わらないか。

「何が言いたいんだ……お前は……」

「確かに、五箇伝の中では一番強いかもしれない。だからこの先どんな相手が来ても負けない！……そう思ってたんだけど……今日紫音ちゃんと戦って現実を思い知らされちゃったよね……」

「っ……」

私の言った事に、紫音ちゃんと戦った時に受けた攻撃が疼いたのか、顔をしかめた姫和ちゃん。私はそのまま続けた。

「私達二人掛かりで戦っても紫音ちゃんにはまるで歯が立たなかつた……。私にとっては同い年、姫和ちゃんにとっては一つ年下の子にだよ？」

「………… そうだな。もしあの時………… 奴が攻撃を中断してなかつたら私達は今頃………… 鎌倉に連れ戻されてただろうな…………」

「うん………… そうだね…………」

だからこそ、あの時の紫音ちゃんの計らいには感謝しないと…………。その為にも…………。早くこの状況を何とかしなくちゃ！心の中でそう決意を固めていると…………。今度は姫和ちゃんの方が喋り始めた。

「可奈美………… その紫音なんだが…………。戦ってる時、妙に雰囲気が変わったような気がした…………。いや、実際変わった」

「え?..... どう言う事?」

「その確信が持てたのは奴の御刀を払い除けた時だった。その時見えた奴の目が..... 正確には右眼が..... 金色に変わっていたんだ.....」

「金色.....?」

そんなの聞いたことがない。人の眼の色が勝手に変わるなんて.....。

「雰囲気もまた異質で何と言っているのか分からないんだ.....。でも、眼の色が変わっていたのは事実だ.....。何か心当たりは無いか?」

「ううん。無いよ.....。一年前にもそんなことは無かった.....。と思う」

「妙な間があったのが気になるが、とにかく奴には何かある。気をつけておけ.....。」

「……………
分かった」

その会話を最後に、私達はそのまま眠りについた。紫音ちゃんのことには気になるけど、今は体を休めないと……………。

「(明日から…………… 頑張らないと!)」

学長のお咎め

「失礼します」

折神家の屋敷に戻って来た私は、舞衣と一緒に局長室に入室した。中には既に結芽以外の親衛隊の皆さんと、紫様、そして…… 鎌府学長の姿があった。

「遅い！紫様を待たせるとは何事か！」

「っ!?!」

「…………… すいません」

入ると同時に鎌府学長からいきなり罵声を浴びせられた。私は慣れてるけど、舞衣に

至っては怖がつてるみたいだ。この人は普段からこんな調子で、失敗するとそのことをネチネチと咎めてくるから苦手なんだよね……。まあ……。別に今回は任務失敗してるわけじゃ無いけど。

「鎌府学長…… 良い。その二人は今し方ここに戻って来たばかりなのだ。それに、任務もしつかりこなして来ている。多めに見てやれ？」

「…… はっ」

紫様がそう助け舟を出してくれた事によってそれ以上お咎めをくらうことは無かった。てか、お咎めされるのも納得行つてないんだけどね……。

「報告します。東京都台東区、原宿区の荒魂討伐は完了し、住民への被害もありません。ノ口の回収は後から来た特別祭祀機動隊に任せましたので後からこちらに送られてくるよう手配しておきました。…… 報告は以上です」

「そうか、ご苦労……」

「いや、待て！」

突然、鎌府学長が声をあげ、私の方を鋭い視線で睨みつけていた。何かわからないことでもあったかな？

「貴様は確か、紫様を襲撃した逆賊二人の搜索の任に当たっていたはずだ！そっちの搜索はどうなっている！」

「……」

「何を黙っている？さつさと答えろ！」

はあ………。せっかちなんだからこの人は………。でも、話そうと思ってたし、この際話しちゃおう。

「そつちの搜索は難航してます。一度足取りが分かかって接触しようとしたが、その際に今回の荒魂討伐の任が飛び込んでできてしまった為、今回はそちらを優先しました」

「優先だと……？ そんな任務どうだっていいだろう！ 貴様が優先するべきなのはその逆賊どもをさつさとここに連れ戻すことだろう！ 貴様らは紫様に危害を加えられて何とも思わないのか！ この役立たずどもが!!」

「っ！……」

その鎌府学長の発言には流石の私でもカチンときた。私達だって紫様が襲われて何も思っていないわけじゃない。むしろこれまでに無いほど力を入れて搜索しているほどだ。でも、それと私達親衛隊の使命は関係ない。いくら逆賊の搜索をしていても、人々が危険な目に遭いそうならばどこだろうと荒魂討伐に向かう。それが私たちのもう一つの使命なんだ。今の学長の発言は私たちの使命を侮辱したようなものなんだ……誰でも頭にくる……カチンと来たのは真希さんや寿々花さんも同じみただけだね……夜見さんは表情が変わらないからよくわからない。

「じゃあ鎌府学長は……。人々が荒魂に襲われていたとしても無視しろと言いたいですか？」

「っ!?何を……。」

「おい、紫音！」

真希さんの制止の声にも私は耳を貸さなかった。

「確かに搜索も大事ですよ?ですが、それ以前に私達は刀使です。人々が荒魂に襲われているならどこだろうと駆けつけて祓う。例えどんな任があるかと……。学長の今の発言は……。とても元刀使の言葉とは思えませんね?荒魂討伐を……。それも原宿という人々がたくさんいる場所の荒魂討伐の任務を”そんな任務”扱い……。学長……。貴女は本当に刀使だったのですか?」

「!!貴様っ!!誰に向かって口を!!実験体の分際でっ!!」

「実験体?..... ふふ、ご冗談を。私は実験体になった覚えはありませんよ?」

「なっ?!? どう言うことだ!!」

激情した学長は、私の言ってる意味がわからなかったのか、隣にいる寿々花さんに尋問した。

「紫音の言ってる事に間違いはありませんわよ? 紫音は私たちのようにノ口を体内に入はしていません。これは、本人が決めた事ですわ」

「な、何故だ! 親衛隊はノ口を体内に入れる事を全員が受け入れていると思つていた..... なのに何故貴様だけ!!」

何故つて聞かれてもな〜.....。別に変な理由もないんだよね.....。強いて言うなら.....。

「使う理由がなかったからですよ？」

「なに?」

「使う理由が私にはないんですよ。別に今の状態でも私は十分やっていけてますし、問題ないですよ。……それに」

「…… まだ他にあるのか?」

「私…… 注射って苦手ですし?」

「ふっ……」

あ、真希さんと寿々花さんが笑った。って言うかよく見ると、紫様も何故か口角を少し上げて笑みを浮かべてるし、夜見さんまで何故かこつちに來て頭を撫でてくる始末だ。うん…… そうなんだよね。その実験に参加しなかったのも、注射があまり得意

じゃなかったからなんだよね……………。

「ふ…ふざけるなあ!!!」

「鎌府学長、もういい…………… 下がれ」

「っ!?!…………… ですが!」

「下がれと言っている」

「……………!…………… 失礼しました」

鎌府学長は去り際、私たち親衛隊に向けて殺意じみた視線を飛ばして来たけど、意にも介さないで無視した。はあく、やっと静かになった……………。と言うかあの人はなにに來てたんだろ?

「はあ……………」

「大丈夫？舞衣？あの人がいつもあんなだから、初めて会うと少し怖いよね？」

「もちろんそれもあるけど…… それよりも紫音ちゃんがあの人に向かっていろいろ言つてた方が怖かったよ……」

「全く（ですわ）だ」

そっち？別に私からしたら今は言いたいこと言えたからスカツとしてるんだけど？

「でもあの人は私たちの悪口言つたんですし、任務のことも酷く言つたし、言つてよかつたつて今でも思つてますよ？」

「だからつてあれは言い過ぎだろう……。はあ……。でも、僕も少し胸が軽くはなつてゐるかな？」

「私も同感ですわ。あの言い分は学長といえど不躰ですわ。私も胸がスツとしてます

わ

「……………」

皆さんそれぞれ言いたいことを普通に言っていた。やっぱり皆さんもあの学長の発言には腹を立ててたんだね……………」

「そういじめてくれるな。一応私の後輩なんだからな」

「出過ぎた真似をしましたね。すみません」

「まあ良い。それよりも今後のことなのだが、お前たち親衛隊はしばらくあの二人の捜索には加わらなくて良い」

「?..どう言うことでしょうか?..」

捜索に加わらなくて良いと言う紫様の発言に意味がわからないと言わんばかりに首

を傾げた私達。

「先ほど鎌府学長に頼まれてな……。今後の逆賊の搜索は鎌府の生徒が行うと……。」

「鎌府が……ですの？」

「ああ、何か鎌府学長にも考えがあると思い、頼んだのだ。だから、しばらくは搜索には加担しなくて良い。親衛隊は通常の業務に戻るように……。」

「「「はっ！」」」

「それにしても……芹代さんには驚かされましたね……。学長に向かってあんなことを口走るなんて……。」

「そうですわね……。あの子は普段からあまり緊張とかもしてなさそうですから、意外と肝は座っているのかしら?。」

「はは、でもそれも紫音らしくて良いじゃないか」

「傑作だったのは、紫音があれだけ頑なに断ってたノロの体内注入の断ってた理由ですわね……。」

「ふふ……注射……でしたね？」

「ああ、やっぱり普段は頼もしいくらい親衛隊を背負ってる立派な刀使だけど、そう言うところは……まだまだ子供だね？」

「ええ、何と言うか……可愛らしかったですわ」

「そうだね……」

沙耶香の本音

「紫音ちゃん…… さつき言ってた実験体って…… どう言うことなの？ しかもノ口って……」

「あ〜……」

局長室から出た後、舞衣から当然と言えば当然のことを聞かれた。さすがにあの場で聞くのは躊躇われたのか何も言わなかったけど、さすがに聞かなかったことにはできないよね……。

「さつき学長が言ってたことは事実だよ。親衛隊は今折神家が研究しているノ口の人体への影響もとい強化を調べるために被検体になってるの。世間には公表してないけどね？」

「そ、そんな…… それってすごく危険なことじゃ……。 ってことは、紫音ちゃんも？」

「私はなつてないつて。 さつきも言つたけど、私注射苦手だからさ……」

「……」

私のその答えに何か思い悩んでる様子の舞衣。何か言いたいことでもあるのかな？

「…… 本当にそれだけが理由なの？」

「……」

「私ね？紫音ちゃんが注射苦手なの初めて知つたけど、だからってそんな理由で紫音ちゃんが断るとは思えないから……」

その言葉に一瞬私の胸がドキッ！つとなった。正直凶星だったからだ。前に舞衣に隠し事はできないねって言ったけど、これじゃ私も人のこと言えないね……しようがない。私は静かに口を開いた。

「うん、当たり前。実はさ？結構前に一度どうしてもって言うからノ口を体内に入れたことがあったの。そうするとその時の検査の人曰く、何かしら体に変化が現れるはずなんだって。体の体温が上がったり、脈拍が上がったり、身体機能が上がったとか……でも、私にはその変化が全く出なかったんだよね」

「……？どう言うこと？」

「私にも検査の人にもわからなかった。なんて言えばいいんだろ？一瞬ノ口みたいのが体の中に入っていく感覚みたいなものはあったんだけど、すぐにそれはなくなっちゃったんだよ。何と言うか……私の体の中ですぐに溶けてなくなっちゃったみたいな感じ……」

「拒絶反応みたいのが出たわけじゃなかったんだ？」

「うん全く。そんなわけで結局その原因がわからない以上打つても無駄だって言われたから私は被検体になることを免れたの。分かった？」

そう聞くけど、舞衣はすぐには納得できなそうだった。当たり前な気もするけどね、こんな話理解に苦しむよね……。でも、舞衣はこれだけは言ってくれた。

「理解が追いついてないけど、私は紫音ちゃんがノ口の被検体になってなくて良かったと思ってる。これからも、ノ口の力には頼らないでもらいたいかな？」

「はは、もちろん！」

私たちはそのまま、それぞれの部屋に戻って行った。

紫様襲撃事件から1週間が過ぎた。私達親衛隊は、紫様の命令によつて、襲撃犯二人の捜索には参加していなかった。理由は鎌府学院所属の刀使達が捜索に当たると鎌府学長直々に紫様に懇願して来たからだ。紫様もその方が効率が良く、親衛隊を別の任務に移せるメリツトがあつた為それを承諾し、今に至るつてわけ。

親衛隊は現状としては紫様からの新たな指示が出るまでは今まで通り、通常の業務につくようにと言われている。だから私も今は荒魂の討伐や書類の整理、記入とかをして日々を過ごしていた。

そんな時だった、ある屋敷の一室に入つていく鎌府学長と一人の鎌府の刀使と見える私と同じくらいの女の子を目撃したのは。あれ?..... あの子つて.....

「確か……可奈美と御前試合の一回戦で戦った……糸見沙耶香さん……だっ
け？」

少し変わった剣筋をしてたから覚えてたんだけど、覚えてた理由はそれだけじゃなく
て昨日のあの一件で私は彼女のことをすっかりと覚えることができたんだ……。任
務の失敗で……。だけどね……。

さつきも言ったように、今可奈美と十条さんを搜索しているのは鎌府の刀使だ。そし
て指揮権は鎌府学長が握っている状態。だから最初、私を含めた親衛隊は大量の鎌府の
刀使達を使って広範囲にわたって搜索させているのかと思ってたけど、実際には違く
て、鎌府学長は何らかの方法で可奈美達の居場所を突き止め、そこに一人の刀使を強行
突入させると言う何とも無謀にも近い作戦を実行していたんだ。その突入した刀使つ
て言うのが、糸見さんだったってこと。

「二人で突入なんてして……。いくら何でも無謀すぎだよ……。」

鎌府学長は糸見さんに絶大な信頼を寄せてたみたいだけど、それでも一対二では分が悪い。それは鎌府学長も承知の上のはずなのに……何でこんな作戦に出たのかいまだに分からなかった。結局その作戦は失敗に終わり、糸見さんは何の成果も上げられないままそのまま帰還して来た。何でも、初めは奇襲を成功して優勢だったんだけど、徐々に二人のペースに飲み込まれていき、最終的には可奈美に一回戦の時のように御刀を手から弾き飛ばされ、戦闘不能になったことが任務失敗の原因だったみたい。……ってことは？

「また鎌府学長のお叱りを受けるのかな？……やれやれ、そもそも学長がそんな作戦立てなければこうはならなかったと思うのに……。理不尽すぎる気がする……」

糸見さんのことを案じると同時に、妙に話の内容が気になった為、私は気づかれないようにそつと扉に近づき、扉を少し開けて中を覗いた。

「沙耶香…… 今回の任務、何故失敗した？」

「それは…… 私の力が足りなかったからです……」

「違う。今回の任務の失敗、それは【無念夢想】がまだ未完成だったからだ！」

「未完成……？」

その学長の言葉に私は首を傾げた。未完成ってどう言うこと？ 【無念夢想】は余計な思考、邪念、感情などを廃して自分の身体能力を高める技だけど、未完成ってことはなはず。既にその技はそれ以上の芸当ができない技だと本にも載っていた。それに、【無念夢想】には身体能力の強化と引き換えに思考力と判断力が下がると言うデメリットもある為、無闇に使うのは危険とされているのに……糸見さんはどうして……？

「そうだ！ 未完成だ。まだお前には……感情があり、“人間らしさ”が残っているのだからな」

……はい？ この人今とんでもないこと言った気がするけど……気のせい？

「人間らしさ……」

「これを投与すれば、お前は紫様のために生き、紫様のために死ぬ人形となれる。沙耶香、お前は私の希望なのだ。お前ならばきつと、紫様のためになる道具になれる。そして未完成だった【無念夢想】も完成し、あんな失敗作なども手が届かないような刀使になれるのだ！ さあ、沙耶香！」

「っ！いい加減に——」

流石に我慢の限界だった私は、部屋に入って止めようとしたが、その後の糸見さんの行動によってそれはせずにすんだ。

「っ!!」

「なっ…… さ、沙耶香？」

「え……？ 私…… 何で？」

糸見さんは、学長が打とうとしたもの……ノロのアンプルをペイツと手で弾いた。それによつて溢れたノロのアンプルは床にコロコロと落ち、私の足元まで来た。……バレてないみたいだし、一応回収しておくかと私はアンプルを拾い上げ、ポケットの中に入れた。

「どうした沙耶香？怖がることはないぞ？少しの辛抱だ。すぐにお前は感情というものが無くなり、なににも動揺することなくなる人形となる。怖がることなどないのだぞ？」

「……や」

「……？」

「いやっ！私、人形になんてなりたくない！感情を失つて人じゃなくなるなんて嫌っ！！」

「!!待て沙耶香！どこに行くの！戻つて来なさい！」

そう叫んだ糸見さんは、そのままこつちに向かつて走って来た。どうやら、糸見さんは本心で学長に付き従ってたわけじゃなかったみたいだね……。

「つと、ハハハじゃ邪魔かな？」

私は糸見さんの邪魔になるかとも思い、そつと扉から離れ、扉の向かい側の部屋の中に入って様子を見る事にした。糸見さんは部屋から出てくると、そのまま何処かに行ってしまった。続いて学長が出てくると、糸見さんを探す為こちらもまたどこかに走って行ってしまった。

「糸見さん…… 逃げ切れると良いけどなく……」

月光下でのやり取り

さっきのやり取りから数時間後、書類整理を終えた私は、食堂で夕食をとろうとしたんだけど、その際にすれ違った刀使達が言ってくれたことが耳に入ってきて、足を止めた。

内容は、糸見沙耶香が見つかったことだ。どうにも、あの後糸見さんは一人の刀使の手助けで、屋敷内から抜け出していたんだとか。その場面を見ていた刀使から直ちに鎌府学長に連絡が入り、今向かっている最中なんだって。こうなると、捕まるのは時間の問題だろう……。

「私には関係無いことだけど…… 気になるし、場所も近いから行ってみようかな？」

何となくそんな気になり、私は歩先を変えて屋敷の外に向かった。今日はもうやることはないから、特に問題はない。自分でそう言い聞かせながら、私は現場に向かった。

私、柳瀬舞衣は、今この子……沙耶香ちゃんと一緒に追われている。沙耶香ちゃんと出会ったのはつい最近だけど、この子がこれまで鎌府学長にされてきたことを本人から聞かされたことで、私はこの子をあの人から救いたいと思った。だから、沙耶香ちゃんが屋敷の中から出てきた時、とっさに一緒に逃げようと言ってしまったのかもしい。何で私まで逃げようと考えたのかというと、それは……私も可奈美ちゃん達と合流して力になりたかったからだ。今まで決心がつかなかったけど、ようやく決心が持て、実行に移れたんだ。でも……。

「予想以上にしつこいけど……なんとかまけたかな？」

「……そうみたい。今のうちに……」

私達は鎌府の刀使達の追跡に想像以上に苦しめられていた。今はなんとか逃げ延びてるけど、それも長くはもたない。だからこそ早めに遠くに……。私達は止めていた

足を再び動かそうとした。けど、どこからともなく聞こえてきた声によつてそれは未遂に終わった。

「みいゝつけた！」

「!!？」

声のした方は、私達の頭上からだった。慌てて私たちは周辺の建物の上部を見上げ、声の主を探した。そして、少ししてその主は見つかつた。その声の主は月明かりに照らさせ、ピンク色に近い髪の毛を風になびかせながら微笑を浮かべていた、一人の女の子だった。でも、あの子はただの女の子ではないことは知っている。だって……あの子は。

「親衛隊第四席の…… 燕さん……」

「あれー？何であの時のおねーさんも一緒なの？ま、別にどうでもいいけどね？」

あの時という言葉に私は先日のことを思い出していた。私が可奈美ちゃん達とのことで事情聴取が行われてた時、私は終わった後の廊下で燕さんと会っていた。ただ会っただけならそれでよかつたんだけど、その時燕さんは何故か私の喉元に御刀を添えてきたんだ。まだ抜刀もしてない状態で、剣を抜いた動きすら私には全く見えなく、反応することもできなかつた。もし燕さんが本気で斬りかかって来てたら、私の首は飛んでただろう……。

「おねーさん、弱いね?……なんか興奮め〜」

燕さんは何かガツカリした様子で御刀をしまい、そのまま行ってしまった。何にガツカリしたのかはなんとなくわかつた。燕さんは私に失望したんだ。私が弱いから……。その日の私は、しばらくの間ずっとそのことを考えて過ごしていた。

「それよりもさー?沙耶香ちゃん?だっけ?鎌府のおばちゃんが呼んでたから連れ戻しに来たよー?」

「っ……………」

その言葉に沙耶香ちゃんが身動いだ。連れ戻されたら人間じやいられなくなる、そう察していたからかもしれない。そんなことはさせない。私が絶対に沙耶香ちゃんを守る！だから私は——

「そんなことさせない！大丈夫沙耶香！私が守るから！」

「舞衣……………」

私は御刀を抜き、沙耶香ちゃんの前に仁王立ちした。

「邪魔しないでくれるー？私、弱い人には興味ないから……………」

「……………」絶対に沙耶香ちゃんを連れ戻させはしない！私は、貴方を倒す！」

「……………」もういい。力尽くで連れて帰るから……………」にひっ！」

「っ!!」

そう言った途端、燕さんは建物から飛び降りて、私に向かって斬りかかって来た。咄嗟に私は御刀を横に構え、攻撃を受け止めた。でも……。

「くっ……重い、このままじゃ押し切られ……!!」

押し切られる! そう思った時、目の前から燕さんの姿が一瞬にして消えた。いや、正確には「迅移」を使って移動しただけなのだけど、あまりにも速かったため、消えたように見えたんだ。

「ど、ど……!!」

「……だよ?」

「?! しまっ……」

後ろから燕さんの声が聞こえ、慌てて御刀を後ろに振った時にはすでに遅かった。燕さんの御刀が私の身体に命中し、私の「写シ」が剥がれ落ちた…………。

「ぐっ…………」

「やっぱりおねーさん弱いね。紫音おねーさんの友達だって言うから同じくらい強いのかな。って期待してたのに…………。つまんないの」

「…………」

私は何も言い返すことができなかった。この子の言う通り、私は弱い。紫音ちゃんや可奈美ちゃんみたいに強くはない。そのことを改めて自覚させられ、私は泣き出しそうになった。

「で？沙耶香ちゃんは どうするのー？大人しく帰る？それとも大人しくさせてから連れて帰ろっか？」

「私は……………!!?」

「沙耶香ちゃん? どうし……………!!」

「よくやった燕……………探したわよ沙耶香。さあ、今回のことは多めに見るから、早く戻ろう。そして……………」

目の前にいた人物に私たちは絶望を覚えた。沙耶香ちゃんをこれまで苦しめて来た鎌府学長その人だ。相変わらず沙耶香ちゃんをただの人形として扱うことしか考えてないみたいだね……………。

「そ……………そんなことさせない! 沙耶香ちゃんは、本心から貴方の元を離れようと思ったんです! ただの人形になりたくないからって! だからこそ、私が絶対に行かせません!」

何とか私は氣力を振り絞って立ち上がり、再び【写シ】を張って二人と対峙した。

「ちっ……おい燕！さっさと奴をー」

「あれ？何で結芽がいるの？学長はわかるけど……。あと、何で舞衣が糸見さんというのも意味わかんないんだけど？」

「えっ……？」

突然聞こえた第三者の声に、その場にいた全員が声のした方を向いた。そこにいたのは、月明かりに照らされながらいつもの雰囲気でないこやかに笑顔を向けながらこつちに向かってくる紫音ちゃんの姿だった。

私は現場に向かう前に真希さんや寿々花さんに少し外出してくると言って、許可を貰ってきた。親衛隊が失踪なんて洒落にならないから誰かにでも知らせておく必要があったんだ。でもこれで問題なく外に出れる事になった為、私はすぐに現場に向かった。

現場には5分もしないうちに着いたんだけど、そこで見たのは異様な光景だった。そこで見たのは、息が途切れ途切れになつて今にも倒れそうなほどに疲弊しきっている舞衣と結芽が対峙している光景と、それを見つめる糸見さんと鎌府学長と言う光景だった。まず始めに思ったのは――

「何これ？」

それだった。だって、まず何で結芽がここにいるのかも訳わかんないし、もつと訳わかんないのは舞衣が糸見さんと一緒にいる事だ。二人つて何か接点あったっけ？

「貴様！なぜここにいる!？」

「なぜって……散歩ですけど？」

「…… また貴様はそうやって…… ちっ、もういい!」

学長が私に気付いて問いかけてきたけど、軽く受け答えしておいた。この人はまともに相手したら疲れるからこんな感じで受け答えしたほうが楽なんだ。散歩っていうのもあながち間違いいではないけどね？ 実際ここまでくるのに走ってきた訳でもないし……。

「結芽、何でここにいるわけ？」

「なんか最近ずっと屋敷の中にいたから退屈でさく？それでその時にその鎌府のおばちゃんのとこの子が逃げたっていうからさ？暇つぶしにいいかもってことで来たの！」

「はあ、そんな事だろうと思った……で？今は何やってた訳？」

「見てわかんない？そこのおねーさんと遊んでたの。すぐに勝負ついちゃってつまんなかったけど」

「やれやれ……」

あまりにも予想通りの結芽の発言に、私は呆れて頭をかいた。これは後で真希さんとかに叱ってもらわないとね……。

「貴様ら！何を喋っている！今すぐにでもその二人、特に沙耶香を捕らえるのよ！」

「却下しますね」

私がそう言った途端、場の空気が凍りついた。

「貴様……今何と言った？」

「……？却下するって言ったんですが？」

「何故だ！そんなの認めるわけがないでしょう！これは命令よ！」

「あなたの命令に従う義理はないですね……」

「なっ!？」

私の言葉に驚きを隠せない様子の学長。そんなの当然でしょ？何故なら――

「私は親衛隊。紫様の命令にしか従う気は無いんで？」

「紫音ちゃん……」

「この搜索の指揮権は私が握っている！親衛隊だろうと従わなければ規律違反となるではないか！それを親衛隊の貴様がしても良いというのか!？」

「？別に私は搜索に来た訳ではありませんよ？言っただけでしょう？散歩しに来たって」

「……」

学長の表情がどんどん険しくなっていくのがわかったけど、私は気にしないで続けた。

「実際に搜索に参加してない訳なんですからその指揮権が持つ権力というのは……私には意味を為しませんよ？私は“偶然ここの辺を通りがかって”“偶然にもこの現場に立ち入ってしまった”だけなんですから。ですから私が何をしようが勝手でしょう？だから結芽も別に学長に従う必要はないんだからね？」

「そーなの？じゃあもう良いや。そろそろ帰って寝たいし〜」

「なっ!?!待て燕!..... 貴様〜!!」

結芽が帰るのを止められなかった学長が、今度は私に向かって掴みかかってこようとした。わざわざ掴まれる義理もないから、私はヒョイツと避けた。

「そんな事してる暇があるなら、ちゃんと糸見さんと話し合ってみてはどうですか？ちゃんと話し合ってみればわかってもらえるかもしれないよ？」

「貴様に言われなくても分かってるわ!..... 沙耶香？こっちへいらっしやい？今ならまだ許してあげるわ。だから〜」

そんな学長の甘い声にも糸見さんは全く耳を貸さないでいた。むしろ少し目が怒っているように見えた。

「私は…… 貴方の望むような刀使にはなれない。ううん…… なりたくない！ だか
ら…… ごめんなさい！」

「沙耶香……」

はつきりと糸見さんに拒絶され、相当応えたのかその場で膝を落として崩れ落ちた学
長。何というか…… 哀れだなあ。

「紫音ちゃん…… ありがとね？」

「全く…… 舞衣は何で糸見さんと一緒にいるわけ？」

私は軽くだが、舞衣から説明して貰った。糸見さんとは前にもあったことがあつて、
会ったら少し話をするぐらいの仲になったらしい。そして今回の件についても……。

「…… ってことは、二人はこれから可奈美達と合流するってこと？」

「うん……私でも、力になれることがあると思うの。だから行く。これはもう決めたことなの！」

「舞衣が行くなら、私も行く」

「そっか……ってことは、次会う時は敵同士だね」

「えっ……？」

敵という単語に二人は苦い顔をした。でもこれは仕方ないことなんだ。

「そうでしょ？だって、紫様を襲った張本人たちのところに行くんだから必然的に敵になっちゃうんだから。今回は別に任務としてきてるわけじゃ無いから見逃すけど、次会った時は……容赦しないからね？」

「私は……紫音ちゃんと争いたくは無いよ……」

「私たちが敵対することを決めたのは舞衣でしょ？ だったら悔いるなんてしないで堂々としなつて。舞衣の信念はそんな私と敵対するからつて折れる脆いものなの？」

「ち、違うよ！ そんなわけない！」

「だったら、もういいっこ無し！ 自分の信念を貫いて私達にぶつかつて来なよ。それに前舞衣言つてたでしょ？ 紫様が大荒魂だつて証拠を見つけて、私たちを仲間にして見せるつて。して見せてよ？」

「う、うん！ 分かつた！ 絶対に紫音ちゃんをこつちに引き抜いて見せるから！」

ね。その時の舞衣の表情は今まで以上に輝いて見えていた。これなら問題はなさそうだね。

「なら、早く行きなよ。学長が正気に戻る前にさ……………」

「うん…………… またね、紫音ちゃん……………」

そう言い残し、舞衣はそのままその場を後にした。糸見さんもそれに続くかなと思つてたけど、何故かその場に止まったままだった。

「?どうかした?」

「あの……ありがとう。おかげで助かった」

「お礼を言われる筋合いはないよ?あれは私の気まぐれだから」

「それでも……ありがとう……」

糸見さんは最後に私にそう告げて、舞衣の後を追っていった。その後ろ姿を見送りつつ、私もまだ蹲つてる学長を放って屋敷に戻った。

伊豆での再会

舞衣達と別れた翌日、私というか親衛隊が急遽執務室に呼び出された。呼び出された理由は、今日の未明に正体不明の戦闘機がS装備…… ストームアーマーを積んで伊豆方面に飛んで行くのが目撃されたからだ。今私たちはその戦闘機というのをオペレーターにモニター越しで見させて貰っていて、これの動向を探っていた。

「普通、ストームアーマーというのは許可なく持ち運んだり、使ったりはしてはいけないはずだ。管理を任されていて、所持をしているのは折神家か刀剣類管理局のみは……」

「折神家でも、刀剣類管理局でもストームアーマーの排出は許可してないと先ほど連絡がありました……。となると…… この戦闘機は……」

「舞草…… しか考えられませんわね？」

寿々花さんのその一言に私たちは同時に頷いた。触れてこなかったけど、舞草っていうのは折神家に反旗を翻すレジスタンスのことだ。でもその素性は謎に包まれていて、基地の場所もわからなければ隊員の詳細な情報もわからないのが現状だ。少ない情報でわかるのは、舞草は何らかの理由でストームアーマーを所持することに成功していることと、舞草には長船女学園所属の刀使が多くいるということだけだ。

「伊豆方面ってことは、そっちに舞草の基地があるってことじゃないんですか？」

「その可能性も考えて調べてみたが、それらしい建物は見つからなかったみたいだよ」

「そうですか……」

もしかしたらって思ったけど、そんな簡単に分かったら苦労しないよね……。でも、じゃあ何でこの戦闘機はストームアーマーを乗せて伊豆に？

「先ほどの知らせでは、どうやら襲撃犯の二人がその伊豆に向かって移動を開始してい

るそうですわ。恐らく、伊豆でそのストームアーマーを受け取るために向かった舞草の刀使と合流するためでしょうね」

「舞草に匿ってもらおうとしてるってことですね？」

「そうなる。そうなつては面倒だということもあつて、今回僕たちはここに呼ばれたんだ。伊豆に向かっている逆賊どもの捜索に向かわせるためにね」

そっか、可奈美達伊豆に向かつてるんだ。糸見さんとの騒動の後、音沙汰なかったけど無事ではあったみたいだね。

「どんな作戦で捜索にあたりますか？」

「まず私と真希さんで逆賊の捜索にあたりますわ。その間、夜見さんと紫音には舞草の

方の捜索に当たって欲しいのだけど……」

「承りました」「わかりました！」

「それと……今回は場合によってはノロの力を使うかもしれない。相手は子供とは言え、御前試合決勝まで勝ち進んできた手練れだ。最悪の場合は使わせてもらう。紫音は関係ないが、二人はくれぐれも無理に使って体に負担をかけるのは控えてくれ」

「ええ、もちろんですわ。ですが、それは真希さんですわよ？」

「同感です。獅童さんも気をつけてください」

「もちろん、僕も体を壊したくはないからね」

ノロの力を使うのは精神や身体的にも負担が大きいつていうけど、皆さんがここまで言うつてことはそうなんだろう。皆さんが気をつけて使うなら問題はないでしょ。心の中でそう私は決めつけていた。

「あ、ちなみに聞きますけど……結芽は？」

「待機（だ）ですわ」

「ですよね〜」

そんないつもの調子の無駄話をしつつ、私たちは捜索に向かうため、準備に取り掛か

るのだった。

「では、これより別行動とする。僕と寿々花は襲撃犯達の搜索、夜見と紫音は舞草の搜索。各自何かあつたらすぐに知らせることを忘れないようにしてくれ。じゃあ……」

行こう！」

数時間後、目撃があつたとされる伊豆某所の山の中についた私たちは、すぐさま任務に移った。真希さんと寿々花さんは可奈美と十条さんの搜索、私と夜見さんで舞草の人の搜索をする。もちろん早く終われば片方に加勢するつもりだよ？その方が早く終わるし。それを決め込み、私たちはその場で別れた。さて……早いとこ見つけますか！

「芹代さん、これから荒魂（あらいま）の力を使って搜索を開始します。荒魂が反応した方角を指定しますから、その方角に向かってください」

「わかりました」

真希さん達と別れた後、私は夜見さんの力を使って舞草の刀使の搜索を行っていた。夜見さんが、自身の御刀で自分の腕をすつと斬ると、そこから黒に近い色の血が流れ出

「どうも、こんばんは」

「えっ……？その服……親衛隊？」

「そ！親衛隊第五席、芹代紫音、よろしく。貴方は？」

「私は、調査隊の六角清香です」

六角さんと名乗ったその刀使は、平城学館の制服を着ていた。舞草の刀使は長船の生徒が多いって聞いてたけど……。彼女は違うのかな？でも……。それなら何でこんな山の中にいたのかも気になるし……。しかも……。

「調査隊？確か赤羽刀の回収とか調査をメインに活動している隊のこと？その調査隊が何でこんな山の中にいるの？」

「隊長のミルヤさんによると、ここら辺に赤羽刀が大量に発見されたと聞いたらしいので回収しに来たんですけど……。私、みんなと逸れちゃって……。」

「あゝ……なるほど……」

いわゆる迷子つてやつね。でもとりあえず、舞草で無いことは確かみたいだね。でも、困ったな……。

「でも、ここまで来るまで誰も見かけなかったし……他の調査隊がどこにいるかは私にも……」

「……そうですよ。……？　そう言えば芹代さんは何でここにー」

「あゝゝ！　やつと見つけたよ清香ゝ！　もゝ、急に逸れないでよ！」

「っ？」

急に聞こえた私たち以外の声に私はすぐに蒼月に手を掛けた。そして声のした方をゆつくりと見てみると、そこにいたのは……。

「美炎さん！よかった…………。逸れた時はどうしようかと思っただけど…………。」

「ほんとだよも〜。それで清香は……………え？」

「………… 美炎？」

草木をかき分けて来たせいとか、制服の所々に葉っぱや枝がついた状態でいたけど、一年前よりも一際身長が伸びて体も引き締まって成長が感じられる美炎がそこにはいた。

「もしかして………… 紫音？」

「久しぶり、美炎。元気にしてた？」

「うん………… 元気にはしてたかな？」

そう言う美炎だけど、見た感じ今はそんな風には見えなかった。なんて言うか、妙に

疲れ切ってる様子に見えた。

「ん？どうかした、美炎。なんか疲れてない？」

「うん……… 実はさ？」

美炎が聞かせてくれたのは、ついさっきのことだった。調査隊が、赤羽刀の調査のため、この山の中に入って、赤羽刀を探していた時、偶然にもそこで真希さんと寿々花さんと遭遇してみた。それだけなら問題ないんだけど、何故か真希さんが調査隊を逆賊の仲間と勘違いをしていきなり斬りかかって来たみたい。寿々花さんは調査隊のことは知っていた為、加勢しなかったけど、真希さんを止める術がなかったみたいで、真希さんが満足するまで見守っていたらしい。結局調査隊の隊長の木寅ミルヤさんが説得するまでずっと真希さんの攻撃を受けてたみたい。

そりゃ……… 疲れるのもわかるね。私だって疲れそうだもん。

「なんか……ごめんね？」

「いえ……芹代さんが謝らなくても……」

「そうだよ！紫音は悪いことないよ。悪いのはこっちは逆賊じゃない！って言っても聞く耳持ってくれなかったあのんだよ！それに勘違いだつて分かつてても謝りもしないし、妙に上から目線だし、本当に腹が立ったよ！」

「あゝ……」

美炎は相当ご立腹みたいだね。普段は真希さんすごく優しくていい人なんだけど、寿々花さんによればそれは親衛隊だけにする態度なんだつて。他の人たちには基本的に冷たい態度をとることが多く、妙に上から来ることもあってあまり刀使からもいい評判を聞いてなかった。真希さんも私たち以外の人にもいつものように接してくれたら評価変わると思うのにな。

「あれ？紫音、後ろから誰か来るけど？」

「え?..... ああやつと来た。夜見さーん!」

後から合流すると言つて先に私を行かせた夜見さんがようやく追いつき、私と合流して来た。

「芹代さん..... 反応があつた刀使と言うのはその方達ですか?」

「そうみたいです。彼女達は調査隊でここに赤羽刀の調査にきたらしいです」

それを聞いた夜見さんはゆっくりと視線を美炎達に向けた。視線を向けられた美炎達は少し肩を強張らせながら、緊張していた。

「そうですか..... では..... あなた方の隊長の元に案内して頂けませんか? 舞草の情報を..... 集めたいので」

「舞草..... ?よくわかんないですけど、わかりました。こっちです」

理解し切れてないみたいだけど、美炎は承諾して自分が来た道に戻って行った。その後を六角さんと夜見さん、私の順で追っていった。

伊豆での再会②

「なるほど……それで、その舞草という組織について何か知っていること、または所属している刀使を見てないかと言うことを聞いているわけですね？」

「はい……その通りです」

美炎の案内によって、私達は調査隊がいる場所まで来ていた。その場にいたのは私たち抜きで三人、さつき美炎から聞いた話によれば、鎌府の制服の上からフードを被っている子が七之里呼吹さん。綾小路の制服を着て今夜見さんと話しているのが調査隊長の木寅ミルヤさん。そして……長船の制服を着ている人、瀬戸内智恵さん。で合つてと思う。私は夜見さん達の話が終わるまで後ろで待機していた。

「残念ですが、存じ上げないですね。舞草という組織があること自体初めて知ったよう

なものですから……」

「そうですか……」

やっぱり調査隊が知ってるわけないよね……。でも何だろ？ さつきから瀬戸内さん……。舞草って単語が出るたびに少しだけど苦い顔をしてた気がする……。もしかして……？

私は何か思い当たり、瀬戸内さんに声をかけに行つた。

「瀬戸内さん、少しいいですか？」

「っ!?!…… あ、え…… ええ、確か…… 芹代さんで良かったかしら？」

「紫音でいいですよ？ 年下ですし」

「じゃあ紫音ちゃん、何かあったかしら？」

こうして話してみると瀬戸内さんって普通にお姉さんみたいだね……。つと、本題に入らないとね。

「貴女は舞草について何か知ってますね？」

「……………!!? え…………… え〜つと? 何のことかな……………? 私はよく知らないけど……………」

「…………… だったら何でそんなに驚いているんです? 知らないんですしたらそんな驚くことないでしょうに?」

「そ…………… それは……………」

しどろもどろになって目が泳ぎ始めた瀬戸内さん。これはとりあえず舞草の関係者なのは確定かもね。次第に話を終えた夜見さんもこつちに来て、話を聞きに来ていた。

「…………… どうなんですか? 事によっては一緒にご同行…………… してもらおう事になります

が？」

「っ…… 私は——」

瀬戸内さんが何かを言いかけた…… その時だった。

「安桜美炎！これはどういう事ですか！」

「「「??？」」」

少し離れた場所から木寅さんの怒声が聞こえてきた。木寅さんは美炎と言っていた。美炎が何かしたのかな？

「とりあえず話を中断してみんなのところに向かいましょう。何かあったのかもしれない！」

「…… わかりました。瀬戸内さん…… 後で話はじっくりと…… 伺いますから

ね？」

「…………… 分かったわ」

話がついたところで、私はいつの間にかなくなっていた他の調査隊の声がした方へ向け移動を始めた。位置は携帯の端末を追って調べられるからと言って、瀬戸内さんを先頭として颯爽とその場に向かった。

数分もしないうちに調査隊のメンバーを見つけることができたんだけど、その中に予想外の二人がいて、何やら調査隊と話をしたんだ。その二人を見た途端、とつさに私は隣で並走している夜見さんの手を取り、調査隊と合流した瀬戸内さんを無視して近くの木の後ろに隠れた。

「っ？ 芹代さん……………？ 何を……………」

「静かに…………… 夜見さん…………… あの二人がいます……………」

そう言いながら、私は静かに調査隊の方を指差した。その先にいたのは――

「っ……………衛藤可奈美と、十条姫和……………。こんなところに……………」

真希さんと寿々花さんが行方を追っている可奈美と十条さんがそこにはいた。まさか……………調査隊と接触してるなんて予想してなかったな……………。とりあえず……………。

「夜見さん……………至急真希さんと寿々花さんに連絡を。すぐにここに来るように言ってください」

「わかりました」

夜見さんはイヤホンの無線機をオンにし、二人に連絡を入れた。

『夜見か？どうした？』

「こちらでそちらの対象の衛藤可奈美と、十条姫和を……………発見しました。場所

は——」

少しして、連絡を終えた夜見さんが戻ってきた。多分自分の力の荒魂を使って真希さん達を案内させてるところだと思う。来るのも時間の問題だね。となると……。

「芹代さん…… どうしますか？」

「ひとまず様子を見ましよう。調査隊は今親衛隊に協力してくれてるみたいだし…… 美炎には辛いかもしれないけど、

きつと捕まえてくれるよね……？」

ひとまず私たちはその場を動かずに様子を見る事にした。もし何かあってもすぐに向かえるように……。

私……瀬戸内智恵は舞草の諜報員だ。今は折神家の情報を得るために調査隊に所属している。美炎ちゃんとは小さい頃からの付き合いで“ちい姉”と呼ばれ親しんでくれる。調査隊のみんなも私を仲間と言ってくれた。でも……私は、美炎ちゃん……いや、調査隊のみんなを騙してここ伊豆まで来させてしまった。赤羽刀の調査というのは全くのデタラメ。私が木寅さんに直接伝えた事なのだけど、本当はここ伊豆にいる舞草の二人の刀使の手助け……最悪の場合、二人を逃す援助をしてもらいたいと言う指令を実行するためについた嘘だったんだ。

そしてさつき、私の正体がばれそうになっていた。二人の親衛隊によって。一人は第

三席の皐月夜見さん。もう一人は第五席の芹代紫音ちゃん。二人共初めて会った時から既に私のことを疑っていた。特に紫音ちゃんに至っては感覚が鋭いのか、私の少しの動揺も見逃さずに観察をしていた。幸いにも、ギリギリでバレる事はなかったけど、バレるのは時間の問題かもしれない……。そんなことを考えながら、私と親衛隊の二人は木寅さんの声がした方へ向かった。

「(それで……着いたのはいいいけど……この状況は一体?そして……親衛隊の二人が居なくなってる?)」

まず整理してみると、調査隊のみんなが何故か折神家襲撃犯の衛藤可奈美ちゃんと十条姫和ちゃんと一緒にいた。美炎ちゃんが二人を庇う形で二人の前に立っていて、木寅さんや七之里さんに何か言っている。そして……今まで私の後ろをついて来ていた親衛隊の二人がいつの間にか居なくなっていた。そつちに関しては今置いておきたい。とにかく今は……。

「何があつたの?みんな……」

「瀬戸内智恵…………。貴女からも何か言ってください」

「美炎ちゃん…………。何でその子達を庇うの？友達とは言え、襲撃犯なのよ？」

私はゆつくりと歩を進めながら美炎ちゃんに聞いた。美炎ちゃんは何か必死になって二人を守っているように見えた。何があつたらそんな血走つた目になるの…………？

「ちい姉…………。だつて！さつき私たちに襲いかかつて来た親衛隊の人、捕獲じゃなくて駆除つて言つたんだよ！？そんなところに二人を引き渡すなんて出来ないよ！そんなの間違つてる!!」

「…………。安桜美炎の意見に賛成の者は？」

木寅さんは、ゆつくりと私たちを見ながら問うてきた。私は…………。もちろん。

「私は美炎ちゃんに賛成よ」

「わたしも……美・炎・ち・ゃ・んに……賛成です」

良かった……清香ちゃんも賛成みたいね。……後は。

「なるほど……七之里呼吹、貴女の意見は？」

「あん？そいつら渡しちまったら今の“お楽しみ時間”^{タイム}が終わっちゃうじゃねーか。あたしも賛成ってことでいいぜ……」

どうやら木寅さん以外は全員賛成みたいね……でも、待つて？二人を引き渡したらお楽しみ時間^{タイム}が終わるって……。

「鎌府のお前、今言つた事はと言う事だ？」

「はあく……いいか？今さつきまであたし達が倒してきた荒魂……ここに放たれてる荒魂は全部さつき会つた皐月夜見が操つてる荒魂なんだよ」

「やはりそうか…… 怪しいとは思っていたがな……」

え……？ つまり…… どう言う事？ 可奈美ちゃんも美炎ちゃんも、同じように理解できてないみたいだった。

「ああ、たく！ まだわかってねーみてーだな？ 要はてめえらを探すために皐月夜見が操ってるんだっての」

「！！！！」

みんなその事には驚きを隠せなかった。もちろん私も。親衛隊が荒魂を……？ 何で？ え…… ちよつと待って？ じゃあ、さつきから私たちが倒してきた荒魂つて……。

「待ってください！ では…… 先程からわたしたちがやっている事は……」

「今更気づいたのかよ……。そうだ、あたし達は皐月夜見の操ってる手足とも呼べる奴らをぶっ潰してたつてわけだよ」

「そんな……」

項垂れてしまう木寅さん。なるほど……。そう言う事だったのね。親衛隊は荒魂の力を使う……。おそらく、一番最初に会ったあの二人もその力を持つているのかもしれない……。紫音ちゃんは？紫音ちゃんもまさか荒魂の力を使って……。やめにしましょう。今はそんなこと考えてる余裕はないはず。今やるべきなのは――

「それで木寅さん？貴女はどうなの？貴女以外はみんな引き渡さないって意見で纏まったけど？」

「……」

木寅さんは一瞬顔をしかめたけど、すぐに考えが付いたのか返事を返してくれた。

「思うところがあれば…… 考えてみればわたし達は親衛隊の手先では無く、尚且つ二人を駆除するための戦闘員でもない。あくまで一人の刀使…… 人であること。その人として考えるのであれば…… 何も迷う必要もありませんね？」

「！じ、じゃあ!？」

「衛藤可奈美と十条姫和には遭遇端ものの、荒魂の妨害により逃げられてしまった…… それで良いと考えてます」

「…… !!ありがとうございます！」

可奈美ちゃんが木寅さんにお礼を言い、頭を下げた。わたしもそれを聞いて胸が落ちていた。木寅さんもなんだかんだ言っ…… 良い人なのかな？

友として

調査隊と二人のやりとりを影から見てた私と夜見さんだったけど、さすがに“二人を逃す”と言う単語が聞こえてきてしまった以上、出ないわけにはいかなかった。だから私は夜見さんに合図を出して、みんなの前に姿を現した。

「美炎く？ 私たち置いてくなんてひどいじゃん？」

「し……紫音……」

私がそう言うのと美炎は肩をビクツと震わせた。そんな怖がらなくても良いのに……でも、確かに今の私は笑ってるけど……本心では怒ってるから無理ないかもしれないね。

「紫音ちゃん……………」

「久しぶりだね可奈美。あの時以来かな？」

「ちっ……………。面倒な奴に会った……………」

「すぐさま臨戦態勢に入った十条さんだけど……………そんな焦らなくても……………」

「調査隊……………。先程、その二人を逃すと聞こえましたが……………気のせいですか？」

「気のせいでは無い。そもそも私たちはお前達親衛隊の手先では無い。独立した隊である以上、親衛隊の指示に従う義理はない」

「……………反逆行為ですよ？そうなれば……………実力行使に移るのみ……………ですが」

「それも……………致し方ないですね……………」

そう言い放ち、夜見さんも木寅さんも御刀を抜き始めた。あく………… やつぱりこうなるのね…………。

「一応聞くけど………… 大人しく来てもらおう気は無い？」

「何度も言わせるな！無い！」

「………… 相変わらず強情なこと………… 可奈美は？」

「………… ごめん。無い… かな？」

この反応はわかってたことだけ………… やつぱりちよつと………… 悲しい。でも………… しょうがないよね？私も、ゆつくりと蒼月を抜き、穂先を二人に向け【写シ】を張った。

「夜見さん、木寅さんをお願いします。後は私が引き受けます…………」

「……………わかりました。ご武運を……………」

夜見さんを木寅さんに任せておけば、後は私が残りを対処すれば問題ない。後少しもすれば真希さんと寿々花さんも来るしね。

「さて……………それで？他の皆さんはどうします？私と……………事を構えますか？構えないのであれば退いてください。二人を捕らえないといけないので……………」

「紫音！可奈美は紫音の友達でしょ！それなのに何でそんなひどいこと言うの!?!さつき親衛隊の人に聞いたよ！親衛隊は可奈美達を駆除するって！紫音もそんなことするの!?!」

声を荒げて私に訴えかける美炎。駆除……………そんなつもり全く無いし指令も受けてないよ？って事は真希さん達……………勢いに任せて言っちゃったなく？……………はあ、全く。

「駆除する気は無いよ。もちろん連れて帰ってもそうするつもりは無い。だから安心してっ。」

「……で、でも！それでも捕らえるなんて！そんなのおかしいよ！」

「おかしいって思うんだったら……友達として言うよ。美炎が私を止めなよ？もちろん調査隊の人たちと協力しても良いよ？」

「そ、そんな……」

「それで？どうするの？」

「畳み掛けるように調査隊の人たちに問いかけた。でも、どうやら答えは出てるよう
で……」

「二人は…… 私たちが守る！」

「やらせ……… ません」

「私も同感よ………」

「つたく……… めんどくせ………」

「……… こう言うわけです。わたし達の気持ちは変わりませんよ？」

調査隊全員御刀を抜いて【写シ】を張った。まあ……… わかつてはいたよ………。また友達と争うのか……… 嫌だなあ………。

「わかりました。なら……… 容赦は……… しませんよ!!」

「っ!!」

もう吹っ切れた私は、容赦無く攻撃の標的にした瀬戸内さんの懐に【迅移】で入り込

み、蒼月を腹部に向かって思いつき突き刺した。突き刺された瀬戸内さんは、【写シ】が剥がれ、そのまま膝をついていた。

「え……………!? ちい姉!!」

「反応が遅いよ美炎……………。悠長にしてると一瞬で勝負ついちゃうよ?」

「っ! 瀬戸内智恵! 大丈夫——」

「…………… 貴女の相手は…………… 私です」

「ぐっ……………」

木寅さんが一瞬私の方に気を取られた隙に、夜見さんは自分の腕を斬り、荒魂を発生させ攻撃を始めた。夜見さんの荒魂はただの荒魂では無く、夜見さんの手足のように自在に動くため、対処が難しいんだ。だから、木寅さんでも攻略するには時間がかかる…………… だからこそ、私はこっちに集中できるんだ。

「木寅さん!!」

「衛藤可奈美! 十条姫和! 二人は先に行け! ここは私たちが何とか食い止める!」

「でもっ!!」

「いいから行け!!」

「………… ごめんなさい。行くよ! 姫和ちゃん!!」

「………… ああ」

木寅さんが言うと同時に、二人はこの場から逃げようとした………… そんな事、させると思ってるの?

「逃さないよ……………!?」

「紫音!!」

【迅移】を使って二人を追いかけようとした時、横から美炎が御刀を振り下ろしてきたため、それを中止して体をずらしてそれを躲した。

「(二人は……もう行っちゃったか。でも良いか。後は真希さんや寿々花さんに任せよう。だから今は……)」

「よそ見してる場合なの!!」

「……つと」

美炎が私に隙ができたのかと思って斬りかかってきたけど……別によそ見してても対応はできる。むしろ逆に、攻撃してきた美炎の方にわずかな隙が出来ちゃってた。

「甘いよ?..... 美炎」

「!!?」

美炎はないが起こったのかわかってないみたいだった。気づいた時には仰向けになって地面を転がってたんだから。簡単に言えば、私が美炎の剣技を躲した後、その勢いを利用してそのまま手投げをしたんだ。あまりにもその過程が早かったのか、美炎には投げられら感覚すらなかったみたいだった。

「一年前よりは確かに強くなってるみたいだけど..... まだまだだね?」

「くっ.....」

「さて..... 七之里さん、六角さん。貴女達も早くかかって来てはどうですか?このままだと..... 全滅しますよ?」

美炎を尻目に、ふと私は残りの二人、七之里さん、六角さんに視線を向けた。

「ちっ…… あたしは刀使とやり合う趣味はないってのに……」

「それは同感ですね？ 私だって本当なら荒魂以外の人に御刀は向けたくないですよ」

「…… 今向けてるじゃねえか」

「それは貴女達が悪いんですからね？ さっき言いましたよね？ 私と事を構えますかって？ それで貴女達は首を縦に振ったんですから私も御刀を抜くしか無いじゃないですか？」

「……」

美炎も含めた三人が口をつぐんでいた。自分で言うのも何だけど、私は無意味に人に御刀は向けない。いわゆる人畜無害ってやつ。向けるとすれば任務の時、自分の身を守る時立ち合いの時、そして…… 私と敵対している時のみだ。敵対してても、相手が何も抵抗しないのであれば別に私は何もしない。前に真希さんにそのやり方は甘いつて

言われたことがあったけど、こればかりは妥協できなかった。さすがに無抵抗の人を斬るほど私は鬼じゃないからね……。

「美炎？確かに私は可奈美とは友達だよ？でもね……だからって何でもかんでも許せると思ってたら大間違いだからね？あの二人は紫様を襲ったの。それを看過できるほど私たちは甘くは無いからね？」

「紫音ちゃん……」

「……六角さんはどうする？何もしないんだったら私も六角さんには危害は加えないけど？」

「わたしは……」

六角さんは、すでに泣きそうな顔になってたけど、少しして何か決心がついたのかさつきまでの顔とは違って一人の立派な刀使の顔になっていた。

「わたしも…… 貴女と…… 芹代さんと戦う！」

「ふう…… わかった…… できれば戦いたくはなかったけど……」

「行くぜえ!!」

六角さんが御刀を抜くと同時に七之里さんが仕掛けて来た。両手に持った二刀の御刀を巧みに利用し、私にいくつもの斬撃を浴びせて来た。動きだけでもかなり速く、攻撃も正確さがある。少なくとも、今の美炎よりも強いかも知れない。二刀流の刀使と戦った経験はあまりなかったけど…… なかなか楽しめそうじゃん!

「はあっ!!」

「わっ!と……」

そんな事に夢中になると、今度は六角さんが私に向かって攻撃をして来ていた。

七之里さんの攻撃を捌きながら六角さんの攻撃を何とか躲した私だったけど、さすがに二対一だと分が悪い。……ここは、あんまり時間かけない方が良さそうだ……。それにしても……。六角さんも結構強いな……。

「(使おう……) 【迅移】！」

「なっ……消えた？」 「何処に……？」

「……ここだよ？」

「!!」

【迅移】を使って、私は七之里さんの背中越しにぼそつと囁くようにそう言った。そして……。そのまま容赦無く七之里さんの【写シ】を剥がした。

「ぐあっ!!」

「七之里さん!!」

【写シ】を剥がされた七之里さんは、瀬戸内さんのように片膝をついて肩を上下させていた。でも、しばらくは立てないでしょ？

「はああつ!!!」

「っ……」

七之里さんを尻目に、今度は六角さんが私の間合いに入ってきて、攻撃を浴びせて来た。それを難なく受け止めた私だったけど、その際少しだけ表情が歪んだ。

「(重っ! 華奢な体してなんて重い一撃してるの!?)」

六角さんのその予想外の重い一撃に私の手は少し痺れていた。やっぱり……この子は強い。

「はあっ！やあっ！せいっ！」

「……………」

嵐のように迫ってくる斬撃を私は蒼月を繰り出して相殺していった。でも……………その一撃がやはり重いため、いつもよりも力を使っていることが自分でもわかっていた。

「（一番頼りなさそうだと思ってた子だったけど……………もしかすると、調査隊の中で一番強いかもねこの子）」

「まだまだ……………！」

私と六角さんとの戦いは、まだまだ続きそうだった。

奇策の一手

「まだまだだっ!!」

「っ……………」

私と六角さんの戦いは続いていた。私が六角さんのことを舐めてたっけ言うならそれまでなんだけど、正直ここまでとは思ってなかったんだ。思いもなかった強者に私の口角がすつと上がっていた……………」

「……………」面白いね?」

「!?……………」な、何を……………」?」

「いや、久しぶりに面白い子に会ったって思っただけ? 六角さんって結構強いんだね?」

これならもう少し…… 力出せそう！」

「え!?!…… じゃあ、今までの……!!?」

六角さんが何かを言い切る前に、今まで受け手だった状況を一変させて、攻め手に移った。攻め手に移った瞬間、私は六角さんの剣技を後ろに流すように捌き、六角さんの態勢を崩した。それが予想外だったのか、重心を前に移していた六角さんは、その勢いを殺すことが出来ず、私とすれ違うようにして転んだ。

「少しだけど…… 本気出すからね？」

「くう……」

すぐに立ち上がって態勢を立て直した六角さんだったけどそれだけで、構えは隙だらけだった。その六角さんに向かって、楽しませてくれたお礼として、私は久しぶりにあれを使った……。

「第二段階【迅移】！」はっ!!」

「……………え？」

目の前の六角さんは、何が起こったのかわからないって顔をしてその場に崩れ落ちていった。私は【迅移】を使い、六角さんの間合いに入った後、蒼月を横薙ぎに一閃し六角さんの御刀を弾き飛ばした後、そのまま蒼月の一太刀を六角さんに見舞ったんだ。その間およそ一秒にも満たなかったかも知れない……………。

「……………」

六角さんを含めたその場にいた人全員が驚愕と共に怪訝な表情をして私のことを見つめていた。無理もないよね……………気づいた時には勝負ついちゃってたんだから。私もまさか第二段階【迅移】まで使うとは思ってなかったからなんて反応したら良いかわかんないんだけど……………。つてか私の場合、【八幡力】と併用して使ってるから速度も力も倍増してるから当然って言えば当然なんだけどね……………。

「…………… 美炎ちゃん」

「ちい姉……………」

「私たち…………… あの子に勝てると思う……………？」

「…………… 無理かも。紫音は昔から強かったけど、まさかあそこまで強くなってるとは思わなかったよ……………。正直言つて…………… 勝てない……………」

美炎はそう言いながらも、再び立ち上がり私を見据えていた。

「それでも…………… 紫音は…………… わたしが止めないと！友達のわたしが止めなくちゃいけないんだ！勝てなくても…………… それでも戦っていればきつと…………… なせばなるんだから！」

「その使い方どうなのかな…………… って思うんだけど…………… 久しぶりに聞いたね。美炎のそ

の口癖。…… 良いよ。相手してあげる！」

「行くよ！紫音!!」

私と美炎の第二ラウンドが始まった。

「くっ……」

「……」

わたし、木寅ミルヤは芹代紫音を他の四人に任せ、皐月夜見をわたし一人で対応するという判断を下し、今戦っている。こちらの戦いに夢中な為、後ろの状況はわからないが、さすがに四対一であれば負けることは無いはず……そう思っていた……だが。

「…… 私一人を抑えれば勝てるとお思いなのであれば……それは間違いですね……むしろ貴女が芹代さんを相手にした方が良かったかも……しれませんよ？」

「…… 何を言っている……!?」

皐月夜見のその言葉に一瞬嫌な予感を覚えたわたしは、とつさに後ろを振り返った。そこで見たのは…… 芹代紫音が瀬戸内智恵の胸元に御刀を突き刺して光景だった。

「瀬戸内智恵！」

「…… 貴女の相手は…… 私です……」

即座に助けに入ろうとしたわたしだったが、皐月夜見に邪魔をされ、それは叶わなかった。

「(助けに入れない以上、一刻も早く皐月夜見を倒さないと…… まずい)」

現状、それしか打開する手はなさそうだった。最終手段として、もう一つ手を打つてはあるが、それもうまく行くかどうか保証はできない。だからこそ今は目の前の敵に集中しなければならなかった。皐月夜見は強い、わたしで勝てるのかどうかも危うい状態だ。正直、これは賭けに近く、打開できる保証は何処にもなかった。

「あの四人では…… 芹代さんには敵いませんよ？」

「お前は何もわかっていない。調査隊は、たった一人の親衛隊に打ち崩されるほどやわな刀使は一人もいない！調査隊を舐めないでほしい」

そう言いながら、皐月夜見が操る荒魂を悉く倒していったわたしだったが、倒しても倒しても皐月夜見がまた新たな荒魂を出す為、キリがなかった……。

「……何もわかってないのは貴女達です。芹代さんは……親衛隊の中でも一、二を争うほどの実力者……たとえ調査隊が四人束になってかかったところで……彼女には……勝てない……見てください。あれを見てまだ同じことが言えますか？」

「何を……!!？」

わたしは……その光景を見て……目を疑った。わたしの目の前で立っている

のは、芹代紫音のみでその他の調査隊の四人はそれぞれ膝を落として肩で呼吸している者と、地面を這いつくばって立ち上がるのもきつそうな者とで分かれていたからだ。それを見た途端に、先ほどの皐月夜見の言葉がリフレインした……。

『あの四人では…… 芹代さんには…… 敵いませんよ?』

「(あの言葉は決してわたしを惑わす言葉では無かった…… ということか?)」

思わず唇を噛んだわたしだった。なぜ今になってそれに気づいたのかと。もしももう少し早く気付いていればそれなりの対応ができたかもしれない事実と、相手の真意を測ることが出来なかった自分の未熟さにだ。

「(こうなってしまった以上…… もはや“さっきの手”がうまく行くことを祈るしか……)」

「…… 隙だらけ…… ですよ?」

「!?しまっ……」

雑念が出てしまっていたせい、構えにも心にも隙ができてしまつたらしい。その隙を皐月夜見が見逃してくれるはずもなく、荒魂でわたしの動きを封じながらわたしの元に接近し、胸元を斬り裂いた……。

「ぐっ……」

「…… これまでですね？」

膝をついたわたしを見下しながらそう言ってくる皐月夜見。【写シ】が剥がれ、もう一度張れるほどの体力ももう無かった…… 万事休すか。そう思った時だった……。

皐月夜見の携帯が………
鳴ったのは。

「はあっ!!」

美炎と改めて対峙した私は、美炎の攻撃を捌いたり躲したりしながら戦っていた。美炎の実力は、普通の刀使の中では強い部類に入るのかもしれない。実際、校内予選でも準決勝まで行くぐらいだったみたいだね。でも………。

「まだまだ甘いよ?」

「うっ……」

「またも自分の攻撃が簡単に捌かれた事実には、美炎は苦渋の顔をしていた。私はほとんど攻撃をしてない為全く疲れてないのに対して、美炎に至ってはすでに息を切らしている。【写シ】が使えなくなってもおかしく無い状態だった。」

「…… まだ続ける? 私はこれ以上戦いたくないんだけど?」

「戦うよっ! 紫音が可奈美を追いかけるっていうなら…… わたしはいくらでも相手になる!…… 絶対に負けられない…… 可奈美やみんなを守るんだから……」

「……?」

「息を整えてそう言った美炎だったけど…… なんだろう? 雰囲気は少し変わったよ
うな気が……」

「わたしは…… 負けない!! 絶対にみんなを…… 守って見せる!!!」

「!!?」

目の前の美炎の変化に私は驚きを隠せなかった。それは他の調査隊の人たちも同じだった。美炎がそう叫ぶのと同時に美炎の身体の中から赤い炎のような鬨気が溢れ出してきて、その鬨気が美炎の身体中を守るようなベールへと変化を遂げ、美炎の周りを覆っていた。まどつてる空気も妙に熱く、近づいただけで焼けてしまいそうなほどの熱量を持ってそうだった。…… 美炎に一体何が起こってるの？

「やあっ!!!」

「っ!!!」

いきなり攻撃を仕掛けてきた美炎。その速さと攻撃の重さは、さつきとは比較にならないほどの物だった。なんとか受け流すことはできたけど、それでも御刀を受け止めた

時に走った痺れはいまだに取れていない。この痺れは、さっきの六角さんの時以上だった。

「(くっ……… パワーは結芽と同じかそれ以上かも………) 【迅移】！」

「はあっ！」

「!? …… まさか、ここまでとはね……… ?」

私は二段階【迅移】を使った。さっきまでの美炎だったら、何も出来ずに斬られて終わってたかもしれないけど、今の美炎は、そんな私の攻撃を自身の御刀を一閃して相殺して喰い止めた……… これは正直予想外だった……… でも。

「……… 面白い。こんな戦い久しぶりだよ」

純粹にそれだった。最近はこんな息をつかせないほどの戦いは全くと言っていいほど無く、正直つまらなかつた。だから、今は美炎には感謝してる。私の胸を踊らせてく

れて……。

『——ほう？余と同質の者が現れるとはな？——』

「……え？」

「私は不意に周りを見渡してみる。さつき聞こえた私たち以外の声の主を探すためにだ……。でも、その主は影も形も無く……。気のせいか……。そう思ってた時だった。」

「(っ?!……さ、寒っ!何これ!?さつきまで美炎のおかげで少し暑いくらいだったのに……。何が……。起こってるわけ?)」

急な寒気に思わず私は顔をしかめた。周りの様子も変化がないことから、気温が変化したわけでは無さそうだった。それに寒気の仕方も……。なんだか、自分の体の中だけ、妙に冷気を纏った感じで留まっただけ、私の体が氷みたいに冷たくなっている……。そんな感じがした。

「(……それに、さつきから眼がおかしい……。前とは違って使っても無いのに勝手に【未来視】が起こる……。見たくも無いのに……。)」

以前から度々出てきていた眼もなぜか出て来ていたけど、今回はいつもとは違った。普段であれば、眼をなんとかコントロールできているんだけど、今回はそのコントロー

ルが出来なかった。抑えようとしてもどんどん情報が入って来て、不必要な未来をどんどん見せて来ていた。美炎の次の攻撃、太刀筋、速度、姿勢周りの状況それら全ての情報が一気に私の頭の中に雪崩れ込んできた。……次第にその情報量に私の頭が耐え切れなくなり、ひどい頭痛が私を襲った。

「うっ!!」

「……紫音？」

思わず私は膝をつき、気持ちを落ち着けさせた。美炎も私の異変に気がついたのか、心配そうな顔をして私の方を覗いていた。……心配かけちゃったね。

「だ……大丈夫。ちよつと頭痛がしたただけだから……それよりも、攻撃しなくていいの？今の私……隙だらけだよ？」

「馬鹿言わないでよ！そんな状態の紫音を斬ることなんて出来ないよ！……っ！」

そう言った美炎は、御刀をしまつて膝をついてる私のところに走つて来た。それと同じにさつきまでの熱い闘気は消え去り、いつもの状態の美炎に戻った。

「ほら、掴まつて……」

「全く……せつかくのチャンス逃しちやつて……。私を倒して可奈美達を守るんじゃない無かつたの？」

「だからって……そんな無防備の状態の紫音を……友達を斬るほど私は修羅じゃ無いよ」

「……ありがとうね」

その美炎の優しさに、身体中に熱がこみ上げてくるのがわかった。そして、さつきまであった身体の妙な冷たさと寒気、そして未来視はようやく治まった。頭の痛さは今もまだあるけど……どうやら……なんとかなったみたいだね。

「…………… 芹代さん」

「夜見さん……………」

私が呼ばれた方を振り返ってみると、そこには何故か御刀を納めた夜見さんと木寅さんの姿があつた。

「すみません夜見さん…………… 私……………」

「…………… 問題ありません。では、芹代さん」

「はい？」

次の夜見さんの口から出た言葉はあまりにも意外な言葉だった。

「私たちは撤退しましょう……………」

激戦のその後

「撤退……ですか？」

夜見さんから言われたその一言に少なからず私は驚いた。急に撤退なんて言われれば誰でも驚く。もちろんそれは美炎達も同じだった。

「はい、先ほどこちらに綾小路の相楽学長と……長船の真庭学長から連絡がありました。……調査隊とは事を構えるなど言う指示を受けましたから……」

「……… そうですね。でも、それなら私たちはこのまま先ほど逃げた二人を追いかければいいんじゃないですか？そちらは関係がないですよね？」

納得できなかつたのがまさにそれ。調査隊と戦わないのなら、そのまま二人の追跡に移れば良いだけの話……。それなのに何故撤退しなくちやいけないのか理解できなかった。

「それが…… どうにも先ほど、二人を発見した獅童さんと此花さんが予想外の反撃を受け、取り逃した上手傷を負ってしまったとの報告がありまして……。対象を見失つた以上…… これ以上の搜索は無意味という判断が下され、撤退という命令が…… 下されました」

「あのお二人が…… 取り逃した？」

少なからず驚いた私だった。あのお二人の強さは自分がよく理解してる。並大抵の腕では相手にすらならない人達なのに可奈美達はなんとか退けた。その事実には動揺し切っていた。そして、その動揺が私の体に響いたのか、再び強い頭痛が襲つて来た。

「っ……」

「紫音……………？大丈夫？」

「うん……………なんとか……………」

肩を貸して貰ってる美炎に、そう言っただけで正直結構キツかった。さっきまでであった妙な寒気みたいなのはもう無くなってるけど、頭痛は今もなお続いている。幸い、歩けないほどでは無かった為帰る分には申し分なかった。これは……………早く帰ったほうがいいね。

「芹代さんは……………大丈夫ですか？」

「大丈夫です。一人で歩けますので……………美炎、もう大丈夫だから……………」

「……………そう？まだ顔色が悪いみたいだけど？」

「そんなに脆く無いよ……………とは言っただけど正直まだ辛いから、帰ったらすぐに横になるとするよ……………」

その後、私たちは調査隊と共に真希さんと寿々花さん達と合流した。二人は報告にあつた通り、軽い手傷を負っていたけど、特に問題なく話せていた為任務に支障は出なさそうだった。会つた際、二人とも悔しさを滲ませながら何か言つてたけど、そこは踏み込むのは良く無いと思ひそつとしておき、私は他のみんなと共に鎌倉に戻つていった。

「……………
ねえ、紫音？」

「……………
？どうかした？」

鎌倉に帰る道中の車の中、隣に座っていた美炎が何か聞きたそうな顔でこちらを見ていた。

「さつきはどうしたの？急に頭を押さえて……………
それに、今も痛いんでしょう？
頭……………」

「……………」

聞きたいことはそれか……………。それは、逆に私が聞きたいことなんだよね……………。

「私にも良くわかんないんだよ……聞けどき？あの時、私たちの他に誰かの声が聞こえた？」

「声？……いや、聞こえなかったけど？」

その美炎の答えにやはりか……と納得した。やっぱりあの声は私にしか聞こえてなかったんだ……。

「私には聞こえたんだよその声。その声が聞こえたと思ったら……急に身体中が寒くなつて、眼まで制御が出来なくなつて物凄い量の未来を私に見せて来て……そのせいで今までに無いくらいの強い頭痛が襲つて来たんだ……」

「未来？……眼？どういうこと？」

未だに話が理解できてない様子の美炎。これは、説明が必要そうだね。

「簡単に言うと、私には前から不定期で未来が視える眼があったの。なんでその眼が使えるのかは分かんないんだけど、とにかくその眼を今までは何とか抑えることが出来たの。私が必要と思った情報だけを脳に送る……みたいなの。でも……さつきはそれが出来なくなつて……」

「なるほどね……だからさつき、紫音の右目が……金色に変わつてたのか……」

「へ?……金色?」

「うん。右目が金色に変わつてたよ?……不気味に」

……初めて知つたよそんなこと。眼の色が変わるなんて……そんな事例聞いたことないよ?

「私の体……どうなつてるとだろ?さつき頭の中に響いて来た声も気になるし……」

「……なんて言ってたの？」

「『余と同質の者が現れるとはな？』……って言ってたかな？ちょうど美炎が変化を見せた時だよ……」

「変化って言っても……あの時の記憶はあんまりないんだよね。みんなを守りたい……力が欲しい、そう願ったら自然と体の中から熱が込み上げて来て……力が溢れ出てくる感覚があつたつてくらいしか思い出せない……」

「そっか……」

私の体の異常もそうだけど、さっきの美炎の変わりようにも何かあるとしか思えない。あの力はとても美炎の力とは思えないし、力もどんどん大きくなっていった。あの力が暴走してしまつたら……と考えてしまうと、背筋が凍る……。

「何もわからない以上……様子を見るしかないね？」

「うん…… そうだね……」

結局明確な答えが出ないまま、私たちは会話を終えた。この問題が解決するのはまだまだ先みたいだね……。

やり切れない悔しさ

あれから私たちは鎌倉へ戻り、私たち親衛隊は折神家の屋敷へ、美炎たち調査隊は寮へと戻って行った。いまだに体調が優れない私はすぐに部屋へと戻り、床についた。

翌日になりある程度は体調が優れた私は、いつものように着替えと身嗜みを整えた後、鍛錬のため訓練場まで赴いていた。だけど、そこにはちようど先客がいた。

「……真希さん？」

いたのは真希さんだった。真希さんの鍛錬の様子を見るのはあまり無かったけど、どうにも様子がおかしかった。いつものような冷静な状態ではなく、どこか投げやりというか怒りに任せて御刀を振っている感じで、このままやっていてはどこか体を痛めるのではないかと思えるほどにひどいものだった。……流石にそれを見逃すほど私は鬼じゃ無かった。

「そんな闇雲に鍛錬していてもただいたずらに体を痛めつけるだけですよ？無理はしないてください。怪我人なんですから……」

「……紫音か」

私の声に気がついた真希さんは手を止めこちらを振り向いた。やつぱりと言うか真希さんの顔からは焦りと怒りの混じったような表情が浮き出ていた。昨日の任務の失敗を気にしているみたいだね……

「真希さん……いくらやつても昨日の任務の失敗は取り消すことはできないんですよ？それはもう過ぎ去ったことです。ですから、今は次に備えて体を……」

「それが許せないんだ！僕は紫様から授かった大切な任務を一席という立場でありながら失敗をしたんだ！しかもこんな怪我までして……これでは紫様に申し訳が立たない！だからこうして鍛え抜いて次の任務に備えているんだ！」

「はあく………」

それはわかるけどそれで怪我が悪化したら元の子もないでしょう真希さん……。

「それで怪我が悪化すればこの後の任務にも支障をきたします。お願いですからこれ以上はやめてください」

「断る。怪我が悪化しようと思ったことか！僕は強くならなければならないんだ！」

「……はつきりいますけど、今の状態の真希さんでは紫様の護衛と親衛隊のことを任せられませんね？」

「っ!!なんだと!?!」

激昂した真希さんが声を荒げて私に詰め寄ってくる。私は怯みもしないでそのまま話を続けた。

「なっ・・・・・・・・ばかな・・・・・・・・」

一瞬にして自分の御刀がはじき飛ばされた事実には、真希さんは困惑を隠し切れていなかった。・・・・・・・・やっぱり今の真希さんは・・・・・・・・弱い。

「言っただでしょう？弱くなってるって。まず第一に真希さんがさっきの私の挑発に乗ったことこそ間違いです。親衛隊はいついかなる時も心を静め、冷静沈着で任務遂行にあたる・・・・・・・・。それが決まりのはずです。そして臨機応変な対応や判断、行動をすることを紫様にも言われて来たのに・・・・・・・・今の真希さんは、紫様のその言っていたことを踏みにじっていたんですよ？それをわかっていますか？」

「っ!!!」

私の言っている意味が分かったのか・・・・・・・・真希さんはすつと肩と膝の力が抜け、その場に膝をついた。・・・・・・・・少しは落ち着いたかな？

「だから私は今の真希さんには任務ではなく体を治すことを優先して欲しいって言ったんです。無理をしてみた怪我をされてはたまりませんから。それに、それを紫様が望んでいるとも私には思えませんしね」

「僕は．．．．．また．．．．．」

「失敗は誰にでもあることです。とにかくしばらくは任務に出なくていいです。他の皆さんには私の方から話しておきますから．．．．．。今はとにかく、怪我を治すことに集中してください」

「ああ．．．．．わかったよ」

ようやく納得してくれた真希さんは、御刀を鞘にしまうと訓練場を後にしようとした。．．．．．。ただど出る前に真希さんが私の方へ振り向いた。．．．．．。何かあるのかな？

「紫音．．．．．ありがとう．．．．．それと、すまなかった。いつ復帰できるかわ

からないが、必ず戻ってくる。多分寿々花も同じだ。だから……しばらくの間は紫音。君が親衛隊を引つ張って行ってくれ。……頼む」

「ふふ……私のこと過大評価しすぎですよ。でも真希さんにそこまで言わせたらやらないわけにはいかないですね！はい！お任せください！」

私の返答に満足したのか、真希さんは今度こそ訓練場を後にした。……私もあそこまで言っちゃったんだから頑張らないとね！訓練場の中で一人、拳を握る私だけだ……。